

漢体これくしょん 日東丸提督のブラ鎮建て直し物語

かのんべール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

徴用船。それはかつての大戦で戦った漁船のことだ。そして世界共通の認識として船は女である。が、何事にも例外は存在する。そう、漁船は男なのだ。

これは、もし艦娘である提督がブラック鎮守府に赴任したらどうなるのか？という所謂ブラ鎮建て直し物です。

メインヒロインは天龍となっております。

その他那珂ちゃん、長門が登場しますがあまり出番は多くありません。それ以外のキャラクターはほとんど登場しません、空気です。龍田、間宮、大淀、金剛、加賀、雷、神通、夕張、吹雪、ゴージャ辺りがちよろつと登場するくらいです。

※筆者は提督ではありません。アニメ及び漫画（水雷戦隊クロニクル、アンソロジー、いつか静かな海で）、SSその他二次創作の知識で書いております。また独自の世界観にお付き合い頂きたく思います。あと無駄な描写が多いです。現実感を出そうとして失敗しました。

目次

序章 艦娘も出てこないし、読まなくても大丈夫っぽい！

日本海軍爆誕！ | 1

絶望 | 7

ん？流れ変わったな | 9

長門ちゃん | 12

アスロツク米倉 | 16

本編 天龍ちゃん p r p r タイム

提督参上 | 20

提督ピンチ！ | 23

提督、道徳を見失う | 26

さらば天龍、安らかに眠れ | 31

改革開始 | 36

会議 | 41

茶番 | 46

社畜生産 | 50

PE (ポリエチレン) | 54

那珂ちゃん | 59

天龍ちゃんとデート | 65

天龍と新婚準備 | 71

見えそつで見えない | 75

改革最終日 | 81

お化け屋敷 | 86

提督はボツチじゃなかった!?! | 90

準備 | 95

鎮守府祭

あー！泣かせたー！

不幸だー！！

次回 天龍死す

天龍と同棲生活

提督、化けの皮が剥がれ始める

俺達の戦いはこれからだ！

101

106

112

117

124

131

136

序章 艦娘も出てこないし、読まなくても大丈夫っぽい！

日本海軍爆誕！

第二回目の日本国憲法第4条の改正に伴い、自衛隊は軍隊へとその組織形態を変えた。

俺が高校二年のこの出来事である。

俺には自衛隊に入り、国防に携わりたいという夢があった。両親もこの事に反対はしていなかった。しかし自衛隊が軍へと変わったことにより、その任務の危険度は跳ね上がった。実際はそこまで変わっていないかったのかもしれないが、内情を知らない俺たち一般人には少なくともそう感じられた。結局俺は両親の反対を説得することが出来ず、一般の大学へと進学することにした。幸いにも防衛大の偏差値は結構高く、確実に合格する為に勉強は人並み以上に出来ていたため、東大へと進学することが出来た。なぜ東大かと問われれば、国家総合職試験の合格者が一番多い大学だからだ。この試験を突破出来れば面接をした後に各省庁の官僚となれるのだ。勿論防衛省が狙いだった。

自衛隊が軍隊となってから五年の歳月が流れた。それは俺が新卒となることも同時に意味していた。しかし自衛隊は軍隊となってもやはり自衛隊と本質的にはなにも変わらなかった。俺はしづる両親を今度はなんとか説得することに成功し、軍隊への入隊を果たした。一般幹部候補生としての入隊だ。なぜ防衛省に行かなかったのか。それは俗に言う背広組よりも、現場で指揮を出す制服組の方が俺には向いていると思ったからだ。あと、船に乗りたかった。ジパングの影響を受けてだが、まあそんなにふざけた動機でもないと思う。運転手や乗組員はその乗り物が好きな奴が大半だと思うからな。

一年の研修期間（と言う名の地獄）を終えて、俺は小尉として軍に派遣された。しかし入隊したての若造にとってこの階級は少し荷が重かった。まず指揮をする部下が自分よりも年上なのだ。当然経験

値の差が違う。また同じ小尉でも叩き上げの幹部というのもある。これは通常の隊員がその業績を評価されて幹部となったパターンだ。その圧倒的な差は経験値だけではなく、部下からの信頼だ。幹部は一年間地獄を経験したとはいえ、下級士官が経験してきた現地の辛さとは比べ物にならないのだ。だから幹部には部下の気持ちを理解することが難しい。故に配慮が足らなくなってしまふ。ここに幹部候補生と部下との間に拭い去り難い確執が生じるのだ。

それでもなんとか信頼を得ようと努力している矢先の出来事であった。アメリカの空母が所属不明の艦によって撃沈させられたのだ。この知らせは世界を震撼させた。特にアメリカと同盟関係にある日本海軍に与えた衝撃は大きかった。すぐさま軍の上層部は会議を開き情報の収集と対策の立案に乗り出した。その日の消灯ギリギリの時間に幹部候補生も会議へと招集された。会議とは言っても俺たち若造は大本営の報告を聞くだけであるが……。

会議室に入ると見知った同期の顔もちらほらと見られた。だがその顔は皆一様に暗い。不安が滲み出ている。部下の不安を煽るまいと、不安を顔には出さないように今日の訓練は過ごしたつもりだが、やはり俺もこいつらと同じような顔をしてしまっていたのかもしれない。

緊張感の漂う会議室に毅然とした声が響く。

「これより大本営から元帥殿のテレビ中継が繋がれる！姿勢を正して静聴するように！」

皆が姿勢を正しているのだろう。衣服の擦れる音が会議室に更なる緊張感を与える。

程なくしてプロジェクターのスクリーンに一人の男が映る。シワの刻まれた顔に白髪混じりの髪、しかしそこには年老いて弱った気配は微塵も感じられない。むしろ画面越しにひしひしとのし掛かるような威圧感が感じられる。

「まずは我々大本営の会議が長引いたことで諸君らを夜中に招集することになってしまった非礼を詫びよう」

そう言っ頭を下げる元帥に皆が敬礼で答える

「さて、諸君らもすでに耳にしているとは思いますが今日未明アメリカ空母が所属不明の軍艦により撃沈された。同盟国である日本の我が軍も協力して敵艦の捜索に努めているが未だ発見には至っていない。生存者の証言によれば攻撃される直前までレーダーに軍艦の姿は無く、魚雷は何もない太平洋のど真ん中から発射されたとのことだ」

にわかには信じ難い内容だった。アメリカの最新鋭のレーダーに引っ掛かること無く、それもたかが魚雷で空母が沈められたと言うのだ。これには会議室にもざわつきが広まった。

「勿論何もない所から魚雷は生まれない。おそらくレーダーに感知されないステルス性能を搭載した軍艦だろう。またこれだけの捜索にも関わらず発見に至っていない以上、潜水艦の可能性が高いと推測される」

確かにレーダーに掛かること無く海の中に隠れるのであれば、かくれんぼにおいては無敵だな。

「しかし、現在アメリカと合同で張っている包囲網を抜けることは不可能である。敵艦の発見は時間の問題と言えるだろう」

会議室に安堵の声が漏れる

「しかしだ、問題はもう一点ある。魚雷だ。報告によれば魚雷に対する迎撃は一切が効かなかったそうだ」

そう、たかが魚雷で空母が沈む筈が無いのだ。魚雷に対する対抗策は当然持っているし、ただ一方的に沈められると言うのは通常であればあり得ない事態なのだ。そう、通常ならば。

「魚雷の方向をある程度ずらすことには成功したそうだが、恐らく魚雷本体には傷一つ付けられていなかったであろうとのことだ」

レーダーから完全に逃れるステルス性能。最新鋭の迎撃システムが通用しない魚雷。恐らく軍艦本体の強度は現在の科学の常識を覆すレベルのものだろう…。時間の問題、とはいかなそうだ。一体どこの国が、なんの目的でかは分からないが…

「アメリカが攻撃された以上、日本も攻撃対象である可能性が高い。これより日本軍は警戒体制を厳とする。諸君らには今一度態度を引き締めて国防に努めて欲しい。以上！」

それから一週間がたち、俺の所属する部隊は海の上での警戒任務に就いていた。こうして穏やかな海を見ていると本当にこの海の何処かに敵が潜んでいるとは思えなかった。

(このまま何事もなく終わればいいんだがなあ…)

どこか緊張感が緩んできていたその時だった

「入電！ 大本営より各艦隊へ！ インド洋、大西洋、太平洋の順に相次いで敵艦が出現！ レーダーの反応無し！ 水上に小さいながら敵影を確認！ 潜水艦の可能性有り！ 既に日本軍にも攻撃が行われている模様！ 各艦隊警戒を厳にせよとのことです！」

(もともと警戒は敵の筈なんだがな…)

そんな現実逃避気味な突っ込みは艦長の声で吹き飛ばされる

「総員戦闘準備！ 奇襲に備えよ！ いくら相手がステルスを使おうともミサイルはレーダーに映る！ どんな小さな影も見落とすな！」

(頼むからうちには来ないでくれよ…)

「魚雷音聴知！ 210度高速接近！」

(うわあ… マジかよ…。しかも俺が哨戒してる方角じゃん…。…。ん？ なんだアレ、人影？)

「主機起動、異常無し！」

「軸ブレーキ離脱！ 最大船速！」

魚雷に対する対抗策。この船には回避位しか選択肢はない。数年前にアメリカが開発した魚雷迎撃システムの日本での配備はまだまだ進んでいない。

「こんな船で最新鋭のミサイルから逃れられると良いけどな…。」

(最悪、数十秒後には海の藻屑になる覚悟も必要かもしれないな…)

「距離150ヤード！ 接触します！」

そろそろ着弾か…。最後に小尉らしいこと言っておくか…

「衝撃に備え！」

叫んでから頭を抱えてしゃがみ込む。

「後5秒、4秒、3秒、2秒、1秒」

研ぎ澄まされた神経のなかで一秒が何倍にも引き伸ばされる。しかし、なかなか衝撃は訪れない…。

「魚雷全弾かわしました…。遠ざかります…」

まさかかわせるとわな…。それにUターンしてくる気配もない…。固いだけで所詮はただの魚雷だったということなのだろうか…。

「新たな魚雷音を聴知！」

(ふざけるなよ!?!しつこ過ぎるだろ! いい加減にしろよ!?)

「目標は!?!」

「174きりしま! 当艦ではありません」

確か174は迎撃システムを搭載してる筈だったな…。だったら俺達は撃沈に挑むしかないな。まあ敵影の報告はしておかなくては。

「艦長! 120度に敵影らしきものを確認!」

「本当にアレなのか…?」

「魚雷の角度からして間違いはないかと」

「人影のようにも見えるが…。それにレーダーにも反応は出ていないが…」

「とても魚雷を発射出来るサイズの反応じゃないですね…」

「しかし魚雷があそこから発射されていることに違いはありません」

「分かった。大本営からも敵艦を発見次第速やかに攻撃に移行せよとの通達が出ている」

程なくしてアスロックとトマホークの発射がなされた。少し戦力過剰な気もするが、それくらいの方が今まさに攻撃されている俺達の精神的にはありがたいな。

「魚雷接触まで後5秒!」

は…?」

「迎撃に失敗したのか…!?!」

「後1秒」

直後、少し離れた場所で水柱が上がった。それは信じられない程の威力だった。皆が呆然とする中放たれたミサイルだけが動き続ける。

「アスロック接触まで後5秒!」

その声に皆が我を取り戻す。

「命中!」

「続いてトマホーク弾着します！」

「命中！」

船内に歓喜とも取れないどよめきが起こる。

「目標……っ！」

撃沈を知らせる筈の報告が一瞬途絶える。

「目標、目立った損傷無し……」

それはまさしく絶望。あれだけの火力を食らっておきながらの無傷。その時、乗組員の全員が奴に勝てないことを悟った。

結局俺達の艦が逃げ切れたのはただ運がよかつただけに過ぎない。敵の攻撃はきりしまにとどめを刺す為に向けられ、港まで敵に遭遇しなかつたのはただの偶然であった。どれか一つでも欠けていれば俺は今頃海の藻屑だっただろう。

絶望

世界各国に突如として現れた正体不明の敵は深海棲艦と名付けられた。しかしそれは艦とはいふものの、船と定義付けてよいものかは甚だ疑問であった。何故なら奴らの見た目はただの女性なのだ。人間が二本足で海面に佇み、背負った艤装で攻撃をして来る。それだけでも相当なイレギュラーだった。しかし、最悪だったのはそこではなかった。奴らには攻撃が全く効かないのだ。いや、全くといったら語弊があるな。先日ロシアがミサイルによる核攻撃を実施した。しかしその結果は深海棲艦一体を撃沈させただけに過ぎなかった。当然国連からは強く批判された。なによりも、そんな方法では次から次に湧いて出てくる深海棲艦には対処仕切れない。そもそも環境汚染が酷すぎて現実的ではない。

結局人間は未だに深海棲艦に対する対抗手段を持ち合わせておらず、次々に敗戦を繰り返しては制海権をどんどん失っていった。それでも日本は島国である為、制海権を失う訳にはいかなかった。その結果、深海棲艦の足止めのために次々と海軍が全線へと送り込まれていった。生存率0%の戦地である。小尉である俺は本土で訓練をしては士官を船に詰め込んで見送ることしか出来なかった。部下の気持ちを理解できる指揮官になりたかった。しかし現実には常に非情だ。部下達からしてみれば俺は死神にしか見えなかっただろう。自分は戦地に赴かず偉そうに本土で命令を出しているだけの無能に見えただろう。何度も敵意の視線に晒され、暴言を吐かれ、殺されかけもした。流石に軍から逃亡しようかと考えたこともあった。しかし、そんなことをすれば家族が無事では済まないだろう。人質なのだ。緊急事態に置いて、日本から人権が消えていこうとしている。大戦時の日本へと戻りつつある。結局いくら時が経とうとこの国の本質は変わっていないかったのだ。

そんな俺にも遂に出撃命令が出た。幹部候補生にも前々から出撃命令が出始めていた。俺は下級士官の訓練の成果がある程度評価されており、特例で中尉に昇格していた。だが、それも今日までだ。恐

らく俺がわざと訓練期間を長くしていたことに気付かれましたの
のだろう。部下達の出撃の時を少しでも遅くしようとの、浅はかな考
えによるものだった。

「全線への派遣につき、貴官の活躍を期待し二階級特進とする！」

ようは少佐として死んでこいと言うことだ。恐らくは本物の小佐
が出撃したくないが為の采配だろう。幹部は自分が出撃したくない
が為になるべく下の階級の人間に出撃させたいのだ。

ん？流れ変わったな

ここはどこだ？

空にはアメリカの戦闘機が飛んでいる。

船の乗組員が慌てながら打電する。

乗組員2人が機関銃に撃ち抜かれる。

機関銃が1機の戦闘機を撃墜する。

それから30分もしないうちに俺は撃沈された。

……

景色が変わる。また海だ。

潜水艦が近づいてくる。

どうやら俺のことを漁船だと勘違いしているらしい。攻撃はない。

予定通り、地引き網に潜水艦が引っ掛かる。

船がどんどんと傾いていく。

俺は撃沈された。

……

またか……

もう何度も撃沈されている。

次は特攻だ。

速力7ノットの船で速力20ノットを越える洋巡艦に突撃する。

特攻できずに撃沈された。

だが、乗組員は諦めてはいなかった。

敵艦のスクリューを目指して泳ぎ始める。

人間魚雷。

彼は軍人ではなかった。漁師だ。

彼らの最後の打電は天皇陛下万歳だった。

軍人よりも軍人らしく、誇りを持って国のために尽くした彼らが俺

は好きだった。

そうだ、俺は……

「……っ！」

目が覚めるとそこは地獄だった。だがそこに屈強な漁師は居なかった。変わりに居たのは深海棲艦だ。仲間は全滅。残ったのは指揮官の俺だけのようだ。

だが、絶望はない。俺には目の前の深海棲艦を倒す自信があった。俺は立ち上がると艦装を展開した。やり方は生まれたときから知っているかのように分かった。むしろ今まで出来なかったことの方が不思議なくらいだった。今の俺には二つの記憶がある。小佐になるまでの記憶と、日東丸としての記憶だ。

日東丸。

それは徴用船となった漁船の名前だ。日清戦争のころから民間の船が軍に回収され始めた。それが徴用船だ。特に漁船の徴用船と漁師の組み合わせは最強だった。台風を難なく乗り越え、荒海でさえも掻き分けて進む。さらにレーダーの技術が遅れていた日本軍において人間レーダーの役割をも果たした。彼らは黒潮部隊に配属され、国の盾となるため哨戒活動に当たった。しかし、敵艦隊をどれだけ早く発見出来たとしても打電により敵に居場所がバレてしまっていたため、すぐさま撃沈させられていた。生還率は三割。出撃したが最後、戻ってくることは出来なかった。故に彼らは特攻船と呼ばれた。彼の有名な特攻隊と同じように厚遇された。しかし、徴用船の存在はひた隠しにされていたために記録は殆ど残っておらず、今日までその武勇がもてはやされることはなかった。しかし、地引き網で潜水艦と戦ったり、爆撃機を打ち落としたり、特攻を仕掛けたり、人間魚雷になったりと、分かっているだけでもその武勇は正しく英雄である。7.7m機銃。良くても57mm砲や、爆雷。いずれも貧弱な武器であった。それでもなんとか成果を出そうと奮闘した海の男達の魂は今、一体の日東丸として復活を遂げた。

その日、どこからともなく現れた少女たちが次々と深海棲艦を撃沈させていった。今まで傷一つ付けることの叶わなかった相手を年端も行かぬ少女たちが倒してしまったのだ。彼女たちを深海棲艦と勘違いして攻撃した艦隊もあった。しかし彼女たちには傷一つ付けることが出来なかった。まるで深海棲艦のように。人々は彼女たちを

畏怖した。しかし同時に歓喜もした。彼女たちは少なくとも人類の味方であった。ようやく見いだされた勝機に人類は安堵したのだ。彼女たちはどこから来たのか？何者か？誰もが疑問に思った。しかし、彼女達には記憶がなかった。気づいたらそこに居たそうさ。だが古い記憶はあった。それは彼女たちが戦艦だった頃の記憶。そして撃沈された時までの記憶だ。人々は彼女たちをこう呼んだ。

「艦娘」と。

長門ちゃん

俺はボロボロになったイージス艦に乗り込んで帰港した。艀装を展開して生身で帰りでもしたら最悪は実験台にされかねないと考えたからだ。

が、結局それも杞憂だった。恐らくは俺の仲間であろう筐体が次々と日本に現れたからだ。俺の帰港は日本海軍初の帰港ではあったが、艦娘によって助けられた他の前線の隊員も同様に帰港を果たしており、俺も助けられた隊員の一人として処理された。

筈だった。

問題は俺の配属されていた海域には艦娘が出現していなかった点である。もし艦娘が嘘をついているとしたら、ただでさえ多い不安の声を煽ることになる。だが、俺も本当のことを告げることにはせずに気を失っていたの一点張りを通した。俺は紛れもなくイレギュラーなのだ。艦娘は読んで字のごとく女だ。だが漁船である俺は男なのだ。結局、俺が実験台にされる可能性はどこまでも捨てきれず、現場を混乱させてまで俺は自らの保身へと走ったのだ。

国民や他国への説明のために上層部は大忙しであった。そのため謎の多い俺の海域に関しては俺が自力で帰港したのだと強引に解釈をし、俺を一階級昇進させることで早期解決が図られた。

23歳 中佐

異例の昇進スピードであった。が、艦娘のインパクトが強すぎて気に止める者は誰もいなかった。棚ぼたではあったが少しは褒めて欲しかった。

艦娘を指揮するには人間から選出された提督が必用とされた。提督には妖精が見えることが絶対条件であった。すぐさま全国から少佐以上の階級の者が集められ、適性検査が行われた。しかし、適合者の数は極めて少なかった。結局大本営に勤務する者と提督として鎮守府に配属される者とを合わせて、当初予定していた人数にギリギリ届いたくらい的人数しか適合者は現れなかった。もちろん漁船であ

る俺には妖精が見えた。結果、俺は晴れて提督候補生となったのだつた。

大本営の提督候補生仲間には殆どが歳上であり、友達が出来るとかそういうことは期待できそうになかった。俺達は候補生ではあったが一人につき一体の艦娘が秘書艦として与えられた。大本営での教育もあつてかその扱いには様々な対応が見て取れた。兵器としてぞんざいに扱う者、性の捌け口にする者、射撃の的にする者、人として尊重しようとする者、腫れ物の様に扱う者。実に多種多様であつた。因みに大本営としての教育では艦娘は兵器であるとの見解だつた。勿論、人権などは有していない。俺は自分の正体をますます隠すよう努力した。

当然俺にも艦娘が至急された。長門だ。まあ俺はコイツのことが嫌いではない。ただ、ちよつと苦手だ。そのことあるごとにビツグ7なことを自慢するのやめてくれませんか？こっちは無理やり連れてこられて漁船としての本望を遂げることなく撃沈された身なんですけど…。本当は大漁の旗を掲げて帰るのが俺の喜びな訳であつて、間違つても敵を倒すことなんかじゃない。まあ相手はそんなことは知る由もないだろうがな。まあ要するに未練と嫉妬だ。

「定刻だ、行くぞ」

「うむ」

秘書艦には決まった回数分の訓練が課せられている。これには提督も同伴して沖に出なければならぬ。

近海に敵艦を含めた障害が無いかを確認する。次に閃光弾を打ち上げて訓練の開始を近海の船に伝える。最後に大本営からの許可を取り付けて、訓練開始である。訓練の内容は提督が決めるために様々であるが…

「こい！長門！」

「うむ！全力で行かせて貰う！」

俺のメニューは演習だ。

「また負けてしまったか…。やはり提督は強いな」

「いや、長門の練度も上がってきている。抜かされる日は近いかもし

れないな」

そう、現時点では俺の方が強い。ビッグ7よりも哨戒艇のが強いのは何故か。その答えは数の暴力だ。長門という戦艦が一隻しか存在しなかったのとは反対に東日丸は何十、何百と存在していた。その力の集結が俺という漢娘なのだ。ん？娘じゃないな……。息子か？いや……。ん？あれ？うーん……

「提督？どうされたのだ？具合が悪いのか？」

「ん？ああいや、何でもない。早く帰って補給でもするか」

「そうだな……」

「なんだ、あんまり嬉しそうじゃないな」

「やはり提督は一緒に食事してはくれないのだな」

「ああ……。俺は部屋で食べる」

「兵器と食卓を同じくするのは嫌か？」

とても辛そうに、でもどこか期待の隠った眼差しが向けられる。しかし、俺には答えることができない。

「そう深く考えるな、長門。別に俺が艦娘であることを隠していることと俺がお前たちを嫌悪していることはイコールにはならない。俺には人間のときの記憶がある。俺には両方の立場が分かる。お前たちは兵器だ」

「……っ！」

「だが、人間でもある。人間とはどこからが人間なのか。そんなのは法学部の奴にでも聞いてくれ。経済学部の俺には分らん。だが、少なくとも俺は人間だし、お前たちも人間だと思う。だからそんなに気にしなくてもいい。考えるだけ無駄だ。いくら考えたところでお前という存在が変わることはないんだからな」

「そうか……。やはり提督は優しいのだな。いつか提督が食事に誘ってくれる日を待っているぞ」

「ああ、いつかな……」

いつかは来ない。

俺に食事は必要ない。必要なのは補給のみだ。鎮守府の運営は次のように規定されている。

原則として艦娘には食事を与えること。但し物資が不足している際にはこの限りではない。

俺は部下の立場を理解しようと努力してきた。しかし結局は部下に恨まれながら死地へと送り出すことしか出来なかった。次こそは艦娘の立場を理解出来る提督になろうと、最前線の辛さを少しでも理解するために食事は捨てた。これは死んでいった部下達へのせめてもの罪滅ぼしなのだ。

(次こそは俺の目指した指揮官となる。だからいつかは俺を赦して欲しい……)

十字架を背負って生きていくのもなかなか肩が凝るのだ……。

アスロツク米倉

大本營で働いて二年が経った。だが、提督として鎮守府に派遣されるのはまだまだ先だろうと思っていた。思っていたのだが……。

「失礼します！」

大将直々に呼び出されてしまった……。クビだろうか？それとも秘密がバレてしまったのだろうか……。

「急な話ですまないが、貴官には提督として横須賀鎮守府への勤務を命ずる」

なしてそうなった……？

「失礼ながら……、横須賀には米倉大佐がいらっしやる筈では？」

「一ヶ月前に近隣の住人から署名が届いてな……。どうも提督としての立場と艦娘の力を利用して街で好き勝手やっていたらしい」

アスロツクぶちこむぞあの野郎。

「それに艦娘の撃沈や解体も多くてな。貴重な兵力を潰されては困る」

確かに、艦娘の出所がハッキリしていない以上、必要以上に艦娘を減らすのは得策とは言えないな。

「分かりました。謹んで此度の任を受けさせて頂きます」

「期待しているぞ」

「……ということだ、長門。急ではあるが今日中に荷物をまとめて明日の昼過ぎには出発するぞ」

「心得た。昼飯は出発前に食っておくということが良いか？」

「あー、そのことなんだが……。鎮守府に食料があるか怪しい。その場合長門にもしばらく断食してもらおうことになってしまうんだ」

長門だけ鼯鼠にするわけにもいかないし……。物資が大ホールから届けられるまでは仲良く断食という訳だ。

「そうなのだな……。なに、この長門にすれば断食などなんということ

はない！」

「そうか、すまん。まあそこで最後の晚餐よろしく外食でも思っ
てな」

「おお！そうか！その… 提督はどうするのだ？」

「ん？俺も一緒に食べるぞ」

「そ、そうか！うむ、この長門に任せておけ！」

(え？なにを？)

俺が聞く前に長門は急いで部屋を出て行ってしまった。いや、俺が
はなにを任せたことになってるんだ？まあその内分るか…。今は
早いところ荷物をまとめなくてはな。

「おはよう、提督！気持ちがい朝だな！」

おかしいな、俺のが目覚ましは「いろはアラーム」だった筈だ。間
違えてもこんなに男勝りなボイスではない。

「おい、何故に長門が俺の寝室にいるんだ？」

「うっ…。その、いつもより早く目が覚めてしまったのでな。せつか
くなのでこの長門が提督を起こしてやろうと思ってな！」

「遠足じゃねえんだよ…。で、今何時だ？」

「5時だ」

「まだ1時間も早いな？」

「… うむ」

「俺の睡眠時間を削って楽しいか？」

「… すまなかった」

「まあ、昨日は早めに寝たから睡眠時間は足りてるけどな」

「そ、そうか！それは良かった！」

いや、良くないよ？本当なら二度寝したいよ？でも部下の前でそん
な恥ずかしいことできないから我慢してるだけだからね？

「荷物はまとめ終わってるな？」

「勿論だ」

「じゃあすまんが艤装を展開して荷物を北口の玄関まで運んできてく
れ。俺のも頼む」

「この長門に任せておけ！」

外に出ると朝の湿った空気が肺に流れ込んできた。春の朝は少し寒い。その寒さからすこしでも早く逃れようと、車に逃げ込む。当時任官仕立てであまり多くない給料だった俺が無理してかったBMWだ。まあ中古だけど。最初は維持費だけでも財布が悲鳴をあてていたが、中佐となった今では給料もそれなりに上がり、さらに提督となったことで今や俺の給料はうっはうはである。今日のお昼は二年ぶりの食事になるからな、少し贅沢しよう。長門も喜んでくれるだろう。

玄関には既に荷物を運び終えた長門が立っていた。

「早かったな、長門。ご苦労」

「なに、どうということはない。早く荷物を積んでしまおう」

長門に促されてトランクを開ける。流石にふたり分ともなると入り切らなかつたので、後部座席にも段ボールを積み込む。まあ大半は俺のラノベとかグッズとかのせいなんだけどな！因みに威厳を保つために普段は隠している。

「提督の荷物は結構多いな。なにが入っているのだ？」

「まあ仕事の資料とか、学術書」とか”だな”

「そうなのか。提督は勉強熱心だからな」

そう、俺は勉強熱心な上司なのだよ長門くん！

「俺は車を駐車場に戻してくる。長門は朝食を食べておけ。11時30分には部屋に来るように」

「……って言ったよな？また、1時間早いぞ？」

「うむ、だが昼飯の打ち合わせをしようと思つてな！」

「ああ、そういえばどこで食べるか決めてないな……」

「そこで、この長門が大本営から横須賀までの間のルートで評判の良い店を探しておいたのだ」

「おお！それは助かるな」

「私はこの懐石料理店が良いと思うのだが」

「そうだな。しかしこっちの・・・」

長門がやけに楽しそうだ。珍しいな。お金は渡していたし、外食だっけ行こうと思えば今までだっけいく機会は沢山あった筈なんだがな・・・よく分からん。

本編 天龍ちゃんprprタイム
提督参上

横浜横須賀道路を葉山方面へと向かって車を走らせる。

「いやあ評判どおりで旨かったな、提督」

「ん？うん、そうだな」

「なんだ？あまり満足そうではないな」

そう、二年ぶりの食事。美味しくない筈がなかった。だが、事前に渡された横須賀の艦娘のデータが頭をよぎるのだ。俺がこうして食事を楽しんでいるときも彼女たちは横須賀で苦しんでいるのではないかと。結局二年ぶりの食事は味がよく分からなくなってしまった。

「次の角を左折だ」

長門の指示通りに交差点を左折する。

「見えたぞ、提督！」

左を見ると懐かしい横須賀鎮守府が見えた。

「いやあ、懐かしいな！当時はビッグ7であるこの長門がお荷物となってしまうてすまなかつた」

「いや、長門が謝ることは何一つない。それに、戦艦としての役目を果たしたくとも果たせなかつた長門の無念は分かっているつもりだ」

本来は漁船である筈の俺が黒潮部隊として出撃し続けていた。その時にいつまでも出撃出来ずに横たわる長門には同類としての哀れみを感じていたからな。

「さて、まずは荷物を運び入れてしまおうか」

「長門に任せろ！」

「なんだ・・・これは」

「出迎えないと思つたら、提督の部屋までボロボロとは！ここの艦

娘はなにを考えているのだ！」

「そう、怒るな。取り敢えず宿舎を確認しに行こう。これは想像以上に不味い事態かも知れないな」

「あ、ああ・・・」

先ずは駆逐艦の部屋だな

「新しくここに着任した提督だ！入るぞ！」

中に入ると、なんとも形容し難い雰囲気か漂っていた。なんか粘っこい空気が漂っている気がする。それに臭い。なによりも不快なのは艦娘の俺を見る視線だ。明らかに怯えている。それに生気がない。目が死んでるというか・・・。レイプ目ってああいうのを言うんだな・・・。

「・・・っ！失礼した。また来る」

とてもじゃないが堪えられなかった。

隣は潜水艦か・・・。また同じ光景が広がるだけかもしれないが諦めずに中に入る。

「オリヨクルは嫌でち・・・オリヨクルは嫌でち・・・」

そっ閉じとはこういうのをry

「一度提督室に戻るぞ」

「うむ・・・」

ああ、駆逐艦ラブな長門にはショックがでかすぎたかもそれいな・・・。

「さて、長門はアレを見てどう思った」

「うむ、あれでは生きながらにして死んでいるのと何ら変わりがない。前任の提督は一体なにをやったんだ・・・！」

「そうだな。アレでは使い物にならない。ただのクズだ」

「・・・っ！いくら提督でもその発言はいかがなものかと思うぞ！」

「事実だろう」

「それはそうだが・・・もう少し言い方というものが・・・」

「長門。集団を団結させるものはなんだと思う？」

「有能な指導者とかか？」

「間違いではない。だがこの状況ではベストな答えとは言えないな。」

正解は共通の敵の存在だ」

「っ!?まさか… 提督!」

まあ、俺ガイルとか進撃の受け売りなんですけどね

「そうだ。この状況から俺が信頼を得ることはほぼ不可能だ。できたとしても時間が掛かりすぎる。信頼を得る前にこの鎮守府は朽ちる。そうなれば国防は即座に崩れ落ちるだろう」

「だがっ…!」

「これは提督としての決定だ」

「分かりました…!」

「で、共通の敵といっても、前任のように絶対に逆らえない敵であつてはならない。そこで長門には俺と対立する形で艦娘を統率してもらいたい。勿論、任務の内容などの鎮守府の仕事は俺が指示する。長門にはその命令を伝え、直接の指揮を行ってもらおう」

「うむ、艦娘の指揮は任せておけ」

「これから俺は大本営と連絡をとる。とてもではないがこのままでは任務の遂行は不可能だ。鎮守府建て直しのために一週間ほど機能の停止を申請しておく。長門は艦娘達を食堂にでも集めておいてくれ」

提督ピンチ！

「大淀は秘書艦としてクソ提督の任務を全て変わりにやってたんだろ
う!？」

確かに私が提督の仕事を全て押し付けられていたのは事実です
が…

「だったら新しい提督なんていなくたって、この鎮守府の運営は可能
な筈だろうが」

「そうかもしれません。ですが新しい提督は既に決まっているそうで
す。今日が着任の日だということは前にお伝えしたはずですよ」

もう遅いんです。それに提督を寄越すなんて大本営に言ったと
ころで聞き入れて貰えるはずがありません。私たちは兵器なので
から…

「だったら殺つちまえばいいじゃねえか」

「もしそんなことが大本営にバレれば…」

「じゃあまた前みたいな環境にもどりてえつてののか？　そう言うんだっ
たら無理は言わねえぜ？」

「そんな訳ないじゃないですか!？」

私だってあんな地獄に戻るの嫌です。でも、だからと言って…

「今までは常に出撃してたから余裕は無かったが、今は違う!　これは
話し合って決めた結果だ。金剛や高雄も協力するって言ってるんだ」

「分かりました。提督の排除が済んだ後の鎮守府の運営は私が可能限
りやってみます」

「そうか!　頼りにしてるぞ、大淀!」

「ですが新しい提督を確認してからです。新しい提督が前任とは違う
ようでしたら、様子を見てくださいいね?」

「ああ、分かってるよ!」

『本日付で横須賀鎮守府の秘書艦に着任した長門だ。さっそくですま
ないが新しい提督の挨拶を行いたい。艦娘は直ちに食堂に集まって
くれ』

「よし!　オレの怖さを思い知らせてやるぜ!」

問題が起きないことを願いましょうか…。

食堂には既に殆どの艦娘が集まっているようですね。怯えている娘が多いです。それと同じくらい好戦的な目をしてる娘も多いですが…。

廊下から革靴の足音が聞こえてきます。目に見えて食堂の緊張感が高まっていきます。

そしてついに新しい提督が私たちの前に姿を現しました。

「敬礼！」

長門さんが号令を掛けますが、何人かの艦娘は指示にしたがっていないようです。それに対して提督が不快感を隠そうともせず表情に出しました。

「なんだ？…この人間は上司に敬礼も出来ないのか？一体どういう教育を受けてきたんだ、このグズが！」

「教育だ?!?まともな教育もせずに戦地へと送り続けてきたのはテメエら提督じゃねえか！」

「たしかお前は天龍だったか？なんだ、口の利き方まで分からんのか。とことん使えない野郎だな、お前は」

「なんだ?!？」

「あまり楯突かない方が身のためだぞお？解体第一号は貴様になるかもしれないなあ」

「やれるもんならやってみやがれ！」

「ああ。使えるまで使って、だし汗も出なくなったら使い捨ててやるから安心しろ」

「この野郎！」

天龍さんが主砲を提督に向けてしまいました！

「いいのかあ？撃てよ？この駆逐艦ともども撃ってみろ！」

「クソっ！この人間のクズめ！」

駆逐艦を盾にする提督を見て私は諦めました。この人は前任となんら変わらない層なのだ…。

「挨拶する雰囲気じゃあなくなっちゃったな。挨拶はまた後日としようか。後は頼んだぞ長門」

そう言うのと提督は駆逐艦を天龍さんに向かって投げつけて食堂を後にしました。駆逐艦を受け止めるのに必死な天龍さんは攻撃をすることができませんでしたが、そこまで考えて駆逐艦を投げ捨てたのだとすればいつそ呆れを通り越して尊敬にも値します。

「では、改めて秘書艦の長門だ。以後よろしく頼む」

「Hey、長門はどっちの味方ネ？」

食堂に再び緊張が訪れる。

「私は提督の秘書艦ではあるが所有権は大本営にある。だから提督に對してある程度意見は出来るし、解体される心配も少ない。提督が皆に危害を加えないよう、私が皆を守るので安心してくれ！」

皆の間に安堵の色が広がる。提督に對して意見ができる存在の与える安心感は想像以上のものだったようです。

「ではさっそくですまんが明日の任務を伝える。明日は民間商船の護衛任務だ。編成は…」

提督、道徳を見失う

大本営に一週間の建て直し期間を申請したが許可を取ることではできなかった。なんでも、今まで運営できていたのだから大丈夫だということだった。それでも食い下がった結果が護衛任務ということだ。あとは食料だが、これは来月の規定の配給日まで耐えろとのことだった。俺の分の食費は給料日に上乘せしてくれるそうだが、そういう問題ではない。艦娘の精神状態は最悪と言える。それに、運営体制もまともとは言えない。これでは軍としての力を最大限発揮することができない。改善すべき問題は多いが、まずは食料の確保と建て直しの期間を得なくてはならない。その条件を同時に満たすためには…

鎮守府から出撃した艦隊に気づかれぬようにして後をつける。

「ご苦労様でした。ここからは横須賀鎮守府が護衛を引き継ぎます」

どうやら無事に護衛任務を引き継げたようだ。それを確認して、俺はさらに沖へと足を進める。しばらくすると 深海棲艦を発見した。駆逐艦イ級から二級、軽巡ホ級とまあまあな数と強さだが…

57mm砲を先制攻撃として撃ち込む。敵がこちらに気付いたようだが、構わずに7.7mm機銃の豆鉄砲を食らわさせて挑発をする。相手も反撃せんと迫ってくるが…

迎え撃たずにひたすら逃げる！こいつらはこのまま誘き寄せて護衛任務中の艦娘に擦り付けるつもりだ。正に外道！

「敵艦隊が近付いてきます！」

「ある程度の数がいますね」

「今日は駆逐艦だけじゃなくて戦艦もいらつしやいますから」

「余裕ネー！」

よしよし…。予定通りに戦闘に突入したようだ。だがこれで海岸側はノーガードだ。

貨物船に飛び乗るが、誰にも咎められることはない。それもそのはず、事前に戦闘に突入したら乗組員は船内に待機するよう命じているのだ。閃光弾で失明したくなかったらカーテンも閉めておけとのおまけ付きだ。

俺は当たり前かのように近くにあったコンテナを開ける。中身はバナナのような。まあコンテナの絵柄で分かりきっていたことだが……。

次々にコンテナを開け放ち中身を確認して行く。生鮮野菜、米、肉、果物、缶詰め、衣服。海上輸送が困難となった現代、日本の食料自給率の低さは取り分け重要な課題だ。ある程度の改善はされ、食料自給率も上がってきてはいるのだが、やはり輸入に頼らなくてはならない食品が大半だ。食品の値段高騰により、正直なところ艦娘を食っていかせるのも結構大変なのだ。

取り敢えず日持ちする食品を中心に選び、一つのコンテナに詰め込んでいく。そう、これから俺が行うのは盗みだ。完全な犯罪だ。バレたらどうなるか分からない。しかし、俺はさらにこれから罪を重ねなくてはならない。こんなのは序の口だ。

コンテナを抱えて海に飛び降りる。華麗に着水を決めて、素早く船から離れる。気分はさながらスパイ映画の主人公だ。

ある程度の距離まで離れたところで57mm砲を貨物船に向ける。そして俺は本来守るべき相手に向けて砲撃をお見舞いした。

その後コンテナを鎮守府の倉庫に隠して、なに食わぬ顔で提督室に戻り艦娘たちの帰りを待つ。

待つ。

遅くね？

「護衛艦隊ただいま帰還しました」

吹雪が若干泣いている。ほかの駆逐艦も泣いた後がある。不味い、早くも罪悪感に押し潰されそうだ……。

「なんだ？吹雪をいじめてて帰還が遅れたのか？ちゃんと俺も誘ってくれよな！」

とつてもフレンドリーでウザい感じで声を掛ける。

「違うネ！ 私たちとグズ提督を同じにしないで欲しいネ！」

「別に今さら隠さなくてもいいんだぞ？」

「本当に違うんです！ 私がいつまでも泣き止まないせいで皆さんが遅れてしまったんです。むしろ皆さんは慰めてくれていたんです」

「じゃあなんで泣いてるんだ？」

「それは・・・」

「まさかこれだけの戦力を投入しておきながら護衛任務ごときに失敗したとは言わないだろうか？」

「・・・」

部屋の中に重たい沈黙が漂う。

「なにをやってるんだこのグズ共が！」

机の上にあらかじめ用意しておいた前任の提督の湯飲みをぶん投げて粉碎する。

「ひっ・・・」

駆逐艦から小さい悲鳴が上がる。

「しかも大破どころか小破もなしか。敵に恐れをなしておめおめと逃げ帰ってきたと言うことか」

小馬鹿にした感じで挑発してみる。

「ちげーよ！ 深海棲艦と戦ってたら突然後ろから砲弾が飛んできたんだよー！」

「つまり敵に後ろに回り込まれたと？」

「ああ、そうだ」

「随分偉そうに話しているが、それは大問題じゃないか？」

「それは・・・」

「もういい。貴様らには期待などしておらん。とてもではないが仕事を任せられるだけの信頼に足らん」

「それは天龍ちゃんを解体するということかしらあ？」

「安心しろ。俺に逆らわない限りは解体はしないでやる。貴様らがいかにグズといえども重機の変わりぐらいにはなるだろ」

「テメエ・・・。この天龍を重機扱いだど!？」

「黙れパワーシヨベル」

「…っ！」

いかん、天龍が戦闘体勢に入ろうとしている。怒らせ過ぎてしまったようだ。

俺は天龍が艤装を展開する直前で天龍を蹴り飛ばす。

「グハッ！」

天龍が崩れ落ちる。

「所詮艤装を展開していない貴様らなどただの人間と大差ないわ！例え傷つけられなくとも痛め付けることなど造作もない」

流石に大勢の前で艤装を展開されては困る。人の目があつては俺も艤装を展開することができないからな。

まあ今回はこれでよしとしよう。今にも龍田が襲ってきそうだが今は天龍の方が心配なようだ。

「もうグズに用はない。とつとと下がれ。」

「言われなくてもそうするネ」

「ああ、ちゃんと明日の午前中までには報告書を提出するように。第一会議室が空いてるからそこをさえ」

「hey！ちよつと待って欲しいネ、大本営への報告書の作成は提督の仕事のはずネ」

「それは事務的な結果報告に過ぎん。俺が言っているのは今後の戦略や任務に役立たせるための現場報告だ。報告書は紙が会議室に置いてあるから空欄を埋めて提出しろ。今回は手書きでもいいが、そのうちデジタルにしてもらうから覚悟しておけ」

「でも、私たちはパソコンなんて使ったことないです。デジタルなんて無理です」

「無理じゃない、やるんだよ」

「そんな…」

まあ、後でパソコン教室開くんだがな。

「その報告書は誰が記入すればよろしいのでしょうか？」

「全員だ」

「全員…ですか」

「そうだ。そのための会議室だ。全員でしっかりと当時の状況を確認し、各艦娘と敵の動きをしっかりと記入しろ」

担当艦娘や深海棲艦の種類、撃沈数、こちらの被害状況、使用燃料、護衛対象の大きさ等のデータ、簡単などころだと日付や天気とか一人でも記入できる箇所は多いが、やはり全員で話し合わなくてはならない部分もある。特に反省点や改善策の欄を一人で埋めるのは無理だ。「分かったらとつとと出ていけ、目障りだ。休憩が済んだら直ぐに会議を開け」

こちらを睨みながら、又は怯えながら艦娘達が退室していく。その背中に追い討ちを掛けるべく声を投げつける

「あまりにもお粗末な出来だったら何度でもやり直しさせるからそのつもりでいろ。あと吹雪」

「はい…」

姿は見えないが廊下から声が聞こえる。

「後日、帰還を遅らせた罰を与えるので覚悟しておくように」

「はい…」

他の艦娘が突っ掛かってきにくいように敢えてこのタイミングで告げる。卑怯な作戦だ。まあ腕立て伏せさせるだけなんだけどね。それでも充分キツイとは思うが。

「早く扉を閉めろ、部屋のマイナスイオンが減るだろうが」

ストレスで免疫が下がっていきそうなので、空気清浄機を設置したのだ。まあ、風邪になる前に暗殺されそうな雰囲気は凄いいけどな。

さらば天龍、安らかに眠れ

艦娘達が退室してから程なくして電話の音がなる。

「はい、横須賀鎮守府です……はい……はい……少々お待ちください」

長門の電話応対もすっかり板についてきたな。最初はあの不遜な口調を直すのに苦労したが、これも特訓の成果だな。

「提督、大本営から電話だ」

突然不遜な口調にもどった長門がこちらに子機を突き出している。

「ああ」

保留ボタンを押して電話に出る

「只今お電話変わりました、提督の菊地です」

『ああ、菊地くんか。どういうことだね!?!』

「申し訳ありません。現在艦娘から当時の状況を問いただしているところですがどうやら深海棲艦の動きを見落としたようでして、後ろに回り込まれてしまったようです」

『回り込まれただと!?!どうやってたらそんなミスが出来るんだ!?!しかも戦艦まで投入しておいてだぞ?!?こんなことは前代未聞だ!?!君の能力を買って送り込んだのは間違いだったというのかね!?!』

「返す言葉もございません。ただ弁明をさせて頂きますと、前任の提督の艦娘の扱いにより、艦娘たちは完全に疲弊仕切っております。今までのツケが回ってきたのだと思われれます。仮に戦艦を参加させていなかった場合の被害は今よりも遥かに大きなものだったと予想されます。やはり、最低でも一週間の横須賀鎮守府の機能の停止を具申します」

必死の交渉の末になんとか渋る大本営を説得して一週間の休みを獲得した。

貨物船を攻撃することで減ったコンテナが海に落ちたと誤認させ、さらにその罪を深海棲艦に擦り付けて、休暇を得る。さらに食料も手に入る。一石二鳥どころの話ではない!?!モラルには反しまくっている気がするがそこら辺は見なかったことにする。

作戦が成功しほくそ笑む俺の元に邪魔が入る。

危険な鎮守府に着任すると決まり即座に購入した監視カメラがさつそく役に立ってしまった。

実務机に設置したモニターには天龍の姿が写し出されている。天龍は深呼吸をすると艀装を展開し、その主砲を提督室の扉越しに俺へと向ける。当然このままでは俺が死んでしまうので即座に艀装を展開し先制攻撃を仕掛ける。

放たれた砲弾は扉ごと天龍を吹き飛ばし壁に打ち付ける。砂ぼこりが俺の姿を隠しているうちに、追撃を加える。本来ならば水中で使うべき爆雷をぶん投げて爆発させる。

こうかは ばつぐんだ！

テンリユウは たおれた！めのまえが まつくらに なった…

爆発音に釣られて艀娘たちが集まってきた。

「提督、これはどういうことでしょうか」

加賀が鬼の形相で詰めよってくる。怖い。

「しらん。暴発でもしたんだろう」

「そんなことあり得ないデース」

「金剛か。なら、お前にでもやられたんじゃないのか？」

「金剛さんがそんなことする訳ないじゃないですか！誤魔化さずきちんと答えて下さい！」

「そうねえ。答え次第では…」

答え次第ではどうなるんでしょうか龍田さん…。

「そう言われても知らんものは知らん。突然扉が吹き飛んで、外で天龍が倒れていたんだ。そもそも、艀娘、それも何故だかは知らんが艀装を展開した天龍相手にただの人間である俺が太刀打ち出来るわけがないだろう。長門だってお手洗いに行っていたんだ、手伝ってもらったと言うこともない」

「それは…」

「そもそもなんでこいつがここで艀装を展開しているんだあ？」

「……………」

「あんまり反抗するなら見せしめが必要かもしれんな」

「見せしめなら私になります！だから皆さんには手を出さないで下さい！責任は私にあります」

「責任がお前にあるというのはどういうことだ、大淀」

「提督の暗殺を計画したのは私だからです」

「待つて下サーイ。計画したのは私ネ。大淀は巻き込まれただけデース。責任は私にありマース」

「あらあ？提案したのは私のはずだけれど？」

あ、やっぱり物騒な発想に至ったのは龍田さんなんですね。

「もういい、どうせここにいないだけで他の奴も関わっているんだろう。全員処分していたら切りがない。今回の件は不問だ。とつとと天龍を入渠ドックにぶちこんでおけ」

「よいのですか…？」

「だが、次はない。もし俺が攻撃されたならば貴様らの命はない。大本営にも遺言で伝えといてやる。その時は疑わしきは罰せよだ、みんな仲良く解体してやるからな」

ここまで言っておけば大丈夫だろう。

「取り敢えず報告書は天龍抜きで仕上げろ。後日天龍に確認をとる。

いいな、金剛？」

「分かったネ…」

「では解散だ。天龍は龍田が運べ」

龍田が天龍を担ぎ上げるのを確認してから、提督室に戻る。

内線番号の一覧から工廠の番号を確認する。810か…。何十年前のネタだよ。まさか海外で先輩が発見されるとはな…。

『はい』

いや、「はい」だけじゃ駄目だろ。せめて部署か名前くらいは言えよ。

「提督の菊地だ。鎮守府内で誤爆事故があったので、夕張に壁と扉の修復を頼みたいんだが」

『誤爆？分かりました今すぐ向かいます』

取り敢えず夕張が到着するまでに書類を作成しておくか。必要資材の申請書類すらこの鎮守府にはないのか…。いや、無いのが普

通なのか？まあ鎮守府は提督に一任されてるからな。普通なんてのは個人の裁量か…。

なにせよ艦娘の教育が急務だな。書類の処理も出来ないようでは話にならない。

しばらくすると夕張がやって来た。俺の視線が気になるのか仕事に集中できていなさそうだったが、俺が席を離れるわけにもいかない。いつ届けられるか分からない報告書を待たなくてはならないのだ。だから我慢してくれ、夕張メロンよ。お世辞にもメロンとは言えないけど。

「失礼するネ」

「なかなか早かったな。どれ今確認してやろう」

「どれどれ。おっ、字は上手だな。まあその内デジタル化するからあんまり関係ないけど。」

「コンテナ船の被害状況だが、コンテナが落下とあるがそれは本当か？」

「そうだよ。コンテナを数えたけど一つ足りなかったネ」

「コンテナ番号は」

「港に戻ってから確認するそうデース」

「じゃあ訂正だな。まずコンテナが落ちた。ではなく出航時よりコンテナが一台減っていたため、敵艦による攻撃の衝撃で落下したと推測される、だな」

「細かいネ」

「そんなことはない、目撃者がいないのに断定形では駄目だ。それとコンテナ番号についても注釈を付けておけ。大本営に確認を取るのを怠る可能性に繋がる」

「分かったネ」

「あと、この護衛対象船の欄だが」

「まだあるネ…」

「民間の船との表記では不十分だ。正しくは日本郵船のNYKアルテリアだ」

「そこまで…」

「ちゃんと記録しないと今後に活かせないだろ。護衛対象のノット数や規模は重要だ。赤文字で訂正しておいたから、会議室に戻ってから修正して再提出だ。そしたら解散していいぞ」

「そこまでやったなら提督がやっておいて欲しいデス。みんな慣れない作業でくたくたデース」

「駄目だ。それではいつまでたっても出来るようにはならん。それに慣れてしまえばそんなに苦でもない」

「提督は艦娘をどうしたいのネ…」

「古きよき自衛隊だ。旧帝海国軍でもなく今の腐りきった海軍でもなく、人命を尊ぶことの出来る海自の精神を取り戻す」

「提督…?」

「…：… という大義名分の元で貴様らに雑用を押し付けて、さらに細かく指摘して精神的に追い詰めて愉悦に浸るのが最終的には望ましい」

失敗した。正直誤魔化せたか怪しいな。まさか信条に関わる質問をされるとは思わなかった…。

まあ、さりげなく旧帝国海軍もデイスっておいたから艦娘からしたら反感をもつ信条だと思うし、多分マイナスの方向で印象は動いているはずだ。俺も元は帝国海軍の船だし、旧帝国軍の全てを否定するわけではない。が、終戦間際の幹部を好きになれというのは正直無理だな。

改革開始

「総員、艦隊起こしー!」

海岸特有のすがすがしい朝の空気に満たされた鎮守府に長門の凜とした声が響く。それと同時に起床ラツパの音が鳴り響く。

提督室の無線をオンにする。放送先を鎮守府全体に設定して、マイクの音量を上げる。

「総員6時10分までに本館正面入り口前に集合!もう一度繰り返す総員6時10分までに本館正面入り口前に集合!」

川内の悲鳴が聞こえる。あいつ、寝てなかったな…。自業自得だ。消灯時間に寝なかった奴が悪い。

取り敢えず念を押ししておくか

「遅れた場合は連帯責任とする」

川内の走る足音が聞こえる。なんか面白い。

6時10分になったのを確認してから、艦娘の部屋に入る。相当焦っていたのか、駆逐艦の部屋は脱ぎ散らかした寝巻きが散乱している。他の部屋も寝具までしつかりと整えられている部屋はあまりない。

遅れること5分。集合場所に到着する。

「長門、点呼の結果はどうだ?」

「点呼開始から全報告終了まで2分。あと天龍が居ないな」

「分かった。遅刻は?」

「駆逐艦と重巡洋艦が3分と2分の遅刻だ」

「それでは連帯責任として、180回と120回の腕立て伏せだ」

「提督はさらに遅刻しているのにご自分を棚に上げて罰則ですか?それに提督よりも早く到着していますから実質、彼女たちは遅刻していません」

「大淀、彼女達を守りたいのは分かる。だが、これは今後の規則だ。それに、俺は貴様らの部屋をチェックしていたのだ」

「部屋を…。一体ナニをしていたのですか?」

その性犯罪者を見る目は止めてくれませんかね……。

「貴様らの部屋の整頓具合だ。脱ぎ散らかしてあるわ、寝具の整頓は出来ていないわで散々な結果だったぞ」

「それは10分しかなかったので、仕方のないことかと。そんな時間を突然設定した提督の責任では？」

「違うな。紛れもなく貴様らの責任だ。因みに海軍は5分で支度を済ませる。勿論寝具の整頓も完璧だ。毛布の角はしっかりと揃っている」

「……しかし、それは駆逐艦のような子供達には無理です」

「無理じゃない。やれば出来る。最初は俺も出来なかった。何度も上官に寝具をぶん投げられてやり直しをさせられた」

「子供達も同じ思いをしろと？」

「そうだ。お前達もよく聞け」

一呼吸置いて全員が注目したことを確認してから話を続ける

「この鎮守府は腐っている上に墮落もしている！このままでは貴様ら全員撃沈されて終わりだ！生活の緩みは心の緩み！常に死が付きまとうこの環境でのそれは死へと直結する！貴様らの中にガキが多いことなど百も承知だ！だがガキであろうと貴様らが海軍の一員で有ることには変わりない！海軍の一員としての恥を知れ！」

その後も海軍としての誇りとはなんなのかや軍人としてのあり方を持論を交えて演説する。そしていかに今の鎮守府が腐っているのかを認識させる。

皆が呆然としている。次第に瞳が潤んでいる艦娘も中にはいるようだ。またしても罪悪感が押し寄せてくる。

小声で長門に話しかける。

「そんなに厳しいこと言ったつもりはないんだが……。長門、後で泣いてる理由を聞いておいてくれ。あとアフターケアは頼んだぞ」

「あ、ああ。まあ大体想像は付くがな……」

「そんなに厳しいこと言ったか？」

「いや、多分海軍の一員として扱われたことが嬉しくて、感極まったのだろう」

は？

「そんな訳ないだろ。そんな周知の事実は今さら泣く奴があるか。憶測で話しても仕方ないな。取り敢えず頼んだぞ、長門」

「承知した。この長門に任せろ」

「いつもすまん」

心なしか顔を赤く染める長門の後方に人影を発見する。

「天龍か！もう10分の遅刻だ！とつとどこつちに来い！」

天龍が一瞬躊躇った後に駆け足で近づいてくる。

「なんだ天龍。世界水準の軽巡洋艦は体内時計まで世界基準なのか？時差が激しいぞ？大遅刻だ」

「ふざけんな！オレは貴様のせいで入渠してたんだぞ！それにもう少し前からいたんだよ！」

「朝の6時の時点で入渠残り時間のタイマー0だっただろうが。言い訳するな。それと何故あんな所に突っ立っていたんだ？」

「やっぱりテメーの作業か！まだタイマーは0にはなってるねえはずだったんだ！あと、突っ立ってたのはテメーが演説始めたから入れなくなっちゃったんだだろうが！」

ま、俺が昨日の夜にこつそりと高速修復材を入れたのだ。天龍を大破させたのは俺な訳だし、いつまでも独りでお湯に浸しておくのは申し訳なかったからな。だが、立場上天龍に優しくする訳にもいかない。天龍に連帯責任を与えるためだったと思わせることにしたのだ。因みに高速修復材投入の機械が壊れてたから、俺が直接入れたんだけどね。天龍は寝てたから気づかなかったけど。因みに横目でチラチラチラつと見ただけでそんなにちゃんとは見ていない。いや、チラチラチラチラくらいは見たかな。

「さて、10分の遅刻ということは軽巡洋艦は連帯責任で腕立て600回だな」

「なっ…！そんなの無理に決まってるだろ！」

「なんだ出来ないのか？」

「オレはともかく周りは無理だ！」

「そうか…。なら駆逐艦も無理か？」

「180回なんてとてもではありませんが…」

ま、そうだろうな

「仕方ない。では本来は1秒の遅刻につき1回なのだが今回は10秒につき1回まで減らしてやろう。それを、平均して30回を全員でこなせ。長門、カウントしろ！」

「1、2、3、4、5」

「お前らも声出せ！自分でもカウントしろ！」

「6、7、8」

「どうした！既に声が辛そうだぞ！」

「きゅくうく…」

「テメエ、なに勝手に止めてんだ！」

「もう…無理…なのです…」

「なんだ！テメエ一人だけ楽するのか！」

「うう…」

「あと一回やれ！」

「10」

「他の奴は続けるぞ！11！」

「11、12、13」

そのあとも徐々にリタイアをしていく。

「30！」

「なんだ、残ったのは天龍だけか。艤装を展開していなければ所詮はただの一般人か」

休憩している天龍を見下ろして声をかける

「何を休んでいるんだ？お前はあと60回分残っているぞ？」

「は？なに言ってるんだよ！30回だっつたろうが！」

「平均30回まではあと60回足りないな」

「なっ…！」

さすがに天龍でもいきなり合計90回はキツいか。

「じゃああと15回だ。残りの45回は特別に俺が立て替えてやる」

そのまま天龍とならんで腕立て45回を終わらせる。男子高校生ならこれくらい余裕だろうが、普通の女子高校生には無理だろうな。

多分。

シラネ

「さて、海軍では一秒一回なので今後は心しておくように」

「はい！」

うおつ！なんか元気いいな、コイツら。

「あと、本日より一週間は大本営からの任務はない。出撃もない」

ざわ…ざわ…

「だが仕事がないという訳ではない。詳しい内容はこの後説明する。第一会議室に移動するように。長門」

「以上、解散！」

怪訝そうな顔をしながらも艦娘たちが建物に入っていく。

ここからだ。ようやくスタートラインに立つことができた。タイムリミットは一週間。建て直しにはあまりにも短すぎる時間だが、それでもやりとげなくてはならない。今度こそ部下の為に全力で働き、結果を残して見せようじゃないか！

会議

全員が揃った頃合いを見計らって会議室に入る。

「これは……」

「お疲れ様だ、提督」

「ああ、それよりなんだこのカオスな雰囲気は……」

「うむ、早朝の内に提督と私で用意した朝食が旨かったようだ」

「いや、泣くほどか？ コンビニのおにぎりだぞ？」

「彼女たちは食事すら何年もしていないのだ、仕方がないことだろう」

俺の場合は久しぶりの食事もよく味が分からなかったが……。

「それより、朝食は長門が用意したことになっているんだらうな？」

「ああ。私だけがお礼が言われるというのは複雑化だったがな……」

「くれぐれも俺が用意したつてことは隠し通してくれよ」

「分かっている」

席に座ると長門が皆と同じようにおにぎりとお茶を差し出してくる。

「あくまでも俺たちは敵同士の設定なんだが？」

「だが、提督の信条に則れば敵にも人道的な扱いが必要だろうか？」

「勝手にしろ……」

「そうさせてもらおう」

なんともいい笑顔だ……。

皆の食事が終わった頃合いを見計らって会議を始める。

「長門、鎮守府運営方針に関するプリントを配布してくれ」

「任せろ！」

資料が端まで行き届いたことを確認して会議室を始める。

「では第一回総合ミーティングを始める。本日の議題は机に置いてあったシラバスを確認してくれ。最初は鎮守府運営方針に関してだ。資料がない奴は手を上げてくれ」

一通り会議室を見渡すが、誰も手を上げてはいない。全員が真剣な表情で資料に目を通してている。

「まず、鎮守府の運営形態を明確なものにする。具体的にはローター

シヨンで分担を決めて仕事をこなしてもらおう。これからの生活は出撃、一般業務、課業、演習、艦友会活動を中心として活動してもらおう」

「えっと、具体的な内容というのは…」

「それは今から一つずつ説明していく。長門、出撃スケジュールを配布してくれ」

「これを一部ずつとって回してくれ」

「今配布しているのは暫定的にこちらで作成した出撃予定表だ。勿論大本営からの任務や深海棲艦の動向によってそれらの予定は随時変更されることになると思うが、試験的にそのスケジュールで一ヶ月間行動してもらおう」

オリヨクルガスクナイデチー!!!!

「不満がある場合は長門に伝えてくれ。全ての希望が通せる訳ではないが極力反映しよう」

フマンナンテナイデチー!!!!

「次に一般業務だが、長門」

「資料だな」

「次の資料を参考に進路希望を提出してもらおう。職種は経理、物資、広報、医療、工場、食堂、戦略、通信だ。すまんが各職種に年齢制限があるので、年少組は選択肢が少なくなってしまうのだが、我慢してくれ。それと、間宮と夕張は食堂と工場で決定になっている。他に代役が居ないんだ、申し訳ないが引き受けてもらえないだろうか」

「私は給糧艦ですから、食堂が担当で何一つ不満はありません」

「私も建造が好きだから任せてくれて構わないよ!」

「そうか、すまないな。一応二人でも掛け持ちできる担当をピックアップしておいたから、注釈1を参照してくれ。ここまでで質問がある奴はいるか?」

「この取得可能資格というのは?」

「簿記とか電卓検定のことだな。具体的な内容は3ページ以降で確認してくれ。そしてそれらは仕事をしながら勉強してもらい、資格を取得してもらおう。ほぼ全ての職種で用意させられているので頑張るよう」

他に質問は無さそうなので続きに入る

「それではこれから軍の職種紹介ビデオを見てもらう。軍には存在しない職種も今回はあるのであくまで参考程度に観てくれ」

長門が電気を落としてプロジェクターを照射する。ほどなくして軍のビデオが放映される。

艦無娘の全員が食い入るようにして映像を観ている。寝ている者などは一人もいない。今、鎮守府が大きく変わろうとしていることに気づいているのだ。そしてそれが今後の自分達の人生を大きく左右することも理解している。なにか自分達の不利になる点は隠れていないか。必死になって探しているのだ。

それでいい。自分のことにすら真剣になれない、必死になれない人間は一生騙され続ける。己の身を守ることができるのは己だけなのだ。だから疑え。疑い続けろ。俺という敵を疑い、そして仲間を信頼しろ。そうすれば今よりかは楽になれるんだからな。

映像が一通り流れ終わり、長門によって部屋の電気がつけられる。

「以上が職種の大まかな内容だ。ある程度のイメージは掴んでもらえたいと思う。よく考えて希望を提出してほしい。ただし全員が第一希望に就けるとは限らないので、その点は了承して欲しい。また締め切りを過ぎたものは受け付けないので、必ず締め切り前に長門に提出するように。なにか質問は」

「無いようなので次に移る。長門、時間割を配布してくれ」

「シラバスもか？」

「そうだ。今から配布するのは課業に関する資料だ。艦娘や職種によつて必修授業が違うので、自分の出席すべき授業の把握に努めてくれ。因みに、パソコンや社会常識等の一部の授業は俺が担当する。因みに資格の授業も俺が担当するものもあるが、誰がどの授業の講師なのかは現時点では伏せさせてもらおう」

「それは何故でしょうか？」

「選択肢授業や職種を講師で選んで欲しくないからだ」

「講師は提督の他にはどなたが担当するのでしょうか？」

「俺の他には映像授業があるな。将来的には外部講師を招くことも視

野にいられている。その他こちらで選出させてもらった艦娘にも講師をやってもらいたい。こちらで選出した艦娘には会議の後に個別に資料を配布する。後日、講師を引き受けて貰えるかを長門が確認に行く。他、質問は？」

「なさそうだな。次は演習の資料だな？」

「ああ。今から長門が配る資料は演習に関する資料だ。週間スケジュールと一日のトレーニング内容、苦手分野に応じたメニュー作成の手引きだ。射撃や水上歩行等の基本的な動作の向上を目指した訓練に始まり、体幹トレーニングなどの新たなトレーニングメニューや実弾を使用した模擬戦闘などがある。これに関してはこの場で全て目を通すのは難しいと思われる。また、質問なども多くすることが予想されるため、訓練に関する質問は書類にして長門に提出してくれ。後日開く会議で優先的に返答させてもらう」

「では最後の資料を配布する」

「最後は艦友会活動だ。これは旧防衛大で行われていた校友会活動のパクリだ」

パクリ…

「言い間違いだ。正確にはオマージユ、インスピレーションだ」

エエ…

「んんっ！で、内容に関してだが…」

ニゲタゾ…

「えー、これは夕方から2時間の間、自己啓発に励む時間だ。具体的にはなにかスポーツや文化活動に挑戦してもらおう。最低でも2人が集まって部活動を形成してもらい、それぞれの部が決めた内容に取り組んでもらおう。といっても何部を立ち上げれば良いのか判断に困ると思うので、また動画を見てもらおうと思う。長門」

「うむ」

さて、長く続いた会議もこれが最後の議題だ。この映像が流し終わったら会議は終わりだ。第一回の会議には不安もあったがなんとか無事に乗り越えられそう。艦娘たちの表情もとても楽しそう。今までスポーツや文化活動など殆ど経験したことがない彼女たちに

はこの映像がとても新鮮に見えることだろう。最初は完全な独学になつてしまふだろうが、その内落ち着いたら社会人サークルで週に何度か活動できるようにしてやろう。自分達が何を守っているのか意識することにも繋がるだろうしな。願うは長らく忘れていたであろう艦娘としての仕事の誇りを取り戻して欲しい。彼女たち艦娘：俺の部下に生きる喜びを：

茶番

部活動を解説するムービーの放送が終了し、部屋の電気が付けられた。

「ではこれも後日希望を提出するように。毎度のことながら全ての要望が通る訳ではないので了承して欲しい。ただし、あくまでも貴様らの生活をより豊かなものにするのが第一の目的であるため、ある程度の我が儘は許容しようと思う。なにかある場合は長門に相談するように。内容によっては俺の前に連れてこられる可能性があるので注意するように。ものは試しだ。言ってみるだけならばタダだからな。俺と会話しなくてはならないという点に目を瞑ればノーリスクだ、是非試してみろ」

ちよつと思案顔のやつもいるな。恐らく思うところがあるのだろう。那珂とかは確実に来るだろうな。まあ予想は付くが。

「ではこれで第一回相談ミーティングを終了する。このあと長門から講師候補には資料が配布される。あと、資料を無くした奴は腕立て伏せが待っているのだからくれぐれも無くさないように。では長門の指示で解散」

「それでは資料を配布する。名前を呼ばれた者は前まで取りに來い」

後を長門に任せて退出する。

資料を提督室に置いて食堂へと向かう。昼まで時間がない。みんな頭を使ってお腹が空いているだろうからな。

取り敢えず昨日の夜にタイマーをセットしておいた炊飯器の中身を確認する。因みに一つは俺がアパートで使っていたものだ。あとは元々あったやつと新しく買ってきたやつと大本営の物資からちよろまかしたやつだ。多分ギリギリ足りると思う。

次に味噌汁の入った特大の鍋に火をつける。この鍋は戦争で廃校になった学校のを拝借した。

犯罪スレスレというか犯罪によって手に入れた調理器具と食品で用意された料理は白米と味噌汁だけ。正直お昼としては物足りないどころの話ではない。

五分後に長門からメールが入る。どうやら会議が終わったらしい。ある程度温まった味噌汁の火を消すと食堂を出る。流石に悪魔の提督がお昼を用意していたなどと噂が広まっては大変だ。

遠くから聞こえる長門達の足音と雑談の声に背を向けるようにして、本館を後にする。まだお昼の準備は終わっていないのだ。

俺は久しぶりに愛車のBMWに乗り込む。実際には1日振りなのだが、この短期間で色々ありすぎてなんだか久しぶりな気がする。

が、そんな感傷に浸っている暇はない。急いで車を近所のスーパーへと走らせる。タイムリミットは白米と味噌汁が配膳されるまでの僅かな時間だ。その間にお総菜の購入を終えて食堂まで届けなくてはならない。

鬼の形相でスーパーへと駆け込むと、カゴを引っ付かみお惣菜コーナーへと見事なダッシュを決める。因みに50m走は5秒台なのでまあまあ速い。主婦が驚いているがお構い無しだ。片っ端から適当におかずになりそうな食品をカゴへとぶち込んでレジへと向かう。

汗だけで必死な俺に使ったのか、引いたのかはよく分からないが、愛想のよい主婦のおばさんが列を譲ってくれた。しっかりとお礼を言ってその好意に甘える。

俺が焦っているのが伝わったのか、店員のおばさんが二人がかりでレジ打ちと袋詰めをしてくれる。普段は本気じゃなかったのだと感じられるスピードで会計が進む。

程なくして金額が表示される。お札はある程度予想してあらかじめ出してある。あとは端数を揃えるだけだ。

しかし、人は往々にしてあと少しだと思うと気が緩むものだ。つい焦ってしまった俺の手から小銭が二枚滑り落ちてしまった。一秒が何倍にも引き伸ばされていく。重力加速度によってコインは次第に加速していく。もはやコインのの加速は誰にも止められない。折角の周囲の人々の協力を無駄にしてしまうのか。俺のために列を譲ってくれたお客さん、本気を出した店員さん、それらの記憶が走馬灯のように頭を駆け抜ける。ああ俺はまた人の信頼と期待を裏切ると脳裏で自然と納得することができた。

否！納得などしていない！

このままでは瞬きをする間もなく落下したコインが空虚な音を響かせることになるだろう。だが、それではいけない。

人間の反応速度の限界は0.2秒。コインはまだ手から滑り落ちた直後だ。俺の手からの距離はおよそ2cm。二つは無理だとしても一つならなんとかなるだろう。脳が電気信号を発する。信号は神経を駆け抜けて腕から指先へと伝えられる。反応、反射、音速、高速！指先の速度は音速を越えてコインへと向かう。

刹那。

そう形容するにふさわしい瞬間の後に俺の右手が動作を止める。ほどなくして置き去りにされた音が二つ重なって聞こえてきた。果たして俺の右手の中には確かに一枚のコインの感触があった。

だがおかしい。重なって聞こえるはずの音は、コインが地面にぶつかったときの甲高い音のはずだ。だが実際は違った。実際に聞こえてきたのは空気を切り裂く鋭い、それでいて優しさを多分に含んだ音だった。

怪訝に思いながらも一枚のコインが描くはずだった軌道を視線でなぞる。果たして俺の目に飛び込んできたのは女の子の手であった。俺は驚いて顔を上げて女の顔を確認した。

そこには慈愛と母性に満ち溢れた優しい女神が微笑んでいた。数刻前に俺に列を譲ってくれたババア女神だ。

女神は呆ける俺の右手にコインを握らせた。そのコインは体温だけではないなにかによって暖められていた。握りしめられた右手のコインから腕を通して愛という名のエネルギーが俺の中へと流れ込んでくる。それが俺の頭のとっぺんから足の指先までを包み込んだとき、俺の意識はとても穏やかな気持ちと共に覚醒した。

正気へと戻った俺に女神は語りかけた。

「あなたのことを待っている人がいるのでしよう？だつたらこんなところで挫けている暇はないはずだ。早く行ってあげなさい」

「はいー」

俺はガラにもなく元気な返事を返すと、残りのコインを店員さんに渡す。レシートを受けとると俺は袋を持って走り出した。俺の背中には沢山の人々からのエールが送られていた。俺なんかのために応援してくれる人がる、協力してくれる人がいる。その事実自然と胸が熱くなる。視界はボヤけてよく見えない。だが、今の俺は止まることなく走り続ける。全ては鎮守府で待つ皆のために。

努力の甲斐あつて、なんとか間に合うことができた。裏口で長門にお惣菜のスーパ―の袋を渡す。その時長門から掛けられた労いの言葉に俺は報われた気がした。

楽しい食事に提督の俺が顔を出すのも野暮と言うものだろう。久しぶりに一服しよう。昔カツコいいと思って始めた人畜無害な電子タバコを片手に俺は海岸へと向かった。

社畜生産

昼食が終了したことを長門からのメールで確認してから食堂へと向かう。

食堂に入ると楽しそうな雰囲気は少しだけ暗くなる。いや、俺が嫌いなのは分かるけど露骨過ぎじゃない？既に悪役続けるのメンタル的にキツくなってきたらただけど…。

「これからお前たちには各自部屋に戻ってジャージに着替えてもらう。着替え終わったら部屋の前の廊下に整列しろ。俺が確認する」

「あの……。ジャージなんて持ってないのですが……」

「あー、今日の朝の点検時に廊下に置いておいた。袋に名前が書いてあるから探して持っていけ。長門」

「私は廊下にいるので何か不備があった際には直ぐに申し出るように、以上、解散」

「間宮の分は俺が直接持ってきたから食器洗いの前に着替えて見せてくれ」

間宮のジャージの丈を確認してから、他の艦娘の部屋へと向かう。

既に整列が完了している部屋もいくつかあるようだ。皆が着心地を確認するようにしてそわそわしている。

「提督、お疲れ様だ」

「ああ、長門もな。で、不備はあったか？」

「いや、今のところ報告されていない」

「分かった。では、服装検査を始める」

次々に丈やウエストを確認していく。提督からの強制スキンシップということで皆とても嫌そうだ。ちよつと、いや、かなりシヨックだ。

「ん？おい、天龍！」

「なんだよ……」

「なんだもパンダもあるか！貴様、腰パンとは言い度胸だな、軍隊をなめてるのか？」

「ち、チゲーよ。ただ……」

「身体測定したときの天龍ちゃんはやつと太ってたのよね」

「ばっ！それは食事が旨くてついだな・・・」

「なるほど、軍人にあるまじき体型のデブだったと」

「そこまでじゃねーよ！」

「そういやあ、資料にあった写真と結構違うな」

「なっ！写真があるのか！消せ！今すぐ消せ！」

「まあ近い内に撮り直してやるか」

「そ、そうか！」

まあ、消すとは一言も言っていないがな。

「ところでデブ？」

「デブじゃねえよ！」

「なぜ長門に不備を申請していない」

「それは・・・」

無駄なところで遠慮をする奴だな。

「やはりデブは少し動くのも面倒だったか」

「なんだとお！」

「早く長門のところに行け。お前の身長なら予備のジャージがあるはずだ。交換してもらって来い」

「いや、しかし・・・」

「まだ渋るのか。」

「これは命令だ、早く行け、デブ！」

「誰がデブだったっーんだよ！」

走り去っていった。

その後はつつがなく終了した。

「この後は八つある職種の全てを30分ずつ体験してもらう。工場は夕張のもつで、食堂は間宮の元で手伝いだ。夕張にはドックの高速修復剤の施設を直してもらうことになっているので、工場はドックに向かうように。経理と物資は第一会議室だ。通信は放送室でモールス信号機の練習、25分たったら移動の合図を放送で館内に流すように。戦略は秘書室の長門のところだ。大本営がどのようなにして、戦略や陣形を考えているのかを、模擬会議を実施して学んでもらう。医療

は海岸だ。担架が置いてあるのでそこに一人乗せてドックまで運べ。その後、修復剤の在庫確認だ。数があっているかどうかを確認しろ。最後にグループに関してだがAとHの班に俺が勝手に振り分けた。職種はプリントに書かれた順番に回るように。スタンプが置いてあるからちやんとスタンプを全種類集めるように、長門」

「それでは、プリントを配布する。各自一部ずつとって回せ」

長門にその場を任せて、俺は第一会議室へと向かう。

提督室からノーパソと電卓を抱えて会議室に運ぶ。

延長コードとパソコンを繋ぎ終わると艦娘たちが会議室に入ってきた。

「パソコンのある席が物資、電卓のある席が経理だ」

艦娘がとても嫌そうな顔をする。そうだ！経理と物資の担当は俺なんだよ。残念だったな！

「よし、まず経理には卓検の問題に挑戦してもらおう。問題用紙と基本的な電卓の使用方法とペンの持ち方の例が書かれた紙があるはずだ。それを参考にしながら回答用紙を埋めろ。因みに選考するときの判断材料になるから真面目に取り組むように」

定員を越えた場合は抽選ではなく、ポテンシャルで判断されると言うことだ。

「次は物資だが、エクセルを使って折れ線グラフを作成してもらおう。手順は写真付きの資料があるのでそれを参考にするように。マウスの使い方まで載っている親切仕様だ。お前らがいかにバカといえども流石に大丈夫だろう。が、念のため俺が見回りをするから分らなかったら質問しろ。例のごとくこれも採用の判断材料になるから頑張れよ」

開始から十分が経過した。始めこそ戸惑っていたものの道具にはある程度慣れ始めたようだ。経理の計算も様になってきた。進捗具合にも徐々に差が出てきているようだ。

パソコンも似たようなものだ。そろそろデータの入力が終わりそうだ。だが、難しいのはここからだ。横軸と縦軸の数値はなにか。表のどの範囲を使えば良いのか。目盛りは？表題は？お手本とは全く

別物のグラフが作成されることになるだろう。

だが新しいことに挑戦することは本来の人間にとって、非常に楽しいことなのだ。基本的な欲求が満たされると、人間は更なる欲求を求める。マズローの5段階欲求説で言うところの最上位に知識欲や好奇心は分類される。艦娘たちも真剣ではあるが楽しんでるようだ。新しいことに挑戦することは人間の生存理由そのものだ。それは艦娘でも本来同じであってしかるべきだ。彼女たちの思考が人間のそれと同じであるという根拠は大切だ。そうした根拠を積み重ねれば人権の獲得もそう遠くない未来に実現するだろう。

今は自分の鎮守府で精一杯だが許して欲しい。必ず他の艦娘も救ってみせよう。神は死んだ。メシアも来ない。来るのは絶望だけだ。打ち砕くことができるのは本人だけなのだ。艦娘は漢息が守らねばならぬのだ。

それにしても漁船が軍艦を守る日が来るとはな…。

『えっと、時間になりました。各自次の職種体験に移って下さい』
「ではここまでとする。各班は次の職種体験に向かってくれ。ご苦労だった」

初めてにしては中々の出来だ。艦娘たちも手応えややり甲斐を感じてくれただろうか…

ケイリニシヨツカナー！

シゲンモタノシカッタヨー！

… 感じてくれたようだ。

長門からもメールが入る。どうやら戦略にも興味を持ってくれた奴がいたらしい。この分なら他も大丈夫そうだ。

その後も新たに会議室に現れては露骨に嫌な顔をされて、SAN値をゴリゴリ削られながらもなんとか全ての班を指導し終えた。どの班にも少なからず興味を示してくれた奴がいたのが、せめてもの救いだ。精神をすり減らしてまで教えた甲斐があるというものだ。

明日の内には願書が出揃うだろう。

社畜になる覚悟は出来たかな？一年後には立派な戦士になれるだろうよ。

PE (ポリエチレン)

「艦隊、総員起こし！」

改革が始まった鎮守府に起床ラツパの音が響く

『昨日と同じだ！遅刻したら腕立て伏せだ！10分で整列しろ！』

今日は10分で全員が整列出来たようだ。遅刻はない。

「今日は点呼の取り方を教える。背の順に並び直せ」

背丈を比べながら列が再形成されていく。

「取り敢えず戦艦と給糧艦の金剛と間宮は見れば分かる。さて、お手本は軽巡に示してもらおう。ほう、天龍が先頭か」

「文句あんのかよ」

その位置で腰に手を当てられると小学生の先頭を彷彿とさせるな。

「いや。先頭から順番に番号を叫んでもらう。天龍は1だ。前の人間が番号を言ったら後ろの奴は次の番号を言ってもらおう。始め！」

「い、いち！」

「2」

「3だよー」

「4」

「5」

「:6」

「:7」

「天龍！キョドるんじゃない！」

「テメエがいきなりやらせるからだろうが！」

「3番の那珂！ふざけた語尾を付けるな、ぶっ飛ばすぞ！」

「でも… 那珂ちゃんはアイドルだから…」

「6番、神通！声が聞こえん！お前の喉は飾りか！引きちぎるぞ！」

「すみません…」

「後ろにいくにつれてテンポが悪くなってる。7番の夕張の遅れなどもはや点呼の列にいないようなもんだ」

「各自練習しておくように。明日から導入する」

「はー」

よしよし、だんだん軍隊らしくなってきたな。

「本日は艦友会活動の準備を行う。午前中は二組に別れて屋外と屋内でスポーツを行う。屋外は陸上とテニスだ。屋内は卓球とバドミントンだ。それ以外のスポーツは人数的に無理だ。とはいえ人数を集められれば部活として認定するので、やりたいスポーツがあるやつは後で申請するように。各自ジャージに着替えて集合。戦艦、巡洋艦、潜水艦は体育館だ。それ以外は校庭だ。長門」

「集合は60分後だ。それまでに朝食を済ませておくように、解散！」
俺もジャージに着替えて体育館に移動する。艦娘が集まる前に卓球台とバドミントンのネットを張らなくてはならない。

バドミントンのネットを張ってから卓球台を引っ張り出す。正直一人で卓球台を何台も運ぶのはかなりの重労働だった。仕上げに、卓球ネットをちまちまと張っていく。

あと二台まで準備が整ったところで艦娘達が集まり始めてしまった。俺の姿を確認すると露骨にいやな顔をする。残念でした、長門は屋外担当でした。

艦娘からの視線に耐えながら残りのネットを張り終える。

「さて、ではラジオ体操を始めろ！」

「ラジオ体操？」

え…？知らないの？平成から続くロングセラーなんだが…。後でビデオ見せなくてはならないな。アレはとても理にかなった素晴らしいものなのだ。

「いつも準備体操はどうやってたんだ？」

「あ？んなもん、各自でやるに決まってるんだろ」

さも当然かのように返されてしまった。

「では天龍前に出て来てやって見せてくれ」

「つなんでオレがそんなことやんなくちやなんねえんだよ！」

「なんだ、恥ずかしいのか？」

「ちげーよ！やりやあいんだろ！」

「始めから大人しくそうしている」

「テメエ…」

「お前らも天龍の真似をして準備体操をやれ」

「お、おい！」

「お前が手を抜くと皆が怪我をすることになるからちゃんと言えよ」

「クソっ！」

俺も艦娘に混じって準備運動をする。因みに金剛の隣に並んだのだが、距離を取られてしまった。しかもジャージのファスナーをしっかりと首もとまで上げやがった。そんなに見られたくないですか、そうですね。

またしてもメンタルに深刻なダメージを受けながらも、一通りの準備体操を終える。

「最初は比較的疲れない卓球から始めるぞー」

厳密には疲れないのではなく、疲れられないのだ。素人ではそんなに大きな動きはできないからな。

「簡単なルールだけ説明する。この白い玉をラケットで打つ。サーブスは自分の陣地にワンバウンドさせてから相手の陣地に入れる。後は交互に相手の陣地へと打ち返すだけだ。で、失敗したら負けだ」

「なんだ簡単じゃねーか」

「じゃあお手本だ。天龍、こっちに来い」

「なんでオレばかり…」

「お前がいちいち息巻くからだ。いいからラケットを持って」

「おいおい、ヘツポゴが相手じゃ話にならねえぜ？」

「じゃあサーブだすぞー」

ある程度返しやすい場所にサーブを出してやる

「なんだ余裕じゃねえか」

おお、本当に始めてとはおもえんな。ラリーが止まらない。

「で、慣れてくると強打することも出来る」

このままでは終わらないのでフォアを思い切り振り抜く

オオー

「…っ！お、おい！なんだ今のは、反則だ、反則！」

「これが本来の卓球だ。温泉のピンポン遊びとは別物なんだよ」

愉悦！

「大体ルールは分かっただろう。最初はラリーが続くように、慣れてきたら相手のミスを誘うようなコースに打ってみるといいぞ。じゃあ適当にペア組んで始めろ」

適当にペアを組む。ボッチは先生と組むことになる。例えば、母集団が偶数であつても余つてしまうのだから不思議だ…。

「おい！お前どこに行くんだよ！」

「え？いや椅子に座ろうかと…」

突然呼び止められたので若干素が出てしまった。

「なんだ逃げるのか？勝ち逃げなんてオレはぜってーに認めねえぞ！」

「仕方ない、受けてたとう」

「よし！次こそはボコボコにしてやるからな！」

「ああ、言い忘れていたが俺は元卓球部だ。」

「へ…？」

「スコンクで吹っ飛ばしてやるよ！」

試合の途中でサーブの出し方や、フォア、バックなどの技を教えていく。流石に天龍ほど飲み込みのいい奴はいなかったが、やはり運動が得意な奴が多いようですぐにコツを掴んでくれた。

「よし、じゃあ卓球はここまでだ。休憩したら次はバドミントンだ。水飲んできても構わんぞー」

「クソ…」

因みに天龍は俺から一点も取れなかった。俺に挑むのに三世紀早まったようだ。

「よし、じゃあ次はバドミントンのルールを説明するぞー」

まあ卓球とほとんどルールは変わらないので説明は簡単だった。

天龍との試合で想像以上に体力を消耗したので、椅子に腰掛けて水筒の水を飲む。

「おい！俺と勝負しろ！」

「またか…龍田とやればいいだろう」

「卓球のリベンジだ！いいから面貸せ！」

だんだんチンピラみたいになってきたな。喧嘩でも始めるのかよ。
「仕方のない奴だな…」

傍にあつたラケットを掴んで、椅子から立ち上がる。

「元卓球部つてことで遅れを取ったが次はそうはいかねえぜ？」

「そうか。ああ、言い忘れていたが俺は中学と高校は体育館掃除だつたからな」

「あ？それがなんだつてんだよ」

「掃除が終わってから毎日バドミントンやっていたんだ」

「…は？」

「勝てるといいですねえ？」

ヌルフフフ

「よし、じゃあ今日はここまでだ。このあとは長門のところでテニスと陸上だ。以上、解散！」

「くそお…」

「なんだ天龍？三点もこの俺から取ったんだ、良かったじゃないか」

「うるせーよ！」

怒つて出ていってしまった。

正直なところ後半は普通に負けそうだったしな。やっぱり天龍は運動が得意なのだろう。他の艦娘も楽しそうにしてたし、気に入ってくれた奴がいるといいんだがな。なにか本気で打ち込める趣味に出会えることはそいつの人生をより有意義なものにする。是非とも艦娘にも趣味を持って欲しいものだ。

那珂ちゃん

艦娘たちが四種目全てを経験したところでお昼となる。が、間宮も参加しているのでお昼の準備は当然ながら出来ていない。

しかし抜かりはない。今日は給食センターから給食が届けられているのだ。通常は一食分の注文など出来ないのだが、今日はたまたま近隣の中学が突然休校となったので、その余りを買収取らせてもらったのだ。そんな都合のいい偶然があるのかと言われればそんなものはない。が、タンカーを爆撃した時点で俺には良心やモラルとかいうものは残っていないからな。こんなのは朝飯前だ。

そんなことは露知らず、艦娘たちは給食を食べている。運動した後の食事はおいしそうだ。

そんな中、俺は昨日と同じように車を走らせる。今日の目的地は近隣の図書館だ。正直文化活動は多岐にわたるので、全てを経験させるには無理があるのだ。そこで本を見て学んでもらおうと言うことだ。

昨日と同じように長門のメールで昼食の終了を確認してから食堂へと向かう。

「午後は文化活動を体験してもらおう。といっても準備することができなかったので、本を使って調べてもらおう。書道と将棋、囲碁、かるたは俺のやつをロビーに置いておいたから勝手に使ってもらって構わない、実際にやってみる。本は借り物なので傷つけないように。一週間は置いておくから譲り合って使え。質問は」

那珂と目が合うがスルーする。

「俺は提督室にいるから頼みがあるやつは長門か俺に言え。長門、後は頼んだぞ」

「任された」

俺は提督室に戻るとコンテナ船の被害報告や職種の進路希望の調査書などを処理していく。

しばらくすると、扉をノックする音が聞こえてきた。

「入れ」

「那珂ちゃんだよー」

「その挨拶の前任の評価はどうだった？」

「えへへ…」

まあ殴られただろうな。

「で、なんの用だ。見ての通り俺は忙しい。手短に済ませろ」

「その…艦友活動なんだけど、アイドル活動やりたいなー！なんて…」

「確かお前は前任の提督の時からアイドルを自称してたんだってな？」

「そうだよー」

「それはお前にとって殴られてまでも続ける価値があることなのか？」

「那珂ちゃんはアイドルだからねー！誰かが笑顔を届けなくちゃいけないんだよ…。それは那珂ちゃんの役目なの…」

「俺にも殴られるかもしれないぞ？」

「それでも、那珂ちゃんはアイドルだから…」

「そうか」

「……」

室内に沈黙が訪れる。まあここまで本気の奴には協力してやるのもやぶさかではないな。

「お前は歌って踊るアイドルだったな」

「うん！那珂ちゃんが考えてるんだよー！」

「もしダンス教室に通えるとしたら、どうだ？」

「行きたい！けど…」

少し落ち込む那珂に一枚の紙を渡す

「それはとあるサイトのコピーなんだがな…。鎮守府の近くにダンス教室があるらしい」

那珂がキラキラした目でプリントを見ている。

「だが兵器である貴様らには身分証がないから学割が使えない」

どこか期待をしていた那珂の目が落胆とともに伏せられる。

「仕方がないので那珂には19歳という設定で通ってもらおう」

学生料金は18歳までだ

「えっ！」

那珂の顔が勢いよくこちらに向けられる。

「ただしタダというわけではない」

なにせ年間で18万もかかるのだ。那珂だけ特別扱いというわけにはいかん。

「なにをすればいいの?」

那珂が警戒気味に質問してくる

「お前を近いうちに横須賀鎮守の艦娘アイドルとして売りだそうと思う」

「本当に!」

「ああ、そこで収益を上げる。それが条件だ」

「那珂ちゃんなら余裕でトップスターになっちゃよ!」

「それはよかった。じゃあ今から教室に登録しに行こうか」

「え!今から!」

「ほら、置いていくぞ。早く着いてこい」

「お、おー!」

助手席に那珂を押し込んでから車を発進させる。

「那珂ちゃんお車に乗るの始めてー!」

「はしゃいでないでちゃんと経路を覚えとけよ。次からは一人で通うんだからな」

「えー」

「えー、じゃない。自転車買ってやるから必死で漕げ」

「買ってくれるの!」

「ママチャリだからな?ロードバイクとか高いやつは買わないからな。あれは短距離の移動には向かないからな」

「うん!」

本当に分かってんだろうな…。

「あと、俺とお前は兄妹という設定だ。絶対に提督とか呼ぶんじやねえぞ」

「なんでー?」

兵器がダンス教室に通つてるとかバレたら大本営から怒られちゃうだろ

「なんでもだ。絶対に艦娘ってバレるなよ」

「お兄ちゃんって呼んで欲しいのー?」

「バカなこと言ってるのはっ倒すぞ。ほら、着いたぞ」

「うわー!」

「いいか、ちゃんと挨拶しろよ?」

「了解です!」

ちよつと不安だが、よしとしよう。

中に入るとカウンターに人がいないようなので声を掛ける。

「こんにちはー」

「はーい!」

奥から若い女の人が出てきた。インストラクターの人だろうか。

「新規で会員登録がしたいんですけど…」

「ありがとうございます。お二人ともですか?」

「いえ、妹だけお願いします」

「かしこまりました、ご兄妹なんですネ」

「ええ、出来の悪い妹です」

「あらあら、可愛い妹さんじゃないですか。鼻筋も通つて、お鼻なんてお兄さんそっくりですよ」

「ええ、鼻は母親譲りです。な? 那珂」

「そ、そうだね! お、お兄ちゃん!」

「仲がよろしいんですね」

「そうですか?」

「ええ。あ、紹介がまだでしたね。私はこのインストラクターの三浦あずさです。よろしくね」

「あつ、えつと! 那珂ちゃ… 那珂です。よろしく願います」

「ではお兄さん、こちらの申し込み書類の記入をお願いします」

「分かりました」

「もしお時間よろしければ少し体験していつてはいかがでしょう?」

「どうする、那珂？」

「やりたい！」

「じゃあすみませんがよろしくお願いします」

「分かりました。その間に書類の方、お願いしますね」

書類の記入が終わってから待つこと30分。満足げな那珂と先生が出てきた。

「お待たせしました」

「ありがとうございます。那珂は大人しく言うことを聞いていましたか？」

「ええ、とつてもいい子です」

「那珂、今後も失礼のないようにしっかりと学ぶんだぞ」

「はい」

「では書類の方、確認させてもらいますね」

先生がカウンターに向かう。

「那珂、その自販機で好きなもの買ってこい」

疲れていそうな那珂にS u i c aを手渡す。

「自販機？」

あ、知らないのか。

「着いてこい」

自販機の前まで那珂を連れて行く。

「まず、欲しい飲み物のしたのボタンを押す」

試しに缶コーヒートのボタンを押すと、ボタンが緑色に点灯した。

「次にカードをここに当てる」

するとお金が支払われて飲み物が出てきた

「と、いう仕組みだ」

「すごいーい！」

那珂ちゃん大興奮です。

「じゃあ飲み物買ったからカウンターに来い」

那珂に再度S u i c aを手渡してからカウンターへと向かう。

書類のコピーや規約書などを受け取る。

「那珂ちゃん」

「はーいー！」

飲み物を片手に那珂がかけてくる。無事に買えたみたいだ。

「はい、これが那珂ちゃんの会員証よ〜」

「ありがとうございますー！」

カードを那珂が嬉しそうに受け取り…

「うげ…」

露骨に顔をしかめる。

「では今日はありがとうございます。これからも妹のことをよろしくお願いします」

「いえ、こちらこそよろしく申し上げます。またねー那珂ちゃん」

「ありがとうございますー！」

那珂からSuicaを受け取ると、那珂と並んで建物を出る。雲ひとつなく澄んだ青空は少女の新たな夢への旅立ちをまるで祝福しているようだ

「提督」

「なんだ？」

「提督って菊地っていうんですね」

「そうだな。今日からお前は菊地那珂だ」

カードには菊地那珂の名前が刻まれていた。

「うへえ…」

だから露骨に嫌な顔するなよ…。せっかくいいい感じで終わらせようとしたのに。

天龍ちゃんとデート

改革三日目。

鎮守府は激動の二日間を終えたため、今日のスケジュールは緩めだ。艦娘たちも次から次へと規則が変わっていったので、一旦頭の整理をする時間が必要だろう。

「今日はさざまな資料の提出日の前日だ。基本的に資料の提出は早ければ早いほどいい。締め切りギリギリで不備が見つかった場合、修正している暇などないからな。資料の提出が遅れると、後に続く仕事が続々にストップすることになる。一日の遅れは最終的には何倍もの遅れになる。よって、今日は溜まっている書類の整理に時間を当ててもらいたい。講師役の件についても長門から確認が来ると思うので、返事を決めておいてくれ。長門」

「講師役に関しては個別に館内放送で呼び出すので、秘書室まで来てくれ。以上、解散！」

今日は艦娘が暇のように、提督である俺も比較的暇だ。具体的には職種の人事名簿の打ち込み、マニュアルの作成、社会常識を教えるための教科書作成などだ。だが、どれもある程度は既に進んでいるので、そこまで急ぐ必要はない。

仕事に取り掛かる前に鎮守府を軽く散歩していると、金剛を見つけた。

「おー、金剛。なにやってるんだ？」

機嫌のいい俺は拒絶されるのを覚悟で話し掛ける。

「見て分からないのデスカ」

「ああ、洗濯か。なにか溢したのか？」

「溢さなくても服は汚れるネ。着た切り雀の不潔な提督とは一緒にしないで欲しいデース」

いや、近くのコインランドリーで洗ってるから。まあ、正確には週末にまとめて出す予定だ。

「いや、手洗するほど汚れないだろ。その服は洗濯機禁止なのか？」

「別に洗濯機でも洗えマース」

なんかいつもよりドスが効いた返答が来てしまった。

「じゃあ洗濯機で洗えよ。バカなの？死ぬの？」

ちよつと応戦してみる。

「あなたたち提督が売り払ったのデース。どの口が言っているのデースカ。とつても不愉快ネー！」

「お、おお。そうだったな……」

まさか……！

全速力で艦娘の寮へと向かう。慌てて共有スペースへと駆け込むと……

「ない……」

本来あるはずの冷蔵庫もレンジも電気ポットも洗濯機も、全てが無かった。

迂闊だった……。本館のロビーにはちゃんと備品が揃っていたから油断していた。見えないところの設備は全て金に変えられていたのか……。参ったな……。直ぐにでも設備を戻してやりたいが。

「おい、クソ提督！寮に駆け込んでくるとはどういう用件だ！ああん？駆逐艦たちが怯えてるじゃねえか」

「おお、天龍か。ちようど良いところに来た。お前、午後からの予定は開けておけ」

「は？なんでだよ」

「雑用だ」

「なんでオレがそんなことしなくちゃならねえんだよ！テメエが一人でやりやあいいじゃねえか」

「そうか……。残念だ。それじゃあ駆逐艦に頼むしかないかあ」

「あ？」

「結構重労働だからなあ。潰れてぺちゃんこにならないければいいなあ」

「ちよつと待てよ！」

「なんだ、天龍。お前はもう部屋に戻っていいぞ？」

「誰がやらねえって言ったよ！」

「ん？雑用を引き受けてくれるのか？」

「ああ、オレが雑用だろうがなんだろうがやってやるよ！」

「んじや、一時に迎えに来るから。それまでに昼食は食っておけよー」

「分かったらとつと出ていけ」

「いや、寸法測らないと」

「寸法？」

冷蔵庫と洗濯機のスペースをメジャーで測る。

ちなみに提督の七つ道具はメジャーの他にもドライバーセットとか100均で買った万能ナイフとかがある。そのうち提督の標準装備として大本营に提案してみよう。

寸法を確認してから、近隣の大型家電量販店へと向かう。店頭在庫は以外に少ないので何軒かはしごしなくてはならない。順番としてはケーズ、コジマ、山隈、だな。単純に近い順だ。ちなみに個人的な感想だが山隈電気の接客は家電量販店の中で群を抜いて悪い。まあ、店舗によって全然印象は違うと思うけど。一つの店舗が駄目だと系列の店舗全てに悪印象を与えてしまう。従業員は自分の店舗のことだけを考えていては駄目なのだ。系列店の数少ないデメリットの一つだな。

なんて下らない量販店への評価を下しながら、注文を済ませていく。今回は親切な定員さんに当たったため、納得のいく商品をスムーズに選ぶことができた。取り敢えず店頭在庫のある商品の契約を済ませる。

電気ポットは3つで1万円。うん。

電子レンジ2つで2万5千円。うぐ…

冷蔵庫は2ドアのタイプを選んだ。2つで10万円。うう…

テレビは多分もともと無かったと思うが、ないと可哀想なので買っておく。37インチのテレビ12個で42万円。ぐはあ…！

洗濯機は少々高めのを勧められてしまった。女子は衣服に気を使うと思うので、不満が出ないように奮発しておく。5個で50万円。oh…

なぜここまで端数が綺麗かというと、さつきっからいち俺がダメージを食らっていることと関係する。そう、経費が落ちなかったの

だ。理由は前と同じだ。

今まで大丈夫だったのなら大丈夫。

そのため、こうして自腹を切る事になってしまったので、ちよつとだけ値下げ交渉したのだ。幸いにも、大量に家電を買う上客だったので快く値下げしてくれた。本当に感謝が絶えない。

それでも合計金額は105万5千円だ。ポイントが相当溜まってしまった。正直嬉しくもなんともない。

俺はカードを持たない主義なので、ATMからお金を引き落とさなくてはならない。ちなみに一度に引き落とせる上限は100万円なので、2回に分けて引き落とさなくてはならなかった。こんな経験は初めてだし、これで最後だと思いたい。

鎮守府に戻ると真つ先に車庫へと向かう。選り取り見取り、というか緑しかないのだが、トラックを見て回る。軍のトラックは軍事機密の宝庫だったりする。これはほんの一例だが、ヘッドライトをつけなくてもレーザーを照射することで暗闇の中であっても走行できたりする。が、見た目がいかにもなので今回は却下だ。そうして見て回ると、お目当てのトラックを発見した。なんの変哲もない、いすゞの2tトラックだ。2tがどれくらいか想像つかない場合は

トントントントントンヒノノニトンのCMの最後に出てくるトラックがそれなので、参考にして欲しい。ちなみに普通免許でも2tトラックは運転可能だ。まあ俺は大型免許を持っているんだがな。軍に入ると大型免許を取らせてくれる場合が結構あるのだ。ちなみに大型免許は21歳以上が受験資格だ。

今日は無駄な解説が多いなと思いつつも、トラックを寮の入り口まで持つていく。

入り口で軽くクラクションを鳴らすと、艦娘たちが窓からこちらを警戒しながら覗いてくる。もう一回鳴らすと駆逐艦がビクツてした。面白いのもう一度鳴らそうとハンドルに手を掛けたところで天龍が出てくる。

「何回も鳴らすんじゃないやねえよ！一回で聞こえるっつーの」

「ああ、ウサミミ着いてるしな」

「ウサツ!? テメエ、この天龍様をバカにするとは、よっぽど死にてえらしい「プツプツ」」

あ、ビクツてした。

「テムエ〜!」

羞恥と怒りで顔を赤く染めている。

「早く乗れ。血圧が上がるぞ?」

「誰のせいだ!」

悪態をつきながらも大人しく助手席に乗り込む。

「ちゃんとシートベルト着けろよ」

俺がシートベルトを着けるのを真似して天龍もシートベルトを着ける。

久しぶりのトラックに少しだけテンションを上げながらトラックを発進させる

「はーしれ、はしれー! いすゞーのトラックー!」

「うるせえよ! 無駄に耳に残る歌なんか歌うんじゃねえよ!」

いや、それって歌に失礼じゃね?

「じゃあ音楽でもかけるか」

「音楽う?」

ちゃんとFMトランスミッターも用意してあるのだ。久しぶりにアニソンメドレーと洒落込もう。

軍のトラックはナンバーが通常とは異なるため隠しても直ぐにバレてしまうので、天龍に堂々と艀装を展開させて荷物を運んでもらった。

帰りにマツキヨで洗剤を購入する。あと、生理用品とかその他諸々は天龍に任せた。

「天龍も一応女だから任せて大丈夫だろう…。女だよな?」

「テムエ、やはり死にたいようだな」

「店内で騒ぐなよ? いいから早く買ってこい」

「本当にいいのか?」

コイツは変なところで遠慮するな。習性なのか?

「いらぬものは買ふなよ？」

「分かつてるよ」

俺は優柔不断なので、飲料コーナーでウロウロしていると天龍がかごを一杯にして帰ってきた。まどめ買いか……。

やめて！財布のライフはもう0よ！

「天龍はなに飲む？」

「いや……オレは別に」

また謎の遠慮か。

「いや、労働の対価は必要だろ」

「そ、そうか？」

まあ何時間も重労働させておいて対価が飲み物98円とは、訴えられるな。

「つってもなにがなんだかオレには分からねえな」

「じゃあMetsのグレープフルーツだな」

「旨いのか？」

「ああ、選ばれし者の知的飲料だ」

「は？」

「お前にジト目は似合わないぞ？」

「うるせえよ！」

マツキヨの割引クーポンをちぎっている最中に哀れむ視線を天龍から受けた気がするが、気付かなかったことにした。

天龍と新婚準備

天龍が冷蔵庫と洗濯機、俺がテレビといった具合で荷物を下ろしていく。男としてのプライドなど無い。

「あら、私も手伝おうかしらあ」

「おお、龍田も手伝ってくれるのか!」

「女々しい提督じゃなくて、天龍ちゃんのお手伝いよろ?」

「だってパワーシヨベルと人間だし...」

「あ?」

地獄耳かよ!? やっぱりウサミミなんじゃないのか?

「これは一体なんの騒ぎかしら?」

「なんだ? 加賀も手伝うか?」

「提督が物資を? 一体なんの風の吹き回しでしょうか?」

「いや、俺が用意する訳ないだろ」

「これは大本営が用意した物資だ。オレと提督は荷物を受けつとてきただけだ」

「大本営が...。次こそは提督の勝手にはさせません。私が守ります」

「あ? 気づかない内に物資を売り飛ばされた間抜けがなに言ってるんだ? どうせまた同じだよ。戦う以外に脳の無い一航船は引つ込んでろ」

「頭にきました」

「お、おい加賀...」

天龍が仲裁に入ってくれようとしている。ちよつと嬉しい。だが、それは駄目だ。あくまでも俺は艦娘全体の敵なのだ。仲裁なぞされて艦娘の間に溝ができては本末転倒だ。

スマホを取り出して長門にメールを送る。

「おい、提督も今の発言は取り消しておいた方が身のためだぞ」

「一航船の侮辱しておいて、私を無視してスマホですか。許せません」

「お、おい提督...」

「黙れ!」

スマホを天龍の頭に向かって投げつける。当然だが、蹴りおとされ

てしまった。画面がバリバリだ。

「デメエ！人がせつかく…！」

『長門だ。講師役の確認を取る。加賀は至急秘書室まで来るように』
「早く行けよ」

感情に従うべきか、長門に従うべきかで揺れる加賀を無視してト
ラックへと戻る。荷物運びをやめて運転席でタバコを吸う。その行
為自体が俺へと落ち着きを取り戻させる。深呼吸みたいなものだ。

ペットボトルに手を伸ばしたところで、加賀が本館へと向かうのが
見えた。

「おい」

天龍が窓の外に立っている。

「なんだ」

天龍が画面の割れたスマホを無言で突き出してくる。ガラスが手
に刺さらないように気をつけて受け取る。まあ仮にも俺は艦娘なの
で、ガラスごときでは怪我などしないのだが、人間時代からの感覚の
名残だ。

「なんで、あんなこと言った」

そりゃ、敵として嫌われるためだろ。

「なんだ？スマホを投げつけられたことは構わないのか？」

「それもだ。あんな攻撃は蹴り落とされることくらい分かりきってた
だろうが」

意外に天龍の頭が回っている。コイツは馬鹿なのが取り柄だった
んだがな。ちよつと利用しすぎたか？

「お前はなにか勘違いしてないか？」

「あ？なにがだよ」

「俺は前任の提督を罫に嵌めて失脚させたんだ。つまり、前任よりも
俺はクズだからな。撃沈も解体も躊躇いなくやるから覚悟しておい
た方がいいぞ？」

「そんな…嘘だろ？」

天龍が裏切られたみたいな顔をしている。やはりコイツは俺のこ
とを完全な敵として認識していなかったらしい。

「本当だぞ？そもそも25歳で中佐って時点でおかしいだろ」

「どういうことだよ」

「部下を殺し、同期をしりぞけ、上司を引きずり落とす。そうやって周りの人間を踏み台にしなくちゃこの歳で中佐になんかなれねえんだよ。権力争いってのはそういうもんだ。今回、俺が提督としてのポストを手に入れられたのは偶然でもなんでもない、必然なんだよ」

まあ、あながち嘘ばかりという訳でも無いしな。部下とか数えきれないほど殺してるし。

「それじゃあ…」

「エリートってのは狡猾で残忍じゃなきゃなれねえんだよ。お前らも所詮は俺の出世のための踏み台に過ぎん。初めて会ったときに言っただろう？だし汁が出なくなるまで使うとな。正しくだし汁なんだよ、お前らは」

「デメエー！」

「なんだ？また大破させられたいのか？」

「っ！じゃあやっぱリアルはお前の仕業か！」

「そういうことだ。だが、言っただけだ。次はない。俺を攻撃するならば駆逐艦たちと無理心中する覚悟ができてからにしろ」

「チッ！」

天龍がトラックから離れていく。

「おい、ちゃんと荷物は運べよ」

返事は無かった。

荷物は龍田や金剛が運び込んでくれた。

俺は思った以上の精神的ダメージを受けてしまったらしく、仕事をせずに寝てしまった。

起きたのは夜中の二時だった。存外、俺の精神力はタフなもので、起きたときにはメンタルがリセットされていた。家電が無事に設置されているかを確認するために寮へと向かう。

玄関に入ると散乱した段ボールと説明書が落ちていた。どうやら説明書を読んでも分からなかったらしい。

夜の内に設置してしまおう。艀装を展開して冷蔵庫や洗濯機を運

んで、次々と設置していく。こんなのは電源プラグ、蛇口、排水溝を繋げば終わりだ。

「おい」

最後の冷蔵庫を運び終わったところで声を掛けられる。慌てて艀装をしまつてから、後ろを振り替える

「なにやってるんだ、まさか売ろうとしてるんじゃないやねえだろうな？」

「さあな」

「テメエ！」

「大体なんでこんな簡単なことも出来ないんだ。馬鹿なの死ぬの？」

「それは……。説明書通りにボタンを押しても動かねえし、冷蔵庫も冷えねえし」

「故障かな？の一番最初に書いてあるだろ。電源プラグは抜けていませんか？つて馬鹿にされてるだろ？」

停電じゃないですか？とか絶対馬鹿にしてるだろ。

「そもそも電源プラグが分からねえんだよ」

流石にそんな初歩的なことまで書いてある説明書は無いだろ。

「これだ、これが電源プラグだ。んでこれがアース端子だ。これをコンセントに繋がないと電気が供給されない。流石に馬鹿すぎて話にならん」

「あ？テメエに言われたかねえよ！」

「は？さっき言っただろ、俺はエリートだ。頭がいいんだよ」

またしてもしよんぼりとしてしまった天龍を放っておいて、提督室へと帰る。テレビの設置は天龍がやってくれるだろ。

見えそうで見えない

改革4日目の朝。4日目ともなると早朝の起床も慣れてきたようで、余裕を持って集合が出来るようになってきた。

雑談に耳を傾けると天龍がヒーローになっていたようだ。どうやら家電を使えるようにしたのが天龍だと思われるようだ。

「オレじゃねえって言ってるだろ！」

「あら、天龍ちゃんったら照れてるのねえ」

「ちげーよ！おい、提督！」

「なんだ、すごいじゃないか天龍！バカもたまには役に立つな」

「テメエ！後で覚えておけよ！」

「噛ませ役の捨て台詞かよ……」

「総員注目！」

長門の号令が掛かったので、今日の予定を告げる

「午前中は訓練の内容に関する会議を行う。午後は課業を実施した後実際に訓練を行う。長門」

「講師役を引き受けてくれた艦娘は今後の授業の参考にするため、提督の授業をしっかりと聞くこと。以上、解散！」

人になにかを教えるということは、結構得意だと思う。社会常識を教える授業も滞りなく進んでいる。のだが……

「おい、加賀！ちゃんと授業を聞け」

「聞いています」

「お前、午前の会議も明後日の方向を向いていただろう。お前も講師をやるんだからしっかり授業は聞いておけ」

「あなたのような人間の授業など参考にしたくありません」

「いや、別に参考にしなくてもいいから授業はちゃんと聞いてくれよ……。困るのはお前だぞ？」

「別に私たちに社会常識など必要ありません。困ることもありません」

仕方ない。サプライズ的にとっておいたが、最終日の計画を話すしかないか。

「そんなことはないぞ? いいか、他の奴もよく聞け。明明後日は鎮守府外学習がある。お前たちにはショッピングモールで買い物をしてもらう。予算は一人10万円だ」

艦娘たちに動揺が広がる

「それが今月の給料だ。来月以降は毎月18日に3万円ずつ支払われる。今回の10万は特別処置だ。大本営に感謝しろ」

もちろん、大本営は兵器などに給料は支払わない。そのお金は俺の給料からだ。一人当たりの年給が36万。艦娘は全員で25人。年間で900万の予定だ。中佐という階級と提督という役職者、さらには前線の基地での危険手当で俺の年収は優に1000万を越える。食費も家賃も0のこの環境ならば充分生きていける。車の維持費だけ気を付ければ大した出費はない。残りは両親への仕送りだ。昔は結婚を考えて貯金もしていたが、もう諦めた。25歳にしてこの激務。結婚しても家には帰れないだろう、それどころか彼女をつくることすらこの状況では不可能だ。一体どこで間違えたのだろうか。

始めよりもさらに真剣になって授業に取り組む艦娘たちを見て、現金な奴らだとちよとだけ思いながらも授業を終わらせた。

課業の後は訓練の予定なのだが、今は提督室から訓練を眺めている。始めこそ近くで見学していたのだが、本来ではあり得ないほどの流れ弾が飛んで来るので、諦めて部屋に戻って来たのだ。現場は長門に一任することにした。

昨日提出された書類をデータにして打ち込んでいく。大半は長門がやってくれたので、思いの外早く終わることができた。

申請された部活動を見ながら予算を概算していく。弓道などのもともと施設が揃っているものならまだいいが、初期設備から全て揃えらるとなると予算がかさむな…。

天龍と龍田は卓球か。恐らく俺に負けたのがよっぽど悔しかったのだろう。龍田が薙刀じゃないのは天龍と同じ部活に入るためだろう。

やはり実際に経験した卓球やバドミントン、テニス、陸上が人気だな。他には服飾や料理、茶道、将棋、文芸、社研とかか。まあ多種多

様でいいか。

粗方の仕事は片付いたので、外出することにした。提督の軍服を脱いで、私服へと着替える。が、ここで深刻な問題が発生する。昨日の買い出しにはジャージで向かったのだが、これが結構恥ずかしかったのだ。そこで私服に着替えようと思いついたのだが、どれを着たらいいのか分からないのだ。普段はジーパンにシャツとかなのだが、そんなラフな格好を艦娘たちに見られでもしたら俺のイメージが崩壊してしまう。

結局悩みに悩んだ末、スーツという無難なところに落ち着いた。久しく着ていなかったが、特に問題なく着ることができた。

ポロポロになってしまった携帯を買い換えて、書店へと向かう。先ずは教師向けの教本を幾つか見繕う。講師役の艦娘に配布する予定だ。次に女性誌も年代別に幾つか購入する。最終日のシヨツピングの下調べとかに使ってもらおう。その他にも艦娘たちの興味を引きそうな雑誌や本を何冊か選んでおいた。

鎮守府に戻った頃にはすっかり夜になってしまっていた。ちょうど夕食と入浴の時間だ。艦娘たちに見つからないようにこそそと秘書室まで移動する。秘書室のドアをノックする。

「入れ」

「ただいまー」

「おお！提督、待っていたぞ。本というのはそれか？」

手に持っていた荷物を長門へと渡す

「すまん、少し遅れた。それを艦娘に渡しておいてくれ」

「提督が渡したらどうだ？きつと喜ぶぞ？」

「いや、敵である提督からプレゼントとかダメでしょ」

「それもそうだな」

長門が愉快そうに笑う。なんだか久しぶりだ。

「あんまり長居でもして見つかったら大変だな。俺は部屋に帰る」

「ああ。お疲れ様だ」

「お前もな」

買ってきた本の中にはアニメの原作とかも結構あったので、艦娘か

らは長門の趣味だと勘違いされたらしい。まあ、長門も俺の影響でアニメはよく見るのであながち間違いでもないがな。

今日からはテレビも設置したし、もしかしたら深夜アニメが流行るかもしれないな。

・・・設置できたかな？心配になってきたので長門にメールを打って確認する。

まもなく長門から返信が着た。写真が添付されていたので開いてみる。

みんな楽しそうにテレビや漫画といった娯楽を経験していた。天龍が駆逐艦に囲まれながら最後のテレビを設置している。天龍も満更では無さそうだ。こうして目に見えて成果を確認できたのは案外初めてかもしれない。

メールに鍵を掛けて、画像も保存する。満更でもなさそうな天龍を待ち受けにしてからスマホの電源を落とした。

昨日の加賀との一件で少し不安になっていたが、艦娘たちも少しずつではあるが元氣を取り戻してきているようだ。艦娘がどんな扱いをされてきたのかは具体的には知らないし、おそらくその傷が消えることは一生ないのではないかと思う。人は過去を乗り越えて生きていくものだし人生とは過去の連続であるから、それでいいのだと思う。だったら俺に出来ることは今を少しでも良いものにする、それだけだ。

ちよつと気分が良くなってきたので、夜空を眺めながらタバコでも吸おうと思いい外まで出てきた。お供は缶コーヒード。

丁度いい段差を見つけて腰を下ろす。缶コーヒートのプルタブを起こそうとして一回失敗してしまった。

「おい」

再度プルタブを起こそうとしたところで声が掛けられる

「ここは関係者以外立ち入り禁止だ。誰だか知らねえが、この天龍様に殺されたくなければとっとと出ていけ」

振り返ると、仁王立ちの天龍がいた。角度的には天龍の下着が拝めるはずなのだが、夜なので全然見えない

「ん？天龍か。まさか提督を部外者扱いか。なんだ、代わりにお前が提督でもやるのか？結構大変だぞ？」

「て、提督!？」

「見れば分かるだろ、ボケたか？」

「スーツなんて着てたら見ても分かんねえよ！」

ああ、そういうえば着替えてなかったな。

「テメエ昼間どこにいたんだ」

「なに、ストーカー？なんで出掛けたの知ってんだよ…」

「ば…！ちげーよ！ただ車が無かったからな」

怒ったりドヤ顔したり忙しい奴だな。別に自慢できるほどの推理じゃないぞ？

「そりゃあ、お前に壊されたスマホを買い換えてたんだよ」

「本当にそれだけか？」

「なんだ？俺が寄り道しちや駄目なのか？」

「ちげーよ。ただあの本を用意したのがテメエなんじゃないかと思っただよ」

やつぱり、最近鋭いな…。いや、逆に昨日の一件で俺のことを疑い始めたのか？

「本？なんの話だ？」

「惚けんのか？昨日のトラックでかけてた曲がアニソンとか言ったな。今回の本の傾向もそういうのが多かったぞ。長門の趣味ってたが、長門の知らない本もあった」

「そりゃあ自分の好きな本だけ揃える訳にはいかないからな、知らない本があってもおかしい話ではないだろ」

「長門もそう言ってたがな、オレはそうだとは思えねえ」

「だからって俺が用意したってのはもっとおかしいだろ。俺にメリツトがない。お前は一体どういう思考回路をしているんだ？やつぱり馬鹿なのか？」

「バカじゃねえよ！」

「じゃあなんだよ。根拠がないにも程があるだろ」

「勘だ！なんかこう…上手く表現できねえんだが、なんか引つ掛か

るんだよ」

「勘か……。やはり野生動物の感覚を残しているようだな。頭の病院に行くことを勧めよう」

「テメエ！人が真剣に話してるつつーのによ！」

これ以上話すのは危険な気がするので、わめくて天龍を放置して提督室へと戻る。

「おい！コーヒー置きっぱなしじゃねーか！」

「ゴミの処分も部下の仕事だ」

タバコを吸いながら本館へと戻る。

……。天龍にコーヒーはまだ早いかもしれないな。根拠はないが、勘だ。案外勘は侮れないものかもしれない。

改革最終日

色々と計画を建てた一週間はあっという間に過ぎ去っていった。明日からは通常運営再開だが、この分ならば大丈夫そうだ。鎮守府の新しい運用体制もある程度安定したものとなったし、演習もすっかりとこなした。腕が鈍っているということはない。コンデイションは今までとは比べ物にならないほど良い。こちらならば戦果も充分に期待が出来そうだ。

昨日の夜には艦娘全員に安い給料を配り終えた。社会常識もテスト済みだ。一人でも問題なく買い物をする事が出来るだろう。だが、引率は必要だ。今回もいつもと同じように俺と長門の二班に別れる。班分けは艦娘たちに任せた。長門と俺のどちらが担当になるかは恨みっこなしのくじ引きで決められた。恨みっこ無しのはずなのだが、俺はすごい恨まれて、呪まれて、呪われた。なんか修学旅行の行き先が突然近所の公園になったかのような反応だった。

その気持ち、分かると言えば分かる。俺も修学旅行はクラスに友達がいらないせいですつと後ろを歩いていたらからな。だが、そういう中でも楽しもうと思えば楽しめるのだ。最近は一人旅だって流行っているんだ。一人だから楽しめないなどということは決してない。だからお前たちも、開き直って楽しむことをお勧めするよ。元凶の俺が言うのもどうかと思うけど。

ちなみに、今回も俺の班には天龍がいる。ここ最近はお口が出ないようにあまり話さないようにしていたのだが、やはり一日に何度もエソカウトしてしまったのだ。「天龍ちゃんとの会話の半分以上があなたの話なのよ。困ったわねえ」ってな感じで、龍田から理不尽な脅迫も受けている。そう言われても流石に無視は可哀想だしな。また寿命が縮まりそうだ。

改革七日目の朝。

いつもと同じように起床ラッパの音が鳴り響く。ただ、艦娘の顔と入り口に佇む中型バスがいつもと違っていた。

艦娘の気分を害するのも悪いので、今日は挨拶などはせずに運転手

に徹する。バスガイドは長門だ。

「ちゃんとシートベルトを着けるように。理由も含めて授業で習ったな？」

「はい」

年少組の元気な返事が帰ってくる。長門も若干顔がにやけている。

「本日のバスガイドを勤める秘書艦の長門だ。宜しく頼む」

「宜しくお願いしまーす！」

「運転手は菊地だ」

「宜しくお願いしまーす！」

「げ…」

那珂だけが俺が運転手だと言うことに気がついたらしい。服装が今日はスーツだから誰も気付いていないようだ。

「あ？今日は提督はいないのか？」

艦娘たちに喜びの雰囲気の流れ始める。俺は運転席のマイクの電源を入れた。

『えー、車内ではあまりはしやぎすぎないようにご注意お願いします』

艦娘たちも俺が運転手だと言うことに気が付いたらしく、驚きと落胆の雰囲気広がった。集団になるとより失礼な奴らだ。

「さて、気を取り直しての最初のゲームは風船爆弾だ。風船を回していつて音楽が止まったときに風船を持っていた奴が罰ゲームだ。音楽は後ろの見えていない運転手さんに止めてもらう」

「えー」

「それでは始めるぞ」

元気のいいアニソンの音楽と共に風船が回されていく。風船が1周半した辺りを見計らって音楽を止める。

「は!?!おい！ふざけんなよ！」

「天龍ちゃん罰ゲーム！」

おお、天龍か。

「ちよっと待ててって！」

「お題を発表する」

「待てって言ってるだろうがよお…」

「那珂と一緒にアイドルごっこだ」

「え？私と踊るのって罰ゲームなの？ねえ？おかしくない？ねえ？」

「嘘・・・だろ」

天龍の黒歴史を作りながらもゲームは続いていく。天龍以外にも次々と犠牲者を出しながらもバスは潮風公園駐車場へと到着した。そう、目的地はお台場だ。

バスから降りて班ごとに点呼を行う。

「提督、全員揃ったぞ」

長門から点呼完了の報告を受ける。

「まずお前たちは国家機密そのものだ。周囲に艦娘とバレればたちまち騒ぎになる。その混乱に乗じて問題が発生する可能性は充分にあり得る。絶対に艦娘だと悟られることのないよう、細心の注意を払ってくれ」

「はい」

「あと、俺のことは提督ではなく先生と呼ぶように」

「え・・・」

なんだよ、そのドン引きの表情は。これだけの団体なんだから修学旅行生を装わないと駄目だろ。

「じゃあ長門、なにかあったら連絡してくれ」

「うむ。6時に集合でよいのだな」

「そうだ。じゃあそっちは頼んだぞ」

長門の班と別れると、俺たちはショッピングのためダイバーシティへと向かう。

「おつきいロボットなのです！」

駆逐艦がはしゃいでいる。他の艦娘も圧倒されているようだ。

「ガンダムな」

「ガンダムなのです？」

「ああ。アレに乗って戦うんだ」

「乗れるのです!?戦たかえるのです!？」

「という設定の空想上の存在だ」

「え・・・」

上げて落とす。艦娘が抗議の視線を送ってくる。

「世間知らずの貴様らが悪い」

「ひどいのです!」

「いいからそこに並べ」

「並ぶのです?」

「記念撮影だ」

艦娘の頭に?が浮かんでいるようだ。

「おい、そんな写真とってどうするつもりだ?」

「なんだ、天龍はそんなことも分らないのか」

流石に検討も付かないようで悔しそうにしている。

「ちゃんとお台場に來たって記録がないと大本営に報告できないだろ。ガソリン代が経費で落ちなかつたらどうしてくれるんだ」

艦娘たちも納得がいったようで、いそいそと並び始めた。まあ大本営に報告などしないし、ましてや写真で経費を落とすことなんてことはない。写真じゃなくて領収書だ、バカめ。

ガンダムと仲良く記念撮影をしてから建物に入る。平日ではあるが、結構な数のお客がいるようだ。

「はぐれたら迷子のお呼びだしを掛けるからな。そんな恥ずかしい事態にはならないでくれよ?」

念のために釘をさしてから、ショッピングを始める。流石に自由行動にする訳にもいかず、団体での移動だ。取り敢えず午前中は服を買う予定だ。

艦娘たちが買い物している姿を眺めながら、端っこの壁に寄りかかって休憩する。

会計が終わったら次の店へと移動する。

「H&M寄りたいたい奴はいるか?」

大半の手が上がったのでここにも立ち寄る。

そんなことを繰り返して、3Fから4Fへと移動4FでもGUとあった有名どころを抑えつつショッピングを続ける。そして、次の店へと移動の最中...

「おい、どこに行くんだ?」

「あ？そりゃあ次の服屋に決まってるだろ」

「服屋はここにあるだろ？通りすぎてもらっちゃ困るぜ？」

いや、だって…

「私もアンフィでお買い物したいわ〜」

だって、下着ショップじゃん。ハードル高すぎませんか？

「なんだ？恥ずかしいのか？」

「チツ。分かったよ、俺は外で待つてるからとつとと買ってこい」

「お前も来るんだよ！」

「ちよっ！おい！」

周囲の視線によって針のむしろ状態となってしまう。天龍は天龍で俺のことを困らせたかっただけのようでもその後のことはなにも考えていなかったのか、俺の前で下着を選べずに顔を真っ赤にして俯いていた。

いや、お前のせいだからな？

まだ午前中だというのに早くも疲労で倒れそうだ。無事に一日が終わればいいんだがな…。

お化け屋敷

フードコートでお昼を挟みつつ、なんとか服を全員分買うことができた。久しぶりの食事でエネルギーを補給したことで俺の体力はかなり回復できたようだ。

フードコートで話し合った結果、次の目的地はお化け屋敷となった。なんでも

「オレより怖い奴なんていねえぜ！」

ってことらしい。正直お化け屋敷を舐めてると痛い目に合うので気を付けた方がいい。

今回は「お台場怪奇学校」だ。かなり怖いと評判で、本物が出たと噂になるくらいなのだ。耐性のない人間には耐えられないと思うが、本人が入ると言っている以上仕方がない。小学校の修学旅行の時の俺と同じ思いをしてもらおうとしよう。

「3グループに分かれるぞ。チビどもは保護者が必要だから俺と同じ班だ。あとは適当に別れろ」

今回はコープスパパーティーという作品とのコラボ企画第三弾のようで、その設定を聞かされる。このお化け屋敷は過去にも自殺やじめ、殺人をテーマとしては物議を醸してきたが、その内容は命の大切さを教えてくれるというものだったりする。今回のタイアップの内容に期待しながら順番を待つ。

順番が回ってきたので、赤い光の懐中電灯を持って中を進む。

「やっぱり帰りたいのです…」

「まだなにも出ていないだろう？ここからだぞお…！」

「ひっ…」

懐中電灯を顔の下から照らして脅かしてみたが、駆逐艦への効果は絶大だったようだ。

「アハハハハ」

服の裾を掴む駆逐艦を可愛く思いながら再び前を向いたその時だった。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

包丁を持った少女と目があってしまった…。

その後も悲鳴を上げ続けることとなったが、引っ付く駆逐艦によって進行妨害をされながらも俺たちは無事にお化け屋敷を脱出することができた。

「いやあ終わってみると楽しかったな！」

「呪われる呪われる呪われる…」

おお…。鎮守府で初めて会ったときみたいな目になってるな。ハ
イライトが完全に消滅している。駆逐艦にはまだ早かったようだ。

「天龍ちゃん大丈夫？？」

「お、おお…」

軽巡洋艦にも早かったようだ。それにしても龍田が平然とし過ぎていて逆に怖いんだが…。初体験だから耐性とかないはずなんだが。

「じゃあ次の施設に行くか」

「ま、待てよ…」

「なんだ、天龍？腰が抜けて動けないなら俺がおんぶしてやるぞ」

「バカにするんじゃないやねえ！ぶん殴るぞ！」

「半泣きでキレられても怖くないぞ？」

「て、テメエ…」

「休憩してる暇なんてないぞ、これはお前たちが決めたスケジュール
なんだからな」

それに、外を歩いた方が気分転換には効果的だ。

次の目的地である日本科学未来館は宇宙、生命、情報社会がテーマ
となっている。中でも地学に関しては俺の得意分野なので雑学を
ちよいちよい披露しながら楽しむことができた。普段は駆逐艦との
会話はあまり無いのだが、お化け屋敷からは話す機会が増えた。もと
もと教えることが自分の性に合っているので、質問をされると悪い気
はしない。今日くらいは敵としての振る舞いを少しは緩くしてもい
いだろうということ、久し振りに雑学を披露することにしたのだ。
なにせ文系でありながら地学オリンピックの代表候補だったのだ、そ
の知識は伊達ではない。駆逐艦だけでなく他の艦娘も楽しんでくれ
ていたようだ。

駆逐艦との距離が少しだけ縮まってから建物を出る。まだ予定の6時までは時間がある。どこか時間を潰す場所がないかと地図を眺めていると・・・

「あれはなんなのですか？」

電がパレットタウン大観覧車を指差している。

「観覧車だな。あのカプセルの中に入れるんだ。乗ってみるか？」

艦娘たちがワクワクした目で観覧車を見上げる。どうやら最後の目的地は決まったようだ。

幾つかのグループに別れて観覧車に乗り込む。もちろん俺は一人だ。なんなら下で待つていようかとも思ったのだが、折角なので頂上からの景色を写真に残すことにしたのだ。勝利を刻むのが暁の水平線ならば、この黄昏の水平線には開戦の記憶を刻んで貰おう。艦娘の人権を賭けた長く険しい戦いの始まりだ。今日は記念すべきその第一歩なのだ、これほど素晴らしい景色は他にないだろう。記念撮影も何枚か撮ったが、この写真で今日は終いだ。鎮守府に帰ったらプリントアウトして飾るとしよう。

長門と合流してから食事と温泉を済ませる。一人での温泉は少し寂しかったが、ゆっくりと一日の疲れを癒すことができた。艦娘たちが眠りに落ちて静かなバスを鎮守府へと走らせてようやく提督室にたどり着いた時には既に10時を過ぎていた。

翌日から再開した鎮守府の運営は想像以上の成果を上げた。出撃頻度を下げたにも関わらず以前と比較してもなんら損傷のない結果をだし続けたのだ。それどころか以前までは大破は当たり前、悪ければ轟沈までしていたのだが、今では悪くて大破、時には無傷で帰還を果たすようになったのだ。今までは充分に行うことのできていなかった訓練や演習もできている。この分ならば戦力の向上は間違いない。無理を通して得た一週間の結果は想像を越えて、大いな成果を残した。これならば大本営や周辺の鎮守府にも申し分が立つ。

軍人の健康は戦力へと直結することが証明されたと言うに足るデータであろう。これだけのメリットがあれば上層部も艦娘の待遇を改めざるを得ないだろう。現在は長門を介して艦娘たちの意識の

調査を行っている。数値的なデータを俺が、艦娘の声を長門がまとめる形で論文をまとめている。ある程度長期のデータが必要となるため今すぐ提出することはできないが、このまま成果を出し続ければ大本営の方から理由を訊ねてくるかもしれないな。

課業や職種も段々と定着してきている。さすがに経理などはまだまだ付け焼き刀だが、その成長は目を見張るものがある。艦娘の真剣さが顕著に現れた結果の一つだろう。艦友活動も楽しんで取り組んでくれているようで、そこそこ充実した生活を送れているようだ。取り敢えずは一段落といったところだろうか。

このまま上手くことが運ぶといいんだが…

提督はボツチじゃなかった!?

新しい運営方針に変更してから早くも3か月が経過した。艦娘も新しい環境に慣れてきたのかさらなる成果を上げている。仕事のミスもほとんど無くなり、資源や経費の管理もほとんど自分達で行えるようになってきている。だが、知識を得てしまった敵はなかなか手強い。

俺の組んだ編成が非効率的だ、この陣形では駄目だなどと戦略課からの指摘が出始めたのだ。最終的には新たな陣形まで考案して提出してくるときだ。流石にこれには驚かされたが、果たしてその陣形は一定の成果を記録した。今は大本営に報告をし、新たな陣形として正式に認可されるのを待っているという状態だ。

資源課からは大本営から支給される分の資源が少ないことがバレそうになってしまった。これは長門の必要資源を少し多目に計上し、その余剰分で俺が食い繋いでいたので、危うく生命線を絶たれそうになってしまった。

経理課にしてもそうだ。大本営から送られる経費は本当にこれで全てなのか?なぜ経理課に直接ではなく、提督を介さなくてはならないのか?経費の申請もなぜ提督が預かっているのか?などの質問が相次いだ。横領を疑われているようだが、そうではない。艦娘の給料は俺の給料から出ているので、鎮守府での計上をそのまま大本営に提出するわけにはいかないのだ。艦娘からは透明化の要望が未だに出続けているが、のらりくらりといった具合で拒否し続けている。これがいつまで持つのかは分からないのでなんとか解決策を見つけないとこらだが、今のところは手詰まりだ。

要するに艦娘のスキルが俺の手には余るようになってきてしまったのだ。書籍を使った独学での学習も限界が来ているのは間違いない。

俺は久し振りに旧友の手を借りることにした。

東京にあまり大きくはないが、それでも充分に立派といえるオフィスを構えている「故の杜」の本社。その受付に何人かの艦娘を連れて

来ていた。

「こんにちは。日本国海軍中佐の菊地と申します。社長の須藤様と本日12時にインターンシップのお約束で参りました」

「社長に連絡を取りますので少々お待ちください」

受付の女性が受話器を取るのを確認してから、懐かしいオフィスを眺める。感慨に耽りながらオフィスを眺めていると、エレベーターから上質なスーツに身を包んだ男性が降りてきた。

「待たせて済まん、菊地」

「どうやら社長自らがお出迎えのようだ。」

「いや、今きたところだ」

「彼女たちが例の？」

「使えない部下どもだ」

「まあそう言ってやるな。彼女たちの対応は頼んだよ」

おそらく秘書であろう女性が艦娘たちを連れていく。無能扱いをしたせいで、艦娘からの抗議の視線が刺さっていたので都合がいい。

「話には聞いてたが、凄まじいパワハラぶりだな。一緒に働いてた頃とは大違いだよ」

艦娘が居なくなつた途端に人の悪い笑みで俺をからかい始める須藤。

「うるせーよ。誰も好きでヘイト集めてる訳じゃないんだよ」

「共通の敵になるんだったか？俺たちを纏め上げてたお前なら、鎮守の統治くらい普通にできるだろ」

「もとが正常じゃないんだ。流石に限度があるんだよ」

「まあ民間人の俺には軍の事情なんか想像もつかないけどな」

「いずれ全国民に知って貰うさ」

「内部告発の準備なんかバレたときには下手したら反逆罪で潰され兼ねないだろ。役人つてのは権力争いが凄いんだろ？」

「そう思うんだったら、踏み込んだ話はロビーじゃなくて社長室にしてくれ」

「ああ、悪い悪い。久し振りに会ったからな、会話を優先させちまつた。じゃあ行くか、元お前の部屋に」

「ああ、懐かしいな」

久し振りに訪れた社長室は昔と変わらないとまではいかないが、さほど大きな変化があるわけでもなく懐かしさを感じさせてくれた。

「お前が会社を出て3年か…。」

「この会社も須藤に代替わりしてから、随分と成長したな」

「バカ言うなよ。ゼロから会社を設立してここまで成長させたのはお前じゃないか」

「須藤たちが居たからだ。俺は単に発案しただけに過ぎない」

「正直、突然お前が葬儀屋を立ち上げようって言ったときは正気を疑ったよ」

「だが間違いないじゃなかったらどろ？」

「お前が建てたプランは完璧だったよ。それに日本が戦争を始めるかもしれないっていう予言まで当たったしな」

「ハズレだよ。まさか人外の生物と戦うことになるとは思わなかったよ」

「だが、死人の数は丁度よかったぞ？こう言ってはなんだが、葬儀屋にとってはいいい収入だったよ。平和の保証が無くなったお陰で、死に関して興味を持つ人間が増えた。高齢化も悪化の一途だ。お前の目を着けた業界、新たな保険サービス。全部が上手く言ってるよ」

「世の中の空気が悪くなるほど儲かってるっていうのもなんだかな…。まあ儲かってるようで良かったよ」

「平和なときから儲かってたけどな。社長のお前が録に給与も受け取らずに中古車なんぞに乗ってただけだからな？」

「俺は金の為に働いてた訳じゃない。ただ、学生起業をやってみたかっただけなんだよ」

「でも結局は軍に入隊したじゃねえか」

「元々言ってただろ？学生の内しか会社は経営しないってな」

「そんなに軍がいいのか…。死にたいのか？」

「まあ艦娘に殺されかけたのは事実だな」

「それって結構ヤバいんじゃないか…？」

「大丈夫だ、お前らに攻撃することはないだろうから安心してもらっ

ていいぞ」

「いや、そうじゃなくてな…。まあそれも大切なんだけどよ…。」

「じゃあ艦娘のことは頼んだぞ」

「まかせろ。そういうやあ本当に給料は要らないんだな？」

「ああ、前にも言ったがあいつらは人間じゃないからな。給料など配給されていない。あいつらに金を払うなら他の艦娘にも払わなくてはならなくなってしまうだろ。そんなに俺は金持ちじゃない」

「分かったよ。部下にも伝えてあるから安心してくれ。ただ、ちよつと気が引けただけだよ。タダ働きをさせることになってしまっからな」

事前に艦娘に関する現状は伝えてある。給料など出せば面倒なことになることは分かっているはずだ。それでもタダ働きをさせることに及び腰になるのだから、相変わらずお人好しな奴だ。もう少し旧友と話していたいが、鎮守府を

あまり長い間空ける訳にもいかないので、そろそろ帰らなくては…。

「じゃあまた来るよ」

「お互い忙しいからな。まあまた顔だしてくれよ、今日会えなかった奴も会いたがってたからな」

「ああ」

軍に入ってからろくに休みが無かったからな。鎮守府が安定したら飲みに行くのも悪くないかもしれないな。

久しぶりに友人に会ったことで、疲れきった心も幾分かましになったので、仕事にも精が出る。やはり優しさは必要だな、こう毎日敵意しか向けられないと心も荒むというものだ。

艦娘をインターンシップに出したのが功を奏したようで、艦娘全体のスキルが大きく向上した。最近では、俺のチェックなど必要がない程に完璧な仕事をするようになった。すでに多くの仕事が艦娘だけで完結しており、長門が確認して終わりとなる仕事も少なくなっている。

とは言っても提督としての職務が無くなるわけでは勿論なく、こうして毎日朝から晩まで働いているのである。挨拶などの仕事が結構

多いため、一日中机に嘯り付いている訳ではないのが唯一の救いだと言える。

準備

艦娘の給料を賃上げする為の資金捻出に頭を悩ませている正にそのタイミングで彼女たちはやって来た。

「失礼します」

「経理課か。なんの用だ、アポも取らずにいきなり」

普段は長門に連絡があるはずなのだが今回はそれが無かった。覚悟を決めた顔つきを見るに重要な案件のようだ。

「単刀直入にお伺いします。提督は私達の給料を横領していますね？」

なるほど、最近こそそそと会議を開いていたのはそういうことか……。長門にも知らせずに直談判ということは、恐らく俺を追い詰めるだけの資料を既に集めていると見てまず間違いなさそうだ。

「何故そう思うんだね？この俺を疑うんだ、それなりの根拠はあるんだろうな？」

「勿論です。先日のインターシップの際に、向こうの社員の方と友好的な関係を構築させて頂きました。軍隊に対し興味があられたようですので、問題のない範囲でお答えさせて頂きました」

「成る程、そこで賃金があまりにも低いことを指摘されたという訳か」「はい。そこで私達は軍の賃金のガイドラインを確認させて頂きました」

「こちらに書類が渡される。なにやら数字が三列に並んでいるようだが……」

「そちらの資料には現在支払われている賃金、正当な賃金そしてその差額が表示されています。正当な賃金の算出方法の内訳は次項に記載されています」

差額の合計は億単位にまで昇っている。これは艦娘たちが怒るのも無理ないだろう。

「それで？俺にどうしろと？」

「この事実を大本営に報告し、提督にはこの鎮守府より出て行って頂きたく思います」

「それは困るな。しかし私が君たちに正当な給料を支払っていない証拠はどこにもない。君たちが全部使ってしまっただけのことだろう」
「なっ…！」

まだまだ詰めが甘いな。こういうのはしっかりと証拠を集めてからでなくては駄目なんだよ。艦娘は口座を持っていないので、給料は手渡しだ。証拠を入手するには次の給料日まで待ち、その様子をカメラで撮影。手渡された封筒の中身を確認するところまで写さなくてはならない。もしくは俺が横領している証拠でも納めることだが、そもそもそんな事実がない以上証拠など存在すらしないがな。

「次の給料日は一週間後だったな。以降の給料が少なければまた騒ぐがいい。今回は証拠を抑えてすらいないにも関わらず、俺に楯突いた貴様らの負けだ」

最後にドヤ顔で勝ち誇ることも忘れない。

「次回の給料はしっかりと払って頂きますからね」

「ああ、前から払っていたがな。次は散財するんじゃないぞ」

「白々しい」

艦娘たちは苦虫を噛み潰したような顔で提督室を出ていった。一先ずは一命を取り止めたようだ。給料の配布映像を大本営に提出されていたら俺は今頃首だったな。首で済めばいいが…。

にしても来週かあ…。取り敢えずは貯金から捻出するとして、来月以降が問題だな。一時凌ぎではあるが、小遣い稼ぎするか。前から悩んでいた案件だけに一応のプランはいくつか用意してあるのだ。一先ずは一番手っ取り早い所から取りかかるとしよう。

果たして翌日の定例会議でその案は可決された。

「では鎮守府祭の実行委員会選出を次の定例会議で行う。各自考えておいてくれ」

そう、鎮守府祭だ！

俺は元々こういう行事が大好きな人間なんだ。学生の頃から実行委員を何度も務め、最終的には生徒会として各班のリーダーになってしまった程だ。正直、参加するよりも運営した方が楽しいと思う。旅行は準備している時のが楽しいという人が結構いるが、要はそんな

感覚だ。

俺は学生の頃に運営した学園祭のデータを探し、それを参考にテンプレとなる枠を作成するなどして次の定例会議を迎えた。その間に給料日が訪れたことで俺の貯金は綺麗さっぱり消え去ったが、よりいつそう下準備に専念することで考えないようにした。

「それでは実行委員会の選抜を行う。立候補者はいるか？」

意外にも積極的な艦娘が多いようでスムーズに実行委員は決まった。実行委員を残して定例会議は終了、そのまま実行委員会へと移る。

「まずは実行委員長を決める」

「それならもう決まってるぜ」

「ほう、天龍どういうことだ」

「さつき話し合って決めたんだよ。実行委員長はこのオレだ！どうだ、怖いか？」

「明らかにリーダーには向いてないだろ。誰だこいつを選抜したのは」

「天龍ちゃんはいつも駆逐艦の面倒を見ているから、皆を纏めるのは慣れてるのよ」

ああ、そういえば結構面倒見がいいんだったな。

「じゃあお前でいいや」

「おいつ！なんだその投げやりな言い方！もつと褒めろよ！」

「あー、偉い偉い」

「テメエ……」

「よし、じゃあ早速会議を始めるぞー。天龍、号令」

「え？あつ、お、おう。これから第一回実行委員会を始める」

なんか口調まで俺に寄せてないか？

「で、なにをやればいいんだ？」

「あー、資料作ってきたから取り敢えずはこれに沿ってやってみろ」

「えーと……。まずは班分けだな、よしーこれから統括、広報、ステージに別れてもらうー！」

俺はホワイトボードに統括、広報、ステージと書き込む。

「おお！提督もたまには使えるじゃねえか！」

人をパシリかなんかと勘違いしてないか？なんか龍田が悔しがつてるし。

「天龍ちゃん、班ごとの仕事はなんなの？」

龍田がいい感じに天龍をフォロワーしている。

「えつと…。統括は全体のまとめ役だな。出店する出店の内容の確認及び保健所への確認、当日の警備体制の計画とかだな。広報はパンフレットやポスター、看板、ウェブサイトの立ち上げ。ステージは特設ステージの運営全般だな。放送器具の設置、出演オフア、台本の作成、ステージの進行表の作成とかだな」

ホワイトボードへと内容を箇条書きにしていく。

「ステージ!?!じゃあ那珂ちゃんの出番だね！」

「ではステージは神通が請け負います」

「私は統括かしら、天龍ちゃんも統括になるんでしょう？」

「そうなのか、提督？」

「そうなるな。お前は統括のリーダーも兼任してもらおうことになる」

兼任って言うか仕事の内容が同じだからな。

その後も班分けはスムーズに終了した。

その後は天龍と何度か会議を重ねながら準備を進めていった。基本的には天龍が鎮守府を纏め上げ、俺が大本営や保健所等への連絡を行った。艦娘たちも楽しんで出店の準備を進めているようだ。因みに提督も出店している。グッズ販売だ。長門に頼んで艦娘から許可を貰ったポスター等のグッズを販売するのだ。美少女グッズ、それも限定品。ネットの反応を見るに鎮守府祭には全国からお客さんが来てくれそうだ。まあ、限定品ではあるが後にネットでも販売する予定なので在庫は大量にある。限定品の定義が揺るぎそうではあるが、取り合いになるよりはましだ。

そうして俺の金儲けの為の鎮守祭はどうとう前日を迎えた。

艀装を展開した艦娘たちが目を見張るスピードでテントやステージを組み立てていく。が、俺のテントだけ組み立てられる気配が一向にない。これは想定外の事態だ、非常に不味い。普通の人間が一人で

テントを組み立てるのは至難の技だ、少なくとも今の俺には出来ない。

どうしたものかと頭を悩ませる俺の元に、それは満面の笑みを浮かべた天龍がやってきた。

「どうしたんだ、提督？困っていることがあるなら言ってみたらどうだ？」

「オレのテントはいつになったら組み立てて貰えるのかなと思ってな」

「組み立てる予定はないぞ？」

「それは困ったな」

…

…

…

「ニヤニヤ笑ってないで助けてはくれないのか？」

「ん？オレは言ってみるとは言ったが、助けるとは一言も言っていないが？」

「なら何故来たんだ」

「勿論馬鹿にするためにきまつてるだろ。どうだ、悔しいか！」

「コイツ…」

「それはとても残念だな…」

「そうだろお！いい気味だ！」

「会議を何度もした天龍なら分かってくれると思っただがな…」

「え…？」

「鎮守府祭を成功させようと頑張ってきたんだがな…」

「それは…。お前はお金稼ぎが目的で…」

「テントが無いんじゃないか明日は出店できないか…。折角準備してきたんだがなあ…」

「えっと…、オレは…その…」

こうやって全身から悲壮感を漂わせれば天龍ならば折れてくれるだろう。なにせ鎮守府祭の準備で一番苦労したのは天龍だからな。同情を感じ得ないはずだ。

「こ、今回だけだぞ！」

よし、来た！ちよろい、ちよろい。

「なにが今回だけなのかしらあ？」

ちよろいと発言してすみませんでした！龍田さんがセットな忘れちゃったあ！

「い、いやコイツのテントを…」

「天龍ちゃんは委員長なんだからみんなに指示を出さなくちゃダメよ〜？」

「でも…」

「こんなゴミは放っておけばいいのよ？」

「そうだぞ、天龍。俺も貴様のような疫病神にテントを触られて店の売り上げが落ちたらたまったもんじゃないからな」

「テ、テメエ！人が折角…！」

「早く持ち場に戻れ、サボりか？」

「…っ！もうテメエなんか知るか！」

踵を返すと、天龍はステージへと向かっていった。

さてどうするか…。と、テントの骨組みに触れた瞬間に手だけではなく、首筋にもひんやりとした鉄の感触が伝わってきた。

「あまり天龍ちゃんに近づくと、どうなっても知りませんよお？」

いや、龍田さん？どうにかなるんしやなくて、あなたがどうにかするんじゃないですかね？主に首筋に当てている薙刀で…。

「分かってるよ。そもそも疫病神と俺のやり取りを見てて仲が良いように見えたか？」

「どうかしらね…」

疑惑の目を向けながらも龍田は薙刀を引っ込めてくれた。もう少し気を付けた方がよさそうだ。

鎮守府祭

鎮守府祭当日。

艦娘たちは朝早くから荷物の搬入作業に取りかかっていた。勿論俺もだ。トラックの荷台をテントの裏側に繋げて、必要な分だけを店頭へと並べていく。因みにテントは昨日の夜中に艤装を展開して自分で組み立てた。早朝にトラックを取りに行く際に天龍を見かけたが、一人で軍手をしていたのでもしかしたら俺のテントを組み立てようとしていたのかもしれない。たとえ相手が俺のような提督であっても、あいつは優しいのだ。その優しさが問題にならないことを祈るばかりではあるが……。

それにしても開門までまだ時間があるにも関わらず、既に多くの人が集まって来ているようだ。俺は準備が終わっているのでそっちに行くことにした。途中で本部に寄ってパンフレットも貰っておく。

「皆さんお忙しい所お越しいただき誠にありがとうございます。提督の菊地と申します。大変申し訳ございませんが開門まではもうしばらくお時間がございますので、それまでパンフレットをお読みになってお待ちください」

別に言われたわけではないにも関わらず、邪魔にならないように歩道に一人で並んでいる客にパンフレットを渡していく。皆軽くお辞儀をしてパンフレットを受け取ってくれた。艦娘が作ったものだと伝えたら、クリアファイルに丁寧にしまっていました。いや、読まなくちゃ駄目だよ？

「すみません、この那珂ちゃんという艦娘アイドルは握手会やサイン会は予定していないんですか？」

「申し訳ございません。そのような予定は聞いておりません」

「そうですか……」

まだ会ってすらいなのにこの落ち込み様か。しかし握手会にサイン会か……。それぞれ千円と二千円といったところか。ツーショットエキなんかもよさそうだな。ちよつと那珂に提案してみるか。

「分かりました、那珂に確認してみましよう」

「本当ですか!？」

「ええ。まあ、有料にはなるかとは思いますが」

「大丈夫です!軍資金は充分にありますから!」

「コミケよりも?」

「……はいっ!」

一瞬呆気にとらわれたようだが、直ぐにいい返事を返してくれた。どうやらドルオタ兼、アニオタだったようだ。

因みに横須賀鎮守府の提督がアニオタであるとスレが立ってしまつたの言うまでもない。因みに艦娘も影響されてアニメとか見てるんじゃないか?という推測も上がっていたようだが、正解だ。

来場客とのコミュニケーションもある程度取れたところで自分の持ち場へと戻る。

程なくして鎮守府祭がスタートした。最初の30分は特にイベントもないので来場客は各々の屋台へと並び始める。早速写真の撮影を頼まれている艦娘もいるようだ。今回は艦娘の同意の元でならば撮影を許可した。ステージに関しては全面的に撮影可である。

今まで軍の人間としか接したことのない艦娘たちは初めて向けられる人間からの好意に驚いているようだ。事前に社会常識に関しては学習しているので取り乱す者は少ないが、やはり慣れないことに戸惑っているようだ。艦娘に接する人間の態度も基本的には良好だ。どちらかと言うと、コスプレイヤーやアイドルを被写体としてきたような人間が多いようで、マナーはしっかりと守ってくれている。艦娘が困っている際には警備の艦娘が対処している。天龍などは最早駆逐艦の守り神と化しているな。いや、お前は本部のテントで待機の予定だろ……。

「ポスターを各一部ずつ、あとカレンダーもお願いします」

「ありがとうございます。合計で40800円になります」

因みに在庫は大量にあると伝えてあるので俺の店はそんなに混雑していない。なるべく転売を防ぐために、各製品につき一セットまでとしているので売り切れる心配もないので、まずはグッズよりも生の艦娘という訳だ。

「41000円からお預かり致します。200円のお返しになります」

「提督さんが出店しているんですね」

「この客は既に疲れてしまったのか俺と雑談することにしたようだ。テントの脇にあった椅子にちやつかりと腰かけている。もうちよつと痩せるか、体力付けようね。なんなら軍隊入る？」

「ええ、執務室にいてもつまらないですからね。私も参加させて貰おうかと思ひまして」

「それもそうですね。それにしても艦娘は全員が可愛いんですね！」

男が興奮気味に話しかけてくる。

「それにみんなとても優しい。僕なんかに丁寧に対応してくれました」

若干白虐入ってるんだが……。

「最初は艦娘っていうのは、とてつもない力をもった恐ろしい兵器としか思っていませんでした」

「じゃあ今日あなたは兵器を見にきたんですか？」

「ははっ、まさか！女の子と聞いたから駆けつけたんですよ！まあ半信半疑でしたが……」

「でも来て正解だったでしょう？」

「ええ！今やネットもちよつとしたお祭り騒ぎですよ！」

「そのようですね、私も仕事中にはありますが読んでますよ」

「あ、提督のような偉い人もそういうの読むんですね」

「スレ立てたりしますよ」

「艦娘可愛すぎワロタ、とか？」

「いや、そんなスレ立てたらただの兵器に欲情する変態扱いされてしまいますよ」

「確かに……。でもこれからは違うと思ひますけどね！」

「ええ、そうですね……」

これで国民の意識も変わっていくハズだ。大本営としてはこの事態は本意ではないだろう。しかし、この許可を出したのは大本営の広報課だ、責任はそこにある。勿論、色々と姑息な手段を使って認可を

出させたのだが、あくまでも責任は広報課だ。間違えても俺ではない。それに、こうなつてしまえばいくら大本営と言えども止めることは出来ない。最悪の場合は俺の首が危ういが、国民の艦娘への関心は高まつている。俺が民間人に戻つ後に問題提起をすれば、協力者は大勢現れるだろう。そう、可愛いは正義なのだ！

客の男には冷たいお茶を飲ませてやつたら体力回復したようで、また店へと繰り出していった。そろそろステージが始まるのもあるだろうけど……。

どうやら那珂ちゃんステージの午前の部が始まつたようだ。ちゃんと練習の成果が出ているようで、ダンスも歌もかなりの完成度だ。地下アイドル限定とはいえ、元はドルオタの俺が言うのだから間違いない。それは他のドルオタを同じようで、那珂のステージは大賑わいだ。

が……、みんながステージに注目している隙に駆逐艦がローアングラーの餌食になつているようだ。まったく、俺の電ちゃんを涙目にするとは……。これはキツイお仕置が必要なようだ。警備の艦娘はステージの整備に出払っているため、電を助ける艦娘も、俺を見ている艦娘もない。俺は素早く艀装を展開し、その艦娘としての力を最大限に発揮して地面を踏み込む。ダンッ、と大きな地響きがあるがステージの爆音で気付いた者はいない。俺は一足にしてローアングラとの距離を詰めると、着地と同時にカメラを踏み潰した。Nikon製のなかなか高級なカメラのようだが、そんなことに躊躇いはない。因みに同時に手も踏み潰した訳だが、それこそ躊躇いはない。手加減してやったので骨が折れただけで済むだろう。手を木っ端微塵にしなかつただけ感謝されても良いくらいだ。

「ああああああ……」

どうやらあまりにも突然のことに軽く悶絶するくらいしか反応ができないようだ。多分思考が追いついたときに絶叫するレベルの痛みだろうな。

まあ、地面に這いつくばっていたお前が悪い。通行人が間違えて踏んでしまつても文句は言えないだろう。

悶絶している馬鹿は長門が医務室へと運んでいった。俺も艦娘である以上人間よりも艦娘を大切にするし、そこに人間の道徳はない。男の手が回復するか否かはさほど気にならなかった。やはり艦娘になつて人間時代とは身だけでなく、心も変化してしまったのかもしれない。ただし電などは男のことを心配していたし、他の艦娘は俺のように道徳を失つたりはしていないだろうが……。

道徳が残っているのならば俺にも少しは優しさを分けてくれてもいいんだよ？

あー！泣かせたー！

鎮守府祭は特に大きな問題もなく終えることができた。最後の片付けも行事の余韻を楽しめるので俺は結構好きだ。今日の売り上げや今後のグッズの販売、一般人の艦娘に対する友好的な態度などを思ってホクホク顔でテントを折り畳む。

「おい」

振り向くと、なにやら難しい顔をした天龍が立っていた。

「ああ天龍か。貴様のようなノロマでも一応は鎮守府祭を無事に終えることが出来たようだな、おめでとう」

「お、おう」

いや照れるなよ。今結構酷いこと言ったぞ？

「で、用はそれだけか？誉められに來ただけならば用は済んだだろう、とっとと帰れ」

じゃないとまた龍田が……。

「ち、ちげーよ馬鹿！」

「じゃ、なんだ」

「いや、電のことなんだがよ」

「なんだ？メモリーは俺が粉々に粉碎したから心配しなくても良いぞ？」

「いや、なんで助けたんだ？」

げっ……。

「助けた？自惚れるのもいい加減にしろ。俺が艦娘を助ける訳が無いだろう」

「で、でも実際に」

「あれは地面に人間が転がっていたから踏み潰しただけだ、ストレス発散というものだ」

「じゃあメモリーをわざわざ砕いたのはなんでだ」

「それはついでにというやつだ。俺の所有物の写真を許可なく撮るなど万死に値するからな」

理由が取って付けたようなものだが、誤魔化せるか？

「みんなが噂してたのと同じか…」

まさかこんなギルガメッシュばりの理屈が通るとは…。うわさのレベルエ…。

「それだけか？なら早く持ち場に帰れ」

ほんと、そろそろボロ出ちやいそうだし、龍田来そうだし。

「いや、あとひとつある」

お前は右京さんかよ…。

「なんだ？」

「カメラを踏み潰したことだ」

おお…。

「前にオレを吹き飛ばしたこともあったな」

「あれはお前が誤爆しただけだろう」

「とぼけるな！あれは間違いなく提督室の中からの攻撃だった！」

「お前の思い違いだ」

「じゃあ今回の件はどう説明するつもりだ」

「そんなに知りたいなら教えてやる。あれは安全靴のよるものだ」

「安全靴？」

「ああ、鉄芯が入った工場等で使うとても頑丈な靴のことだ。それを履いていたからだろう」

「なんでそんなもんを履いてたんだ？」

「お前らがはしゃいでいて少々目障りだったからな、それで貴様らの足を踏みつけてやろうと思っていたんだよ」

「嘘をつくな！前任ならばともかく、テメエはそういつたことをやらねえじゃねえか！」

「お前は俺に幻想を抱きすぎじゃないか？お前が気付いていないだけで結構艦娘には厳しく当たってるぞ？それこそ八つ当たりしている」

「ならオレの前ではどうしてやらねえんだ！」

「龍田が怖いから」

これは本心だったりする。

「…もういい。オレが馬鹿だった」

そうだ、俺に期待するな、夢を希望を抱くな。俺はお前たちの敵な

んだからな。もう後には引けないんだ。今でこそ鎮守府は明るくやっている。だがそれは危うく儂いもので、少しの力で崩れてしまう脆いものなのだ。その力が何であるかは俺には検討も付かないが、それが俺という共通の敵の消失によってもたらされることは想像に難くない。自意識過剰かもしれない。だが、俺が辛いからといって彼女たちの幸せを壊すかもしれないことを行うことは気が引けた。彼女たちの笑顔をもう二度と無くさせてはならないのだ。

どうにも天龍といるとそれを忘れそうになってしまう。やはり距離を置かねばと思うのはこれで何回目だっただろうか……。

天龍との接し方について考えながら今日の売り上げを計算していると、長門から艦娘分の今日の売り上げ金が運ばれてきた。経費などを差し引いてもかなりの売り上げだ。正直、学園祭などは比べ物にならない金額だろう。グッズの売り上げもかなりのもので、ネットでの評判もかなり良い。継続的なグッズ製作の受注を考えねばなるまい。取り敢えずの資金調達の目処が立ったことに安堵の息をもらす。とはいえ、それでもまだ足りないのだから本当に困らせてくれる。まあ、最大の敵は大本営な訳で鎮守府祭の昼には電話をしてきたのだから迷惑な話だ。結論から言えば俺の首は皮一枚繋がったという感じだ。艦娘に対する世間の好意的な反応は大本営にとつて芳しくないのは分かりきったことなのだが、グッズ製作の売り上げを伝えてからの反応は素晴らしいもので、途端に話の分かる御仁となってくれた。結局グッズ販売を全国規模に拡大、その利益を重役に横流しすることで決着が着いた。大本営としては逆に追い詰められているのだが、個人の利益の方が大切なようだ。

早速明日から各製作所に商品の作成を発注しなくてはならない。製作コストや発注数、販売所への発送数、ネットでの受注手続き、在庫の保管、売り上げの計上 e t c . 考えただけでもキリがない。横領する以上は経理課に任せる訳にはいかないからな。グッズ製作に関しては広報課に協力してもらおうとしよう。那珂が大賛成してくれるだろうからな。まあ、グッズを作るのは俺の為でもあるし頑張るとしよう。提督室のカレンダーは既に交換済みだ。流石にポスターを貼

る訳にはいかないのです、それは私室に貼っているが…。

後日広報課へと事の次第を説明しに向かった。

「もちろん那珂ちゃんは大賛成だよ！他のみんなも私が説得しておくから！」

とのことだった。前までは名字を菊地にされたことを恨んでいたみたいだが、初ライブの感動でそんなことは忘れてしまったようだ。

「本当か？それは助かるな。そういえば早速お前の非公式ファンクラブが立ち上がってるみたいだがいいのかわ？」

「本当!?どこにあるの!?今すぐ那珂ちゃんが挨拶に行かなくっちゃ！」

「まだネット上での集まりなだけだ。だが既に相当数の会員が集まっているみたいだぞ？」

「そ、そうなの!?次のライブが楽しみだなー！」

まあ、会長がどこに居るのかと聞かれれば提督室なんだがな。それにしてもこいつはエゴサとかしないんだろうか？

その日から何度もグッズ製作の打ち合わせやアイデアの提案、次回のライブ予定の打ち合わせなどを行った。最初は俺が広報課へと出向いていたのだが那珂がことある度に提督室を訪ねてくるので、最近では提督室での打ち合わせがもっぱらだ。

「ねえねえ提督ー！」

今も応接用の椅子に座ってるし。

「なんだ？」

「提督も那珂ちゃんのファンクラブに入りなよー！」

「ぶっ！」

お茶が気管に…！

「大丈夫!？」

どうやら心配事してくれるくらいには好感度が上がっているらしい。さつきもファンクラブに勧誘してきた位だし…。ん？それって不味くない？

「いや、あまりにも唐突だったんでな。そもそも俺なんかが入るような…」

「那珂ちゃんは提督のことを少しは認めてるん」ふざけるなっ！」だから…。」

なんだか久しぶりに怒鳴った気がする。

「ど、どうしたの？」

「貴様、俺を認めているとか言ったな？」

「う、うん」

「とても不愉快だ」

「え…？」

「何故お前が上から目線で俺を評価している」

「そんなつもりは…」

「それに貴様のような出来損ないと馴れ合うつもりは毛頭ない」

「…っ！」

「分かったら出ていけ。そして二度と帰って来るな」

「もう提督なんて知らないっ！」

泣きながら那珂が部屋を飛び出していった。もう二度と帰って来ることは無いだろう。

「なにしたんだ？」

開けっ放しにされた扉から天龍が入って来た。

「ん？那珂を虐めたただけだが？」

「テメエ…。やっぱりお前も…！」

「だからそうだと何度言ったら分かるんだ。そもそも何の用だ」
「なんでもねえよ！」

天龍まで出ていってしまった。いや、だから扉をだな…。

「酷い提督だな」

「ああ、長門か」

「うむ」

今日は来客が多いな。

「天龍は提督と仲直りがしたかったらしい」

「仲直り？」

そういえば鎮守府祭の際に距離を置いたんだったな…。

「どうも那珂とばかり仲良くしていることに嫉妬してみたいでな」

「そんな馬鹿な…」

「よく提督室の前を彷徨っていたからな、間違いないだろう」

仲直りしようとしていたのは事実のようだな。まあ、嫉妬云々はよく分かんが…。

「提督はいつまでその演技を続けるつもりなのだ？」

「戦争が終わるまでだな」

「本当はもう限界が近づいていることには気付いているのだろうか？」

「だが貫かなくてはならない」

「その必要がなくてもか？ 提督の願いは艦娘の笑顔だったはずだ。不必要に艦娘を悲しませるのは本意に反するのではないか？」

「必要な犠牲だ。決して不必要などではない…」

「私は提督が苦しむ姿を見るのが辛い。もう少し艦娘を信頼してやったらどうだ？」

「俺は部下を信頼しているが？」

「艦娘は提督が思っているよりもずっと強いということだ」

それだけ言うと長門は仕事に戻ってしまった。

いや、扉を…。今回は閉じてくれたようだ。

不幸だー!!

季節も冬になり寒さも本格的になり始めた。こんな寒い季節に海をクルージングなんて何を考えているのか俺には分からないが、そのプランを提供している俺が言うのは些か可笑しいかもしれないな。

「わあー！凄く綺麗！」

まあ、この時期は通常の夜景に加えてクリスマスイルミネーションなんかで無駄にピカピカしてるからな…。

「萌香、大切な話があるんだ」

つまりは、プロポーズに最適といえる。

深海棲艦が登場したことにより、民間の船は海から姿を消した。たまたま護衛付きの貨物船などが出港するだけで、クルージングなどの企画は全て姿を消した。だが、海軍ならナイトクルージングも可能だ。安全とは言い難いが、深海棲艦が出現してもある程度の対処が可能だ。沖にでなければ対した問題にはならない。しかし海軍がクルージングでお金儲けなどできるはずもない。そんな行事に割ける余剰戦力など何処にもないのだ。俺を除いて。という訳で大本営には勿論、鎮守府にも秘密でナイトクルージングを実施しているのだ。ライバル会社が存在しないので値段はいくら吊り上げても客は減らない。問題はどうかやって客を集めるかだが、これはブライダル関係の会社と秘密裏に提携を結ぶことで一定の集客に成功している。顧客満足度も高く、評判は上々だ。

「はい、こちらこそよろしく願います！」

どうやら今日のクルージングも成功したようだ。明日はクリスマスイブだ、より一層気合いを入れて挑まねば。

そう思っていた時期が俺にもありました。

「どう責任を取るつもりだ！」

結果は大失敗であった。川内が討ち倒し損なった艦娘がこちらにやって来てしまったのだ。深海棲艦出現の入電でクルージングを中

止すべきだった…。深海棲艦は俺が倒した為に直接的な被害はなかった。が、とてもプロポーズといった甘い雰囲気ではなく、殺伐とした雰囲気の流れってしまった。もたらした結末は破局。吊り橋効果など卓上の空論でしかなかったことが証明されてしまった。

「返答次第では裁判も辞さないが？」

「そう仰られましたも、危険性に関しましては事前にご報告させて頂いておりますし、実害的な被害が出ていない以上…」

「破局したんだぞ!?!それでも被害が出ていないというのか!?!貴様では話にならない!直接大本営と話をさせてもらおう!」

「お待ち下さい!」

大本営にバレては元も子もない。

「賠償金を支払わせては頂けないでしょうか。示談という形を提案させて頂きます…。」

「値段次第だな」

「どうやらこちらにも不利な点が潜んでいることに勘づかれてしまったらしい。かなり足元を見られてしまった…。」

話し合いは難航した。内容が内容なだけに弁護士を呼ぶことも叶わない。相手も相手で、裁判や大本営といった単語をチラつかせる。仕方なく此方も高圧的な語調や、わざとらしく銃をチラつかせたりしながらヤクザのような交渉を仕掛けた。が、此方が不利なことには変わりなく最終的に億単位の損害賠償を支払うこととなってしまった。元々不正な金であったために、口座ではなく現金で保管してあったのでそのまま手渡しとなった。口座を使えばマイナンバーから所得として扱われ所得税が40%も掛かってしまうため、相手も手渡しを希望した。これで相手は億単位の脱税者だ、お互いに弱みを握ったところで今回の件は決着となった。正直俺の惨敗だった。

勿論これで全ての問題が解決とはならなかった。これだけの損失を出してしまったのだ。今月の給料など何処にもない。なんと言い訳をするべきか…。

次の給料日、俺は針のむしろと化していた。

「どういふことかご説明願います」

「だからさつきも言っただろ、今月の給料は5万円だ」

「ふざけているのですか!？」

「元々給料など貴様らには無かっただろう。元に戻っただけだ、一々騒ぐな」

「また横領ですか？次は無いと以前ご報告させて頂いたハズですが？」

「じゃあなにか？今この俺の話を録音していた奴はいるか？」

「……」

「いないよなあ？」

まあ、居ても取り上げるんだがな。

「今月の給料はちゃんと支払われた。と言うことだ」

「テメエ！ふざけるなよ！」

「なら大本営に訴えるか？言っておくが俺は大本営から来た人間だぞ？お前らの戯言と俺の発言のどちらを信用するかなど考えるまでもない。証拠の無い貴様らの発言など取るに足らない戯れ言に過ぎん。この馬鹿め」

まあ、大本営への連絡手段は長門が管理しているからな。連絡など不可能だが。

少々強引ではあるが、勝利を確信した俺は提督室へと戻った。しかし、机に置かれていた書類で俺の勝利は打ち碎かれることとなった。

『大本営にて行われる艦娘の年末点検についてのお知らせ』

大本営の気まぐれによって俺は突然の危機に晒されることとなった。

翌日の朝礼はいつも以上に肌寒く感じられた。

俺は艦娘の射抜くような視線に晒されながら朝礼台へと登る。

「敬礼！」

長門の号令が掛かるが、敬礼が帰ってくることは無かった。

「今回は見逃してやるが次はないぞ、特に年末に大本営で行われる点検でそのような態度を取った場合、その場で即刻解体してやるからな」

年末点検という聞きなれない行事に艦娘が困惑する。

「今月の29日に大本営で艦装を中心とした点検及び技術力の検査がある。しっかりと体調を整えておくように。尚、その間の近海の警備は大本営所属の艦が引き受けることになっている。長門」

「詳しい検査項目に関しては追って資料を配布する予定だ。以上、解散！」

そしてその日は遂にやって来た。

俺は久し振りに大型バスの運転席に着いていた。前回のシヨツピングとは打って変わり、暗雲とした気分だった。艦娘たちが余計なことを言うのではないかと気が気でならないのだ。それとなく注意はしてみたが果たしてどれだけ効果があるかは疑わしかった。若干通常よりも遅く運転していたにも関わらず既に大本営が見え始まってしまった……。今日は呉鎮守府との合同での点検だ。あそこの鎮守府もブラックだという噂は聞いている。まあ、問題に成る程の環境では無いのだが……。違いが顕著に出るかもしれない、そこを突つかれないように上手く立ち回らなくては……。

艦娘を残して呉鎮守府の提督に挨拶に向かう。ついでにあちらの艦娘も確認しておかねば……。

「お久しぶりであります、西方大佐！」

「おお、菊地君ではないか。若いののに提督になったそうだね？」

「はい、分不相応とは思いますが誠心誠意勤めさせて頂いております！・これも候補生時代の太左のご指導ご鞭撻のお陰であります！」

「ははっ、いや大袈裟だよ」

とは言うものの満更でも無さそうだ。

「本日は恐れ多くも合同での点検であります、ご迷惑とならぬよう統率いたしますのでどうぞ宜しく願います！」

同時に年代物のワインと横須賀の地酒の入った紙袋を差し出す。この人は酒豪だからな、好みの酒も大体把握している。後は大本営の担当に任せてお酒を飲みに行くこと間違いなしだ。

「おおーやはり菊地君は昔から気が利くな！なにか困ったことがあったらいつでも相談しなさい。力になろう」

「ありがとうございます」

「おらー！とつとと並べ、このグズどもが！」

近くにいた駆逐艦が蹴り飛ばされる。ある程度の反抗心は残っているようで、ついでに俺まで睨まれてしまった。

「じゃあ後は大本営の担当と菊地君に任せたまよ」

「はーお任せ下さいー！」

そういうと紙袋の中身を確認しながら建物の中へと消えていった。

「横須賀鎮守府提督の菊地だ！これから俺の艦娘も隣に整列させる。私語は厳禁だ！一言でも会話してみる、二度と呉鎮守府に生きて帰れると思うなよ」

呉鎮守府の艦娘の敵意に溢れた視線に晒されながら長門に連絡を入れる。

程なくして艦娘たちが長門を先頭にしてやって来た。因みに課業行進の真似事をさせている。

「一の体型に整列！」

戦艦の金剛を先頭にして一瞬にして決められた順に整列が完了する。

「番号！」

続いて1から25までの番号が点呼される。

「提督、長門以下26名の整列、完了しました」

「ご苦労」

報告を終えた長門が列の先頭に入って整列が完了する。これが軍隊というものだが呉鎮守府の艦娘は驚いているようだ。因みに大本営の間も一応軍人なので特に驚いたりはいらない。

「では挨拶をお願いします」

「今日一日お前らの点検を指導する草鹿だ」

「宜しくお願いしますー！」

「よ、宜しくお願いします…！」

勿論声が揃っているのが横須賀でバラバラなのが呉だ。初端から教育の違いをひしひしと感じながらも、遂に年末点検がスタートした。

次回 天龍死す

特に目立った問題もなく点検は進んでいった。俺の心配も杞憂かと思われたその時に事件は起きた。

点検は大本営に任せて俺は少し離れた位置で艦娘を監視していた。呉鎮守府の鹿島ちゃんのないすばでーに視線を奪われている隙に起きた出来事だった。

なにやら俺の艦娘が一人の軍人と言いつ争っているようだ。他の軍人も何事かとそちらを向いている。

この位置からでは聞こえないのでこっそりと艦装を展開して聴力を高める。

「先月分の給料も殆んど支払われておりません！」

この流れは不味い……！即刻止めに行かねば！

「最近軍人として尊重されずに、単なる兵器として扱われているのです！提督を替えて欲しいのです！」

不味い不味い不味い！

「貴様らが兵器なのは周知の事実ではないか。何を訳の分からんことを言っているんだこの化け物が！」

吐き捨てるように草鹿少佐が切って捨てる。

「ひ、酷いのです……この人でなしが！なのです！」

「貴様！化け物の分際でこの俺を侮辱するのか！」

電が蹴り飛ばされる。

「ダメエー！」

天龍が砲門を少佐に向ける。このままでは間に合わない！

刹那、天龍から躊躇いなく砲弾が発射される。

が、その弾が少佐に届くことはない。俺が打ち落としたのだ。直ぐに艦装を仕舞うと天龍の元へと駆けつける。

「草鹿少佐！お怪我はありませんか!？」

階級は下であるが、今回ばかりは俺の監督不行き届きである。へり下って対応すべきだろう。

「お宅ではどういう教育をしてるんだね！ええ!？」

「申し訳ございません！」

「その長門が気を効かせなければ俺は今頃あの世行きだぞ！」

長門はお前ではなく俺に気を効かせてその位置に立って、此方に砲門を向けているんだがな……。

「万が一が御座いますので、医務室の方へ」

「そんなもの必要ない！今すぐそいつを解体する！」

「あらあ〜？」

龍田があ！頼むから龍田を挑発しないでくれ……。

「医務室の方でお詫びの方を……」

上着のポケットから封筒をチラつかせる。あらかじめ準備しておいた金だ。

「ま、まあ中佐がそこまでおっしゃられるのであれば……」

どうやら冷静になってくれたようだ。

「貴様らは大人しく点検の続きを受けていろ！長門、また何かあったら対処は頼んだぞ！」

「引き受けた！」

「では行きましようか」

医務室にいた医者に個室を用意させて、二人での交渉に入る。

「ほんの気持ちではありませんが、お詫びになります。お納め下さい」

それなりに厚みのある封筒を渡す。

「こんな……。なにか条件でも？正直天龍を庇いたい訳ではないの
でしろう？」

「ええ、まあ」

「これだけ頂いたんです。ある程度の頼みは聞きましょう」

「では……。今回の件の発端ではありますが、給料や兵器云々の下りを無
かったことにして頂きたく」

「ああ……あの訳の分からない戯れ言ですか……」

「先日鎮守府祭を開催するにあたって、彼女たちに社会常識を叩き
込みまして……」

「成る程、その過程で給料だ人権だと騒ぎ出してしまったと……」

「ええ……。このままでは謀反の意思があると取られかねません。そ

うなれば私の立場が危ういものとなってしまふ…。」

「事情は分かりました。しかし今回の件は他の軍人も見ています。天龍の攻撃を無かったことにするのは無理があるのでは？」

「はい。ですので今回の件は、草鹿少佐が電を蹴り飛ばした、それに天龍が激昂した。という流れにして頂きたく。」

「つまりこの金額は、私が謂れない濡れ衣を着ることも含まれていると…。」

謂れもないというか事実だけどね

「まあ、艦娘を蹴り飛ばしたところで特に問題ありませんし、私の評判が落ちるといふことも無いでしょう。分かりました、大本営にはその様に報告しておきましょう」

話の分かる人で良かった…。

「結果は追って大本営から連絡があるかと思えます」

「分かりました、ご協力感謝します」

お通夜状態のバスを運転し、横須賀鎮守府へと戻る。精神的に疲弊しきった俺の元に早速電話が掛かってきた…。

「長門、明日の鎮守府運営は任せたぞ…。」

再び大本営への出頭が決まった…。

重い気持ちで待合室で迎えを待つ。

程なくして案内されたのは大本営の第一会議室であった。

入室すると既に元帥を始めとした、そうそうたる顔ぶれが集まっていた。

元帥と向き合う形で用意されたお誕生日席へと向かう。

「掛けたまえ」

「失礼します！」

「早速だが、天龍が草鹿少佐に対し敵対行動を取ったことは間違いないかな？」

「間違いありません！」

「君の見た当時の状況を説明してくれ」

「は！当時私は現場より離れた位置で艦娘を監視しておりました所、

草鹿少佐が電を蹴る所を目撃致しました。それに激昂した天龍が発砲。これを長門が相殺したものと認識しております！」

「草鹿少佐からの報告と違いありません」

「うむ。では天龍の処分を伝える」

「は！」

「天龍を解体せよ。これをもって、艦娘への見せしめとすると同時に再発防止に努めよ」

「お待ち下さい！」

「これは決定事項だ。少佐の貴様が意見できる内容ではない」

少佐？

「菊地中佐への処分だが、監督不行き届きの責任として減俸及び一階級降格とする」

降格で済んだことを有り難く思うべきか…

「菊地少佐の候補生時代の成績は優秀だと聞く。提督として赴任した後の成果も目を見張るものがあることは事実だ。よって今回は一階級降格という比較的軽い処罰とする」

「寛大なご配慮有り難う御座います！期待に応えられるよう、より一層提督としての職務を果たして参ります！」

「うむ。後日視察員をそちらに向かわせる。追って詳しい日程を伝える。それまでに天龍の解体をもって、艦娘の再教育を命ずる」

「了解致しました！」

これからどうすべきかを考えながら鎮守府へと戻る。

『天龍、至急提督室に来るように』

本当に至急来たようで、直ぐに扉をノックする音が聞こえる。

「入れ」

「し、失礼します…。」

かなり落ち込んだ様子为天龍と…

「失礼しますね〜」

龍田がやって来た。

「龍田、今回は大切な要件なんだ。すまんが席を外してくれ」

「それは無理な相談ねえ。天龍ちゃんが解体されでもしたら大変ですもの」

龍田が薙刀を此方に向けてくる。どうやら薙刀で抵抗するつもりらしい。

「だがそれだけの問題を起こしたことに違いは無いだろう？」

「やっぱり解体するつもりなのかしらあ？」

「まだそう決まった訳ではないんだがな・・・」

「本当かしらあ？」

龍田が油断して薙刀を引っ込める。

と、同時に俺は艀装を展開する。

「え・・・？」

俺の持てる最大戦力を投入して、一瞬で龍田を大破する。

「ど、どういうこと・・・」

長門に勝ち続けてきた俺からしたら、軽巡洋艦の龍田を大敗させるなど造作もない。

「天龍を解体するとなれば、お前が黙っている訳がないからな。今までのように艀装を隠しながらでは、俺は死んでしまう。よって少々リスクを背負ってでも、常時艀装を展開することにした」

「大丈夫か、龍田!？」

龍田を抱き起こしながら天龍が睨んでくる。

「天龍、貴様が大人しく解体されれば良いだけの話だ。それともこれ以上の犠牲を出したいのか？」

「だ・・・駄目よ・・・天龍ちゃん・・・」

「天龍、お前が決める」

「オレは・・・」

「さあ！」

「オレを解体しろ！」

「天龍ちゃん・・・！」

「よし、じゃあ着いてこい」

「龍田は・・・」

「医療課の奴に任せる。心配するな」

「分かった…。」

「待って…！天龍ちゃん…。」

「オレのせいで誰かが傷つのをオレは見たくねえんだ…。今回ばかりはオレの責任だ、悪いいな龍田…。」

その後もお互いに別れを惜しんで言葉を交わしていた。が…

「そろそろ時間だ」

「ああ…。」

「天龍ちゃん…。」

「そんな顔するんじゃないやねえよ！天龍様は不死身だからな！またいつでも会えるから心配するな！」

サムズアップした天龍が此方を振り替える。

「挨拶は終わったか？」

「早く連れていってくれ」

今にも泣きそうな天龍を連れて俺は建物を出た。あらかじめ玄関に止めて追いた俺の車へと天龍を乗せて車を出す。

天龍は我慢が限界に達したのか涙が決壊したダムの如く溢れ出た。人ってあんなに泣けるんだな…。

普通は工場で解体するのだが、今回の目的地はそこではない。が、天龍はそれどころではないようで、自分がどこに向かっているのかも分かっていないようだった。

10分ほど車を走らせると、目的地に着いたので天龍を車から下ろす。

「降りろ、天龍」

「ひつく…うう…。」

階段を登ってから、鍵を取り出して扉を開ける。

「入れ」

「うう…。」

下を向きながらトボトボと部屋の中に入る。

「まあ狭いとは思うが我慢してくれ」

「うえ？」

うえ？つてなんだよ…。凄くアホの子みたいになってるぞ…。

「ど、どこなんだよこい！」
今更か……。

「俺のアパートだ」

「……………へ？」

俺が部下の解体などする訳がないだろう？

天龍と同棲生活

解体予定の天龍を俺のアパートへと連れてきた訳なんだが…。

「テメエ…！ナニするつもりだ！」

いや、なにもしないよ？下心とかないから！ホントだよ？

「お前は今日からここで暮らすんだ。逃げようと思っても無駄だぞ？窓には鉄格子、扉は内側からも鍵が必要だ」

前もって準備した監禁部屋という訳だ！

「勿論、艤装を展開して破壊してくれても構わん。だがそんなことをすれば即座に俺の耳に入るからなあ。発信器で貴様の居場所など丸わかりだ」

「そ、そんなもんいつの間にも?!」

勿論そんな物はない。

「そんなに必死に探してもお前のようなバカには見つけられん。もし見つけることができたら、そのときは満を持して逃げるといい」

まあ、一生掛かっても無理だろうがな。

「解体はいつなんだよ」

「お前が逃げ出そうとしたときだな」

「どういうことだ…」

「そういうことだ」

「テメエ、馬鹿にするのもいい加減に…！」

「また夜に来る。食事は冷蔵庫の物を勝手に食べ。ああ、料理とか出来ないか」

「ぐっ…」

「じゃあ昼も夜もカップ麺だな」

申し訳ないが今日はそれで我慢してもらおう。昔は自炊もしていたので、明日からは俺が作るしかなさそうだな…。

「あ、掃除機かけておいてくれると尚良い」

掃除を押し付けてから、俺は鎮守府へと戻った。

「遅かったな」

「ああ、少し手間取った」

長門が出迎えてくれた。

「本当に解体したのだな…。」

「当然だ。近い内に視察員が来るからな。ここで大本営の期待を裏切れば、俺も鎮守府も終わりだ」

敵を欺くには先ず見方からだ。

「そのことだが、先程連絡があった。視察員は今週の金曜日に訪問するそうだ」

明後日か…。それまでに殺されないようにしなければ…。

「提督は艀装を展開してしまっても良いのか？長門が護衛についても良いのだぞ？今なら知っているのは龍田だけだ」

「いや、大丈夫だ」

「私の方が弱いのは確かだ。しかしこれでもビッグ7の一人だ！信頼してくれて構わんのだぞ？」

「長門がこっち側に着くのは得策ではない。特に今回の件で対立はより一層強まるだろう。間違えても俺を守ろうなどとはするなよ？」

「了解した…。」

『総員至急第一会議室に集合！』

第一会議室に全員が集めたタイミングで、俺も扉の前に立つ。先ずは先制攻撃で威圧感を与えることにしよう。最近舐められている節があるからな…。

艀装を展開してから会議室の扉をぶち抜く。周囲の壁がパラパラと崩れて砂ぼこりが舞う。その中を魔王の如き風格で入室する。インパクトは十分な様で、駆逐艦などはそうとうビビっているようだ。

「ぎ、艀装…。」

「諸君らに重大な報告がある」

全員が俺の艀装に注視している。しかし今回のメインはこれではない。

「天龍を解体した」

「え…？」

どこからともなく驚きの声漏れる。

「理由は言わなくても分かるな？」

「で、電のせいなのですか？」

「いや、天龍の責任だ。あの馬鹿が少佐を攻撃したことが全てだ」

加賀が無言で此方への攻撃体制に入るが、先制攻撃で封じ込める。

「扉を破壊した時点で気付いて欲しかったんだがなあ……。いいか？」

俺はお前ら艦娘の誰よりも強い。勿論長門や金剛よりもだ」

「そんなことが……」

「ある訳ないか？ そう思うならそれで結構だ。しかし今後俺に危害を加えた者は力づくでねじ伏せる。最悪は解体することになるからな、覚悟しておけ。今までは口だけだったが、これからは違う。天龍は見せしめの意味があるんだ、天龍の死を無駄にするなよ？」

「お前が解体した癖に……」

艦娘が今にも攻撃してきそうな雰囲気だが、僅かに残った理性がそれを寸手のところで踏み止めているようだ。

これ以上この場にしていると殺されてしまいそうなので、俺は天龍の部屋に向かうことにした。多分天龍の私物であろう物を段ボールへと詰める。下着類は大人っぽいのが龍田、なんの面白味も感じられないのが天龍のだろうと勝手に辺りを付けて持ち去る。断じて下着泥棒などではない。

段ボールをトランクに詰め込むと、俺は鎮守府を後にした。今日、これ以上ここにすることはとてもじゃないが無理だ。仕事は家でやることにしよう。天龍に邪魔されないといいが……。

スーパーで買い物をしてから帰宅する。流石に二食連続でカップ麺は可哀想だからな。

「ただいまー」

「お、おかえり」

順応するのが些か早くないですかね？

「カップ麺は食べられたか？」

天龍が首を振る。

「なんだ？ お湯も沸かせないのか……。これじゃあ介護じゃない

か…」

「ちげーよ！ただ食欲が無かっただけだ…」

「まあ、夕飯は食えよ？折角食材を買って来たんだからな」

「テメエには聞きてーことが山ほど…」

「夕飯食べながらな。答えられる範囲で答えてやるよ」

天龍が渋々引き下がったのを確認して、台所に立つ。メニューは牛ロースのアスパラ巻き黒豆ソースかけ、チーズの豪快鍋だ。因みにレシピは『鉄人の料理 完全レシピ集』だ。独身の男性に家庭的な料理など作れる訳がないからな、こういう趣味の料理しか作れないのだ。俺だけか？いや、大体皆そんなもんだらう。

シラネ

「出来たぞー」

「あ、ああ」

「どうしたんだ？冷めない内に早く食べるよ、もつたないだろ」

「いや、提督の分は…」

俺はもう何年も食べてないからな…。

「冷蔵庫を見たときから薄々とは思ってたが、まさか何も食ってねえのか？」

あ、冷蔵庫の中は覗いたんだな。

「お金がもつたいない」

「嘘だな」

「じゃあなんなんだよ」

「なんつーか、こう…」

あとちよつとで答えにたどり着けそうでしたどり着けないむず痒い感じか。まあ、答えにたどり着かれても困るから、この話は終わりだな。

「ところで…」

「逃げたな…」

「お前の今後についてだが…」

天龍が箸を置いて此方を見つめる。いや、まだ一口も食べてないじゃないか。美味しいのに…。多分。

「鎮守府では解体した事になっている」

「だろうな…」

「明後日に視察員が訪問する。そいつが帰ったら艦娘には解体していいことを伝えるつもりだ」

「保身の為か？」

「それもある。だが、お前が鎮守府に戻る為でもある」

「どういうことだ」

「筋書きはこうだ」

天龍は俺が目を離れた隙に逃亡。大本営に失態を隠すために解体したと伝えた。しかし、ほとぼり冷めた1ヶ月後に天龍は鎮守府近海で発見される。艦娘たちによる必死の抗議の末にお前は大本営には秘密で鎮守府に復帰する。

「という感じだ。どうだ、中々いい案だろうか？」

「お前、本当はやっぱりイイ奴だろ？」

「やっぱりってなんだよ…」

「違う。さつきも言ったが保身の為だ。今日1日で龍田と加賀から攻撃されたんだ。正直なところ1ヶ月でもかなりきつい」

「なんで艦娘にまで嘘をついたんだ？視察員さえ欺けばそれでいいんだろ？」

「人の口に戸は立てられん。それに、解体された後の暗く殺伐とした雰囲気も演出しなくてはならない。俺たちは演劇団じゃないからな…。流石に無理だろう。敵を欺くならば、先ずは味方からだ」

「一応筋は通ってるな…」

人の粗探ししようとするのやめてくれない？そもそもお前に知的キャラは似合わないぞ？

「いいから早く食え」

「い、いただききます」

「どうだ!? 旨いだろう!？」

「旨い…」

「当たり前だ」

ドヤ顔ここに極まれりだ。

「あ、そうだ。ちゃんと一ヶ月間どうやって生き延びたかのストーリー考えとけよ。」

「あ？アパートに隠れてたって言えばいいだろうがよ」

「駄目だ」

「なんでだよ」

「兎に角駄目だ。お前は少なくとも俺に借りがあるはずだ。大人しく言うことに従え」

「ちっ…分かったよ」

居候の分際で舌打ちだとう!?これは仕返しが必要なようだな。

「天龍くん。君の荷物を持ってきてやったぞ」

「なんだよ、そのウザイ口調は…」

「しかし感心しないな。もう少し龍田を見習ったらどうだね？」

「あ？何をだよ？」

「下着」

「…っ！テ、テメエ！やはり死にたいようだな！」

ふはは！…ざまあ見ろだ！

「なにか必要な物があつたらネットショッピングで買うように。コンビニ受け取りにしておけば、俺が受け取って来てやろう」

「人の話は無視か？ああん？」

「なんだ？買ってやらんぞ？」

「人の足元見やがって…」

「あと荷物が足りてるか確認してくれ」

天龍ががさごそと段ボールの中身を確認している。下着も奥へと隠すことも忘れていない。残念だが、もう一度全て確認済みなのだよ！…断じて変態ではない。

「足りない…」

「なにが？」

「下着とノート…」

「下着？後は大人物しか無かったぞ？洗濯機か？別に一枚くらい…」

「オレだって一枚くらいそういうのも…！」

え…マジで？

「ニアワネー」

「はっ倒す！命の恩人だけどはっ倒す！」

あ、一応命の恩人って認識なんだな。

その後も風呂はどっちが先だの、トイレがどうだの、ヘッドが一つしかないだのと、まるで同棲仕立てのようなやり取りをしていたので、結局仕事は全く進まなかった。

明日から頑張ろう。こう、色々と……。

提督、化けの皮が剥がれ始める

みんなのアイドル那珂ちゃんだよー！アイドルは笑顔を届けることがお仕事なんだけど、最近はそんな雰囲気じゃなくなっちゃった…。それもこれも全て提督のせいなんだけどね。

天龍さんが解体されて直ぐに視察員が鎮守府を訪ねて来ました。みんな視察員に攻撃しないようにと理性を保つのが大変そうだったな…。そんな中、やっぱり問題は起きてしまいました。

「おい！お前は確か艦隊アイドルとかいう馬鹿げたことをやっている艦娘だったな？」

提督がプルプルと震えています。どうやら笑いを必死に耐えているようです。

「そうだよー！那珂ちゃんは艦隊のアイドルなんだよー！」

私はめげずに精一杯の笑顔を向けます。提督がニヤニヤしていません。早くも心が折れそうです…。最近提督も悪い人じゃないかもしれないと思っていたのに…。

「なあ、菊地少佐？こいつ一晩借りても構わないですよねえ？」

え？少佐？提督は中佐のはずじゃあ…。いや、心配するのはそこじゃないか…。

「視察員さん…いや、磯部少佐。こんな芋臭いガキよりも上玉が居るんですかね？」

「ほう！誰だね？」

ガキですと…！

「近くのお店に新入店の娘が今日入るんですよ」

「なんだ、艦娘じゃないのか…」

人をガキ扱いして、自分たちは下の心配ですか…。そうですか…。いえ、よく考えてみてください。私に使い古されたこんなゴミよりも、初々しい女性の方が磯部少佐も心が踊るでしょう？…

「うむ、一理あるな」

「既に予約は押さえてあります。勿論、代金はこつち持ちですよ？」

「仕方ない。君の口車に乗せられて上げよう」

「あの！」

「なんだ那珂。もうお前に用はない、とつとと消え失せろ」

「那珂ちゃんは芋でもガキでもありません！」

「馬鹿な艦娘だな……。折角提督が助けてくれたというのに……」

提督が助けてくれた……？

「さ、さあ少佐！お車の準備は出来ておりますのでこちらに！」

「提督に感謝するんだな」

感謝……？よく分からないまま提督の車は夜の町へと消えていつてしまった……。



電なのです！

最近の鎮守府はとつてもどんよりとした雰囲気の流れているのです……。それもそのはずです。天龍さんが解体されてしまったのですから……。

正確には天龍さんは直前で逃げ出すことが出来たようですが、この深海棲艦がたくさんいる海をたつた一人で生き延びることは、いくら天龍さんでも不可能なのです。龍田さんはことあるごとに天龍さんを探しに出ていますが見つけることは出来ていないのです……。

全部電のせいなのです……。電が大本営の人に悪口を言ってしまったのがいけなかったのです。電のせいで天龍さんは……、みんなは……。

天龍さんが解体されて、電が解体されないのはおかしいのです。だから直接提督さんに謝って、そして解体してもらおうのです……。

ですが電は扉の前から一步も動けないのです……。

「やはりそうだったのだな!？」

中から長門さんの声が聞こえてきたのです。そつと耳を扉に付けてみます……。

「前からおかしいと思っていたのだ！提督が食事をしているところを一度も見たことが無かったからな」

「たまたまだろう……」

「いや、おかしい。ならば最近になってお弁当を食べているところを

見かけるのはどういふことだ！それに最近は提督室にお弁当の残り香がある時もあつた！そもそも元々それが無かつたのが不自然なのだ」

「いや、節約の為に最近お弁当に変えたから…」

「提督が外食に一度も出ていないことを私は知っているのだが…」

「なんで知ってるんだよ…」

「観念したらどうだ？」

暫くの沈黙の後に提督の声が響きます

「俺の負けだ」

「では話して貰おうか」

「俺は艦娘が登場するまでの間、教育係りを担当していた。当然ながら部下からの信頼などは微塵も無かつた。俺は部下の立場に立とうと、彼らを理解しようと思死に努力した…。だがそれは到底無理な話だった。深海棲艦が出現しなくてもそれは変わらなかつたと思う。幹部の俺には下級士官の見える景色は理解できない。それでも少しでも俺は部下の立場に立ちたかつた」

「その結果が断食か…」

「そうだ。鎮守府の運営は次のように規定されている。

原則として艦娘には食事を与えること。但し物資が不足している際にはこの限りではない。

俺は部下の立場を理解しようと思死に努力してきた。しかし結局は部下に恨まれながら死地へと送り出すことしか出来なかつた。次こそは艦娘の立場を理解出来る提督になろうと、最前線の辛さを少しでも理解するために食事は捨てた。これは死んでいった部下達へのせめてもの罪滅ぼしでもある」

そこまで聞いた電はみんなのところへ走り出しました。提督は電たちが思っているような悪人ではないのかもしれないのです！天龍さんのことは未だに整理が付いていません。ですがみんなの提督暗殺計画は止めなくてはならないのです！そうしなければ後悔することになる気がするのです！



提督に大破された私が部屋に戻った時には既に天龍ちゃんの荷物は処分された後だったわ。あの提督は私から形見すらも奪っていたのね……。許せない。でも天龍ちゃんを諦めるのはまだ早いわね。天龍ちゃんは解体されていない、今も広い海のどこかで一人寂しく私を待っているに違いないの。今日も天龍ちゃんを見つけることは出来なかったけれど、私は天龍ちゃんを信じているわ。天龍ちゃん是不死身なのよね？

込み上げる涙を必死に堪えながら部屋の掃除をする。もしかしたら天龍ちゃんの私物がパンツ以外にも残っているかもしれないから……。

「これは……ノート？」

表紙には天龍日記の文字が書いてあるわね。日記!?まさかこんなところに天龍ちゃんがいたなんて……。

私は天龍ちゃんの日記を噛みしめるように最後まで読んだ……。けど、このモヤモヤした気持ちはなんなのかしら。いや、原因は分かっている。提督ね……。この日記の半分が提督の観察日記になっていた。残りは私と駆逐艦のことね。それにしても提督が本当はいい人だなんて……悪い冗談ね……。



「では第一回提督考察会議を始めます」

那珂ちゃんと電ちゃんの希望で開かれることになった会議だ。但しこの二人では会議を進行することが難しいということで私、大淀に白羽の矢が立ったのだ……。龍田さんは協力的では無かったけれど、駆逐艦の願いで天龍さんの日記を貸して下さいました。なんでも提督観察日記なのだとか……。

私たちは時間を見つけては会議を重ねていった。勿論提督にバレないように細心の注意を払ってだ。

結論から言ってしまうえば、実は提督は悪い人ではなかった、という見解になった。証拠も十分に揃っている。既に答えは出ていた。しかし誰もがその事実を受け入れようとしない。頭では理解しているも、心では納得していないのだ。その原因はひとえに、天龍さんの解

体にある。大本營の命令であり、逆らうことが出来なかったことなのも分かつている。分かつてはいるが、やはり仲間を手に掛けた人間を受け入れることは到底無理な話であった。

しかし、それも解決されることとなった。その事件は唐突に訪れた。

それは出撃した仲間からの通信によって、真っ先に私の元へもたらされたのだ。

天龍さんが近海で発見されたのです！

俺達の戦いはこれからだ！

最近艦娘の様子がちよっとおかしい。

妹ちよみたいたいになってしまった。艦ちよ。原作より下ネタ度が上がったな…。

なにやら艦娘が俺の身边を嗅ぎ回っているようなのだ。天龍が鎮守府に復帰してからはその動きがさらに活発になってきている。俺の悪事の証拠でも押さえようとしているのかもしれない。何にせよボロを出さないようにと精神力を使うので大変だ。

天龍も、約束を守っているようでアパート生活のことは誰にも話していないようだ。途中から俺の弁当を作るようになったくらいだし、ある程度の信頼はしている。毒を入れられることも無かったしな。最初は断っていたんだが、なかなかどうして、意外にも天龍の押しが強いのでつい根負けしてしまった…。

それに最近は天龍が提督室に用もないのに押し掛けて来るのだ。今までは龍田が丁度良くストッパーの役目を果たしていたんだが、最近は無認するようになってしまったのだ。個人的には凄く嬉しいのだが、やはり共通の敵としての立場を考えると…。

「な、なあ。いつまでここに居るんだ？」

分かってはいるのだが、なかなか強く言えなくなってしまった…。正直、アパートに天龍が居ないのが寂しいなどは口が裂けても言えない。

「ん？居ると困るのか？」

「いや、まあ、困るな…。」

「なんでだ？」

「いや…：… 空気が汚れるというか…。」

「嘘だな」

「そ、そんなことはないぞ！」

「まあその心配もそろそろ終わりかも知れねえなあ」

天龍が意味深な顔でニヤニヤしている。

「どういうことだ…？」

「なに、深い意味はねえよ」

じゃあその顔はなんなんだ。

「そろそろ時間だな……。お望み通り出て行ってやるよ！」

「そ、そうか……」

やっぱり寂しいな……

天龍が出ていった扉を名残惜しく眺めていると、廊下から複数の足音が聞こえて来る。

「そういえば今後の鎮守府の運営方針に関しての提案があるんだっただな……」

扉が静かにノックされる。

「入れ」

「失礼します」

大淀を先頭に現在任務に出ていない艦娘全員が揃っている。天龍の用事ってこれのことか……。なら提督室にいれば良かったのに……。

「確か今後の鎮守府運営に関しての提案だったな？」

「はい。より具体的には提督の今後の立場に関してです」

「どういうことだ……」

「提督は実は悪い人ではありませんね？」

「……っ！ 貴様らは何を言っているのか理解しているのか……？」

「もつと言えば悪人の演技……。悪ぶっていますね？」

「泥棒の真似と違って泥棒をすれば、それは立派な泥棒なんだが？」

「認めないと言うのなら、順を追って確認しましょうか？」

「やってみろ……」

大丈夫……。ボロはないはずだ……。落ち着いて、一つ一つ論破すれば問題ない……。

「最初は護衛の任務での、謎の襲撃です」

早速ヤバイ話題が来てしまった……。

「当時は知る由もありませんでしたが、提督が艦娘だったとなれば話は別です。あの襲撃、提督の仕業ですね？」

「何の話だか分からんな……。仮にそうだとしたらなんだと言うんだ？ 民間船を攻撃してまで貴様らの任務を失敗させたことになってし

「まうぞ？貴様らの主張とは真逆の人物像だな」

「しかし、あの襲撃が原因で一週間の運営停止が決まりました」

「偶然だ・・・」

「そうでしょうか？次の日からの突然の改革。まるで運営停止になるのが分かっていったかのような手際の良さでした」

「・・・・・・・・・・」

「無くなったコンテナに関してはどうでしょうか？次の日に届けられた食料と貨物船の積み荷は見事なまでに一致しています」

「偶々・・・」

「そうですか。まだありますよ？」

「続ける」

「もう止めて！提督のライフはゼロよ！」

「家電の買い直しに關してです」

「もう、無理ぽお・・・」

「金剛さんの洗濯を見て駆け出したそうですね？」

「大本營から物資が送られて来るのを思い出したんだよ」

「本当に大本營からの物資だったのでしょうか？」

「・・・・・・・・・・」

「天龍さんによると、共有スペースの寸法を計っていたそうですね？」

「・・・・・・・・・・」

「言い訳が思い浮かんでは消えていく・・・」

「最終日に行われた課外授業と題したショッピングはどうでしょうか？艦娘の写真を撮っていたそうですね」

「経費の申請・・・」

「領収書があれば充分なのでは？それに、そこに飾ってある写真。観覧車から見た夕焼けではありませんか？」

「綺麗だったから・・・」

「そのカレンダーは？張り替えられていますね？今月は私ですか。提督は私のことが好き、違いますか？」

「違うな」

「いや、なんで天龍が否定するんだよ・・・」

「ああ、提督が好きなのは天龍さんでしたね」

「違う…。」「そうだな！」

天龍さん、本当に止めてください。これ以上俺を混乱させないでくれ…。

「では、私たちの給与はどこから出ているのでしょうか？」

「そりや大本営に決まって…。」

「嘘ですね」

「なぜそう思う…。」

「私たち兵器に給料など出ません」

「…っ！」

俺の教育は艦娘の考えを変えることは出来ていなかったのか…。

「これは呉鎮守府の艦娘の言です」

なんだ、そういうことか…。ん？

「大本営から給料など出ていませんね？」

「呉鎮守府の提督が嘘を教えているだけだ」

「大本営で直接訴え掛けた時の彼らの反応を見れば分かります。彼らは艦娘に軍人としての敬意など払っていません。ましてや給与などもっての他だと考えているでしょう」

「……………」

「極め付けは天龍さんが解体されていないことです」

「だから逃げ出したと言って…。」

「いくら天龍さんと謂えども深海棲艦の住むこの海をたった一人ですれも1ヶ月も生き延びるなど不可能です。提督が匿っていましたね？」

「天龍…！」

「オレはなにも言っていないぜ？」

「今の反応から見て当たりですね？」

「違う…。」

「提督が食事を取っていないかったこと、そしてその理由も電ちゃんから聞きました」

長門が漏らしたのかと視線で問い詰めるが…

「私は今回の件には一切関わっておらんぞ？」

「電が盗み聞きしていたのです。ごめんないなのです…。」

「那珂ちゃんを守ったこともあったそうですね？ 鎮守府祭では電ちゃんを守ったとも聞きましたよ？」

「勘違いだ…。結果的にそうなっただけに過ぎん…。」

「他にも那珂ちゃんをダンス教室に通わせたりと枚挙に暇がありません」

「どれも根拠に欠けるな…。」

「最大の証拠は今の鎮守府そのものです。提督が来る前と今とでは比べ物にならないくらいに環境は改善されています。これは全て提督の改革によるものです」

「最大限の戦果を上げるためにだな…。」

「提督よ」

これまで沈黙を続けていた長門が前に出る。

「もうみんな分かっているのだ。もう少し艦娘を信用してやっても良いと思うがな？ 私も提督の敵を演じるのも疲れたぞ？」

「長門…！」

艦娘たちがやはりといった表情を浮かべる。

「違うんだ！ 待ってくれ！」

「提督？？ 段々と化けの皮が剥がれてきちまつてるぞ？」

「生意気な、天龍の癖に…。」

「なんだと!？」

「提督が私たちの為を思い、敵として振る舞ってきたことは容易に想像がつきます。実際、そうして頂かなければ、当時の私たちでは立ち直ることは難しかったでしょう。私たちは提督に感謝しているのですよっ。」

「だったら…！」

「私たちはもう提督の思うほど弱くはありません。それとも提督は一年育ててきた部下のことが信用できませんか？」

「そんなことは…。」

じゃあ俺の存在価値はなんなんだ？ もう鎮守府に居る意味が無い

じゃないか！今までの俺の行動が理解されたところで、俺はコイツらの輪のなかに入ることなどできない。俺のような異物がここに居るには敵としてあるしかないんだよ……。だから……………」

「提督さんよお……」

どうした、天龍？チンピラに、ジョブチエンジか？

「ある心理学の実験でな、子どもを二つのグループに分けたそうだな」

たからお前には知的キャラは似合わないって……

「それで二つのグループを競争させたそうだな。結果はどうなったと思う？」

「まあ勝ち負けが決まるな。あと団結力と敵対心が生まれるな」

「正解だ」

「コイツに言われると腹が立つな……」

「で、その後に二つのグループで協力しなくちゃならねー課題を与えたそうだな。結果、二つのグループは敵対しなくなった。結局一つのグループになったって話だ」

「それがなんなんだ……」

「確かに今までのオレたちと提督は敵対してた。だがこれからは違う」

「共通の課題がない。今回で言えばお前の提示した例は役に立たん」

「なんだ？案外提督も頭の回転が鈍いんだな！」

「なに？」

「共通の敵ならいるだろうがよ」

「どこに？誰だ？」

「深海棲艦だ」

あ……………

「まさか忘れてたとは言わねえだろうなあ？」

忘れてたね……。そういえばそんなのもいたな。全てを鎮守府で解決しようとしたが故に忘れていた……

「これからは馬鹿の名は提督に譲ってやるよ！」

「だがお前がそう言ったところでだな……」

「私たちは提督に感謝していると先程も申し上げたはずですが？」
「提督は私たちの仲間ネー！」

「そ、そうなのです！」

「那珂ちゃんのファンクラブにも入ってねー！」

もう入ってます。第一号です。

「天龍ちゃんの命の恩人なら仕方ないわね〜」

「提督改め、日東丸。日本の国防の為にまた一緒に戦って貰うぜ？」

「よく俺の名前が分かったな…。」

「まあ、艦装からな…。」

「天龍ちゃんったら恋する乙女みたいに必死に調べてたのよ〜」

「た、龍田！」

そうなの？

「ち、違うからな!!全然調べてなんかねえからな!!」

「ほーん」

「なっ!!? テメエ！」

「それで? 提督は私たちとまた戦うのは嫌ですか？」

「ここまで言われて断りなんかしたら、日東丸の名が聞いて呆れちま

うからな…。まあ、なんだ、宜しく頼む」

「勿論です！」

これまでの努力は間違いじゃなかったみたいだ…。またコイツらと戦う時が来るとはな。俺は漁船だから戦うよりも釣りの方が好きなんだが…。コイツらとなら戦うのも本望なのかもしれないな。

「さて、素直になった提督にはもう少し素直になって貰いたいのだが」

これ以上なんだって言うんだ？

「提督に伝えそびれていたのだがな…。ケツコンカツコカリという制度が実装されてな」

ん? 結婚?

「指輪を天龍に渡してやったらどうだ？」

「ちよ!?!この展開は聞いてないぞ!?!おい! 龍田!?!」

「天龍ちゃんをお嫁に出すだなんて本来は許さないんだけど…。」

お前は天龍のなんなんだよ…

「相手が提督なら仕方ないわね…。」

いつから俺の評価はそんなに上がったんだ!?

「ちよ、ちよっと待てくれ提督!まだ心の準備がだな…!」
もう少し素直にか… ふむ…

「天龍」

「な、なんだよ改まって…。」

「天龍の居ないアパートに帰るのは寂しい」

「天龍の弁当がないのは寂しい」

「俺には天龍が必要なんだ」

「どうか俺とケツコンして欲しい」

「うう…。」

なかなか天龍からの返事が来ない…。やはり駄目だったのだろうか。こりや暫くは立ち直れそうにないな…。

「天龍ちゃん?」

「…こそ…よ…し…く
ん?」

「こちらこそよろしくって言ってんだよ!」

おお…。中々にインパクトのあるお返事の仕方だな。

「そ、そうか!じゃあ左手を出してくれ」

「なぜそうなる!?!」

「いや、指輪」

「あ、ああそうだったな!」

「大本営が準備した指輪じゃなくて、次は俺が用意した指輪を渡せるようにすよ」

「オレはこれでも充分だぜ?」

「俺の問題だ」

「じゃあ期待して待つてるぜ?」

「ああ、期待してくれ。その時はカリじゃなくて本当に結婚しよう」

「それは無理だろ。法律的に」

だから知的キャラは似合わないって…。

「じゃあその前に艦娘の人権を獲得しないと」

「そりやあ、長い戦いになりそうだな」

「俺とお前なら出来るさ」

「なっ!? 恥ずかしいこと言うんじゃないやねえよ!」

「まあまあ。それじゃあ色んな意味を込めて」

意外にも大人しく天龍が目を閉じる。

誓いのキスでハッピーエンドだな。